女鑑

毎月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可
明治三十五年八月五日發兌

第貳百五拾八號

東京國光社

女鑑第貳百五拾八號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割増の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

定價

一冊 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年八月四日印刷
明治三十五年八月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊素一

東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地
印刷人 蛯木眞雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元 株式會社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八)

總裁小松大宮妃殿下副總裁鍋島侯爵令夫人

大日本女學會發行

東京麴町區下二番町三七

をんな

第二卷第七號發兌

毎月一回十五日發行
定價金拾五錢
全國無遞送料

（卷首）蓮月尼の畫像及び遺物の眞筆

（論說）今日の日本婦人に特殊なる天職　五十嵐力●婚姻と法律　愛南學人（學藝）和書解題（十六夜日記）　吉田文學士●漢書解題（史記）　丸井文學士●明治維新の原動力（五）　津田黄昏●沙翁梗概　中島孤島●バクテリアの話　服部廣太郎●作文批評　今泉定助●作歌批評　大口鯛二（修身）學校の感化と家庭の習慣とに就て　嘉悦政子（齊家）割烹　石井泰次郎（世務）法制談（地方自治體）　岡戸論介●經濟談　伊藤秋南●各地產業の實況（二十二）松永鹽（譚叢）新家庭の一日（其二）　稚松園●雲雀の雛（上）　大塚素江（詞藻）租税の歌　縦の舍主人●正式歌會の歌（鍋島侯爵邸に於て）●みやび會員詞藻（雜錄）蓮月尼の畫像及び遺物の寫眞に就て●朝鮮國釜山の氣候風俗習慣產業に就て　在韓國內海房壽子（圖案）武村千代子●婦人論梗概（彙報）內外要報十數件

大賣捌　東京市神田區表神保町三　東京堂

▲家庭第一の讀もの▼

女子新聞

◉第壹號　當月十日發行

本紙は毎週一回日曜日に發行し、女子の好師友たることを期す、記事の主要は

第一　女子教育に關する諸家大の意見を發表す

第二　女子に關する諸般の出來事を報道す

第三　女子の學ぶべき諸藝の通信教授をなす

文字は何人にも解し易かるやうにし、記事はすべて實用を主とし、卑猥なる文字は載せず、猶其内容を細別すれば

◉其一　社説論説○其二　一週間の出來事○其三　禮節作法の事○其四　談園○其五　小説講談○其六　茶の渇湯花の事○其七　裁縫編物の事○其八　割烹の事○其九　賢婦烈女の事○其十　文園○其十一　音樂の事○其十二　笑林○其十三　育兒法の事○其十四　衛生上の事

定價　一部金參錢　一ヶ月前金十錢　半年前金五十五錢　一年前金壹圓

發行所　東京京橋區鈴木町十一番地　女子新聞社

▲會員募集▼

◉規則要目

◉本會は日本音樂の改善發達を期せんが爲演奏會を舉行す

◉本會は當分日本橋區島町常盤木倶樂部にて舉行し其都度時日及曲目を會員に通知すべし、

但し演奏會は一ヶ年六回（一、三、五、六、九、十一月の第三日曜）舉行す

◉本會は何人にても入會するを得、

◉本會の演奏會員を分ちて、名譽會員、特別會員、通常會員、の三種とす

◉會費は特別會員は一回金壹圓）通常會員は同金五十錢）名譽會員は本會の推薦に應じて入會せられる者

◉本會に入會希望の方は日本橋區龜島町二丁目四番地大日本音樂會事務所宛申込まるべし

◉本會の演奏は日本音樂中高雅なるもの又務めて廢れんとしたる古雅音樂を紹介す

◉本會々員には週刊女子新聞（毎號音樂上の記事あり）を無代配布す

大日本音樂會



戸田伯爵夫人極子



東京女學館講師田中花子刀自

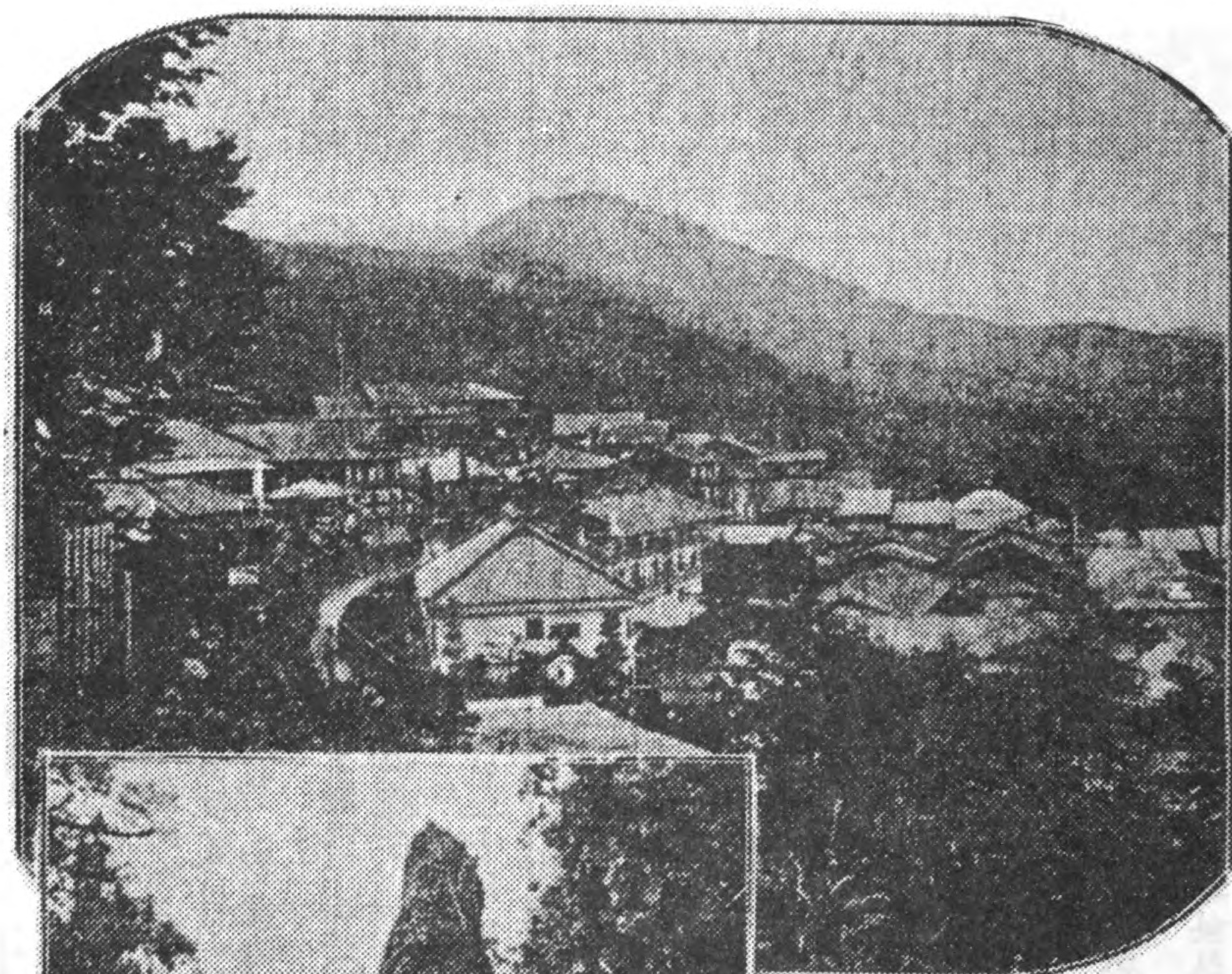


東京府第二高等女學校教諭小寺あや子刀自



華族女學校第十七回卒業生

伊香保温泉場

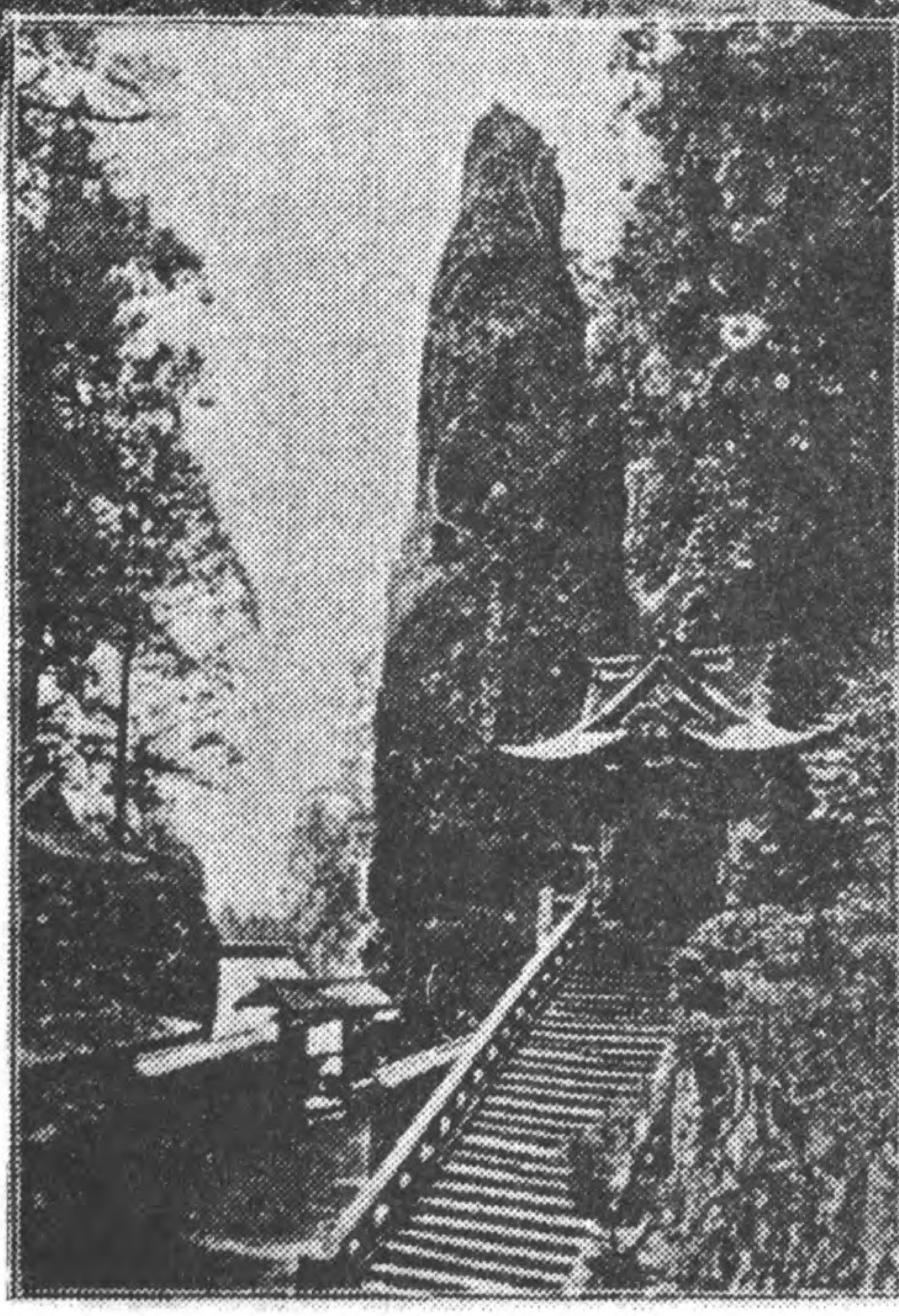


物聞山（伊香保八景之一）

夫木集

伊香保なる物聞山の郭公
にこらぬことに聞ゆなるかな

伊勢



榛名神社　鋒ヶ嶽巨巖

廣告

◎目的　女子に和服裁縫の技藝を授け兼て修身及び家事經濟の概要を教授し以て温良篤實なる女子を養成するを以て目的とす

◎學科　本校の教科を本科高等科の二種とし一學年前期後期に分つ

◎修業年限　本科二ヶ年高等科一ヶ年を以て卒業せしむ

◎學科課程　學科課程左表の如し

學科課程

學年	期	裁縫	修身	家事經濟
本科一學年	前期	運針法 縫方	人倫道德の要旨作法	衣食住
	後期	縫方 裁方	仝上	同上
本科二學年	前期	同上	仝上	看護 育兒
	後期	仝上 繕方	仝上	同上
高等科	前期	同上	仝上	經濟
	後期	同上	仝上	同上

◎學期　前期は四月一日に始まり九月三十日に終る後期は十一月一日に始まり翌年三月三十日に終る

◎授業時間　每日午前八時に始め午後四時終る

◎試驗　各學科共前後學期末に試驗を執行し其の平均得點六分以上のものを及第とし學年末に於て證書を授與す

◎束修及授業料　束修金壹圓入學の際納付し授業料は高等科壹圓貳拾錢、本科二學年金壹圓拾錢、本科一學年金壹圓、とし毎月五日迄に必ず納付すべし

東京市京橋區南八丁堀一丁目廿五番地

私立東京裁縫專門學校

當分の內隨時入學を許す

規則書入用の人は郵券三錢を添へて申込まるべし

福羽美靜大人序文
下田義天類大人校定
指原乙子女史編纂

女子文章軌範

全一册
和装美本
定價金參拾錢
郵税金四錢

本書は上長德の頃より下明治の初年に至る九百年間に輩出せし名媛紫式部、清少納言、相摸、阿佛尼、鵜殿よの子、弓屋しづ子、三島さや子、荷田蒼生子、西三條實條公後室、榊原氏の母、馬場存義の母、千代、梶女、千代能、その女、河内猨子等の傑作中に就き其の最も精を拔き粹を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序跋、教訓、論文の七門に分ち每章末に其の作法を詳解し尙難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之善く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる脩身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必ず無比の好伴侶たらん

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社　國光社出版部

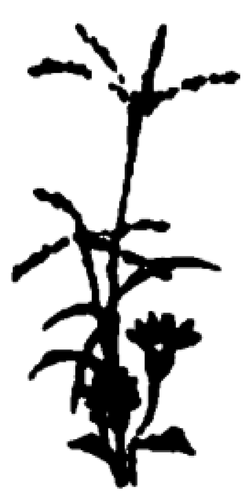
杉谷正隆編

家庭歌訓　修身百首

菊版美本全一冊

定價金二十錢　郵稅金四錢

此の書は我が國古來の和歌の中につきて修身訓誡となす可き歌一百首を擇び、之に深切なる義解を附し一讀人をして其の本義を了得して大に發明する所あらしむ淑女諸子一本を購ふて德器を養ひ給へ。



伯爵副島種臣題字　新泉堀内文曁編

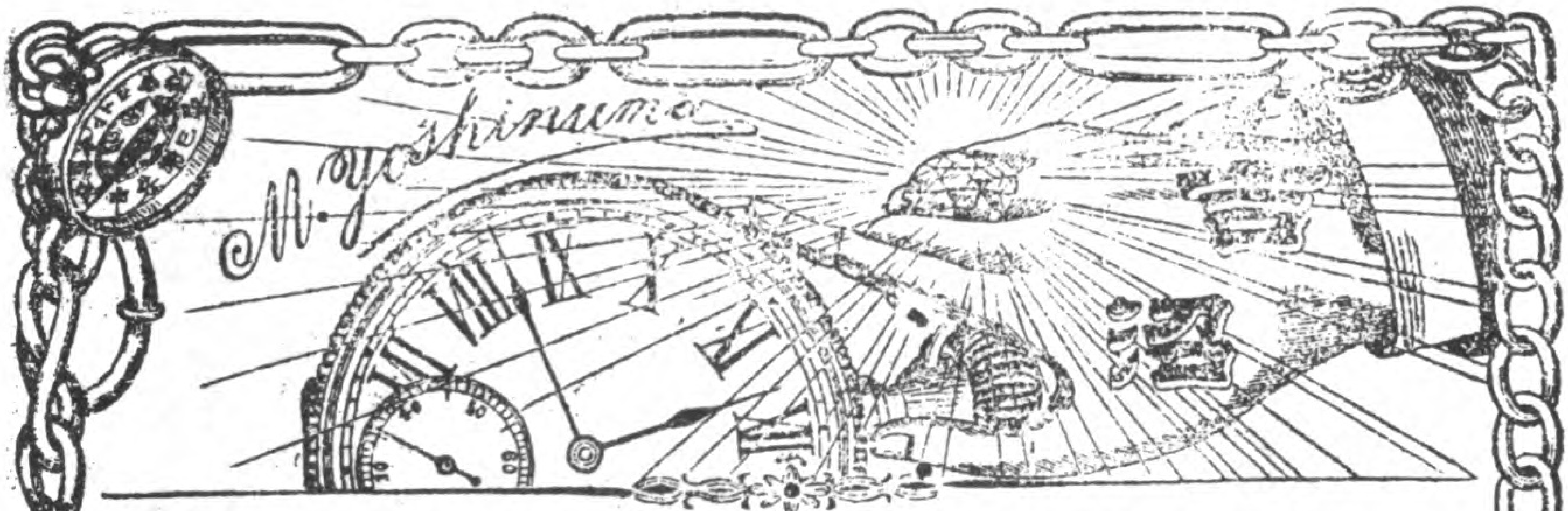
家庭の鑑

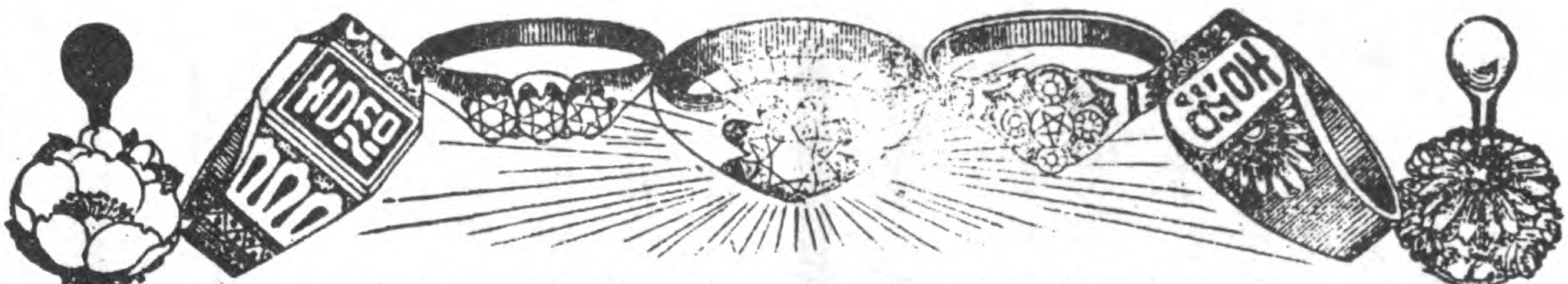
訂正第三版　菊版全一冊

定價金十八錢　郵稅金四錢

本書は現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして其收むる所皆是れ人の子弟婦妻の模範たらざるはなし殊に編者が婉麗哀痛の筆を以て精密に事實を寫したれば情味津々たり世の教育家及父兄子弟夫妻の座右には一日も此可憐の書冊なかるべからず。




M. yoshinuma





論說

母親の心得（承前）

愛敬女學校長　棚橋絢子

さて幼兒の教育に至りては、一に家庭にあり。其幼孩なる時は、接する者は唯に家族僕婢に止まれども、稍々長ずれば朋友をも生ずべく、また四隣の狀態を見聞し、是に感化する事もあるべければ、幼兒が感化を受くべきものは、家族、僕婢、交友、四隣、外に見聞等あり。家族即ち祖父母、兩親兄姉等より幼兒が感化を受くる事の非常なるは謂ふまでもなしと雖も、茲に最も注意すべきは其兩親なりとす。中庸にも、君子之道、造二端乎夫婦一と云ひ、夫婦は人倫の初めなり。一切の德の根元なり。主人夫婦端正ならば、一家は自ら端正とならむ。されど父母たるものは、幼兒の氣質の僻まざる樣、我が儘ならざる樣、虛言せざる樣些微の點に至るまで注意し、其美質良性を育成し、寸時も之を忘るべからず。かくて之を成すには、自己の言行を以て模範を示すべし。「幼兒は成人が若し教へずんば步行することすら能せず」と諺に云ふが如き者にして、其氣質言語動作は、悉く其外圍にありて見聞したるものを模し、習は直に性と變ずるものなり。（幼兒の兄姉と雖も、もと同じく此父母より出でたるものなれば、父母にして端正ならば、兄姉も既に端正と成り居るべき也。）父能く其老祖父母に仕へて人の子たるの本分を盡

くし、母能く舅姑に奉仕して婦道を缺くなくんば、其幼童も自から化せられて孝子たるべし。昔鬼の如き夫婦ありて其老父母を虐待し、缺け椀を以て飯を與へしに、或時其幼兒等飯事して遊ぶに、又缺椀を以て己が父母に進らすべき椀と定めけるを見て、悚然として其非を悔悟せしとの噺あり。父母の行爲は直に兒童の模する處あるを以て、非常に注意すべし。殊に母は最も多く之に接近し、最も多く感化するものなるを以て、深く注意すべし。前にも云ひし如く、兒童は最も眞似するものにして、此眞似はやがて習となり、習は性と變ずる事速かなれば、父母たるものは、其言行を方正謹嚴にして、兒童が眞似るは、慶喜すべき者あらざるからず。

兒童には、虛言するの僻を生ぜしむべからず。之には己れまづ虛言すべからず。殊に兒童に對しては、假且の瑣事にても虛言すべからず。世に兩親たるもの、或は兒童が泣きを止むる等、其他些細ある事の爲に些細なる虛言をなすあり。これ誠にいたましきことといふべし。親の身にとりては、直に忘るべき口まかせの虛言なりと雖も、之を信ずる兒童の身にとりては、やがて其言と實との合せざるを發見し、遂に虛言の何たるを知り、虛言にて之を發するを憚らざるに至り、こゝに信なく義なき惡性の種は蒔かれ、他日鬱蒼たる毒樹たらむとす。よし其芽は、萬一に後來の敎育に依て摘去せらるゝことあるも、其種は生涯其心裡に潜伏し、時ありて發生すべし。誠に恐るべきなり。

且幼兒をして卑怯ならしむ可らず。過を改めて善に進むの氣象を養生すべし。幼兒若し知らずして過失せば、徐に其行の非なる所以を敎示して、之を再びせざる樣にさとすべし。之に反して萬一

知りながら、之を行はしむるが如き形蹟あらば、何等の意思より之を行ふに至りしかを探り、其根本に遡りて之を正し、幼兒をして其過を知らしめ、眞に之を悔悟して善に進む樣に訓戒叱責すべし。愛に溺れ、之を蔑にして顧みざる時は、やがて不善を行うて憚らざるに至るべければ、斷じて愛に溺るべからず。愛に溺るゝは愛するの道にあらずして、却て之を傷ふものなり。愛兒の不善を叱責して匡正するは、其病ある時藥を呑ましむる如し。愛兒の是を苦しとすればとて、たゞに捨て置く親あるべきやは。然れども或は一旦の怒に任せ、或は幼兒をして過を再びせしめざらむ爲に叱責度をすごし、或は苛酷の處置をなし、幼兒をして卑怯ならしむべからず。卑怯の氣質は誠に賤しむべし。諂諛、詐僞、虛言、不義等の惡德之より生ずるもの多し。幼兒には、生々たる元氣と悅樂の氣象とを保有せしむべし。是堅忍不拔にして、正を踏んで怯れず、進取の氣象ある男子を作る道にして、溫順閑雅、春の如く美質洋々たる淑女を作るの法なり。

また攝生の德を養生すべし。攝生は克己の一にして、肉體的快樂の誘惑に抵抗する處の德なり、是實に幼兒が後來人たる生活をとぐる重大要件なり。幼兒をして敬神尊佛の行爲を目睹せしめ、之に純潔高尙にして、健全なる宗敎心を注入すべし。普通人類は、宗敎なくして生存し得る者にあらず、而して宗敎には純潔高尙健全なるものと、卑褻賤膚なるものとあり。故に之に高潔なる宗敎心を注入するは、即ち卑醜なる宗敎を排除し、不合理なる宗敎に感染する害毒を免れしむる所以なり。人間は信仰する處なくんばあらず、必ず一箇の信仰あるべきを要す。信仰心なき人は、今日あるを

知りて明日あるを知らず。惡をなして憚る事なく、不義を行ひて懼るゝ事なき人には、破戒無慚の行爲相伴ふは敢て怪むに足らざる也。況して不健全なる宗敎を信ずる害毒に到りては測知すべからざる者あり。敬神尊佛は之れ祖先を崇敬し、道を尊信するものなり。道を尊信して初めて人生の事業に意義を生じ、至誠至德の人たるを得べし。祖先を崇敬して初めて家を重んじ、國を重んじ、君上に忠に親に孝なる人たるを得べし、此精神を須らく幼兒たる時より養成すべきなり。其他自然の美を愛する性質等種々いはむと欲する點あれども、今や冗長に亘るを避け、幼兒敎育上、褓姆僕婢等に對する注意に移らむとす。

◎褓姆僕婢　幼兒を乳母に托するは甚だ不可なり。母の子に乳のますは當然の事にして、之を敎育上より見るも頗る必要のことなり。止むを得ざる場合の外は、乳母を用ゐざるを當然とす。富貴の家に生れ、育兒の煩勞を厭ひて乳母を用ゐる輩の如きは、兒を愛するの念うすく、親子の情冷かなるものにして、人間としては卑しむべき行爲といふべし。さて止むを得ずして乳母に托せざるべからざる場合には、豫め乳母の氣質を充分に探索し、善良方正の者にあらずんば採用すべからず。世には乳質の良不良のみを檢して、其氣質を問はざるもの多し。乳は身體を育成する者を其純良ならざるべからざるは論なしと雖も、乳母の氣質はやがて幼兒の氣質に感化するを以て、深く注意せざる可らず。又縱令善良の乳母を得たりとするも、之にのみ托して顧みざるは、母子の情として到底忍ぶ能はざる處なれば、斯る憂なかるべけれども、若これあらむか、甚だ危險なる事なりとす。乳母の如きはたとへ其氣質善良とするも、もと身

分も賤しくして精神に修養なきを常とするが故に、知らず〳〵宜しからざる風習を幼兒に感染せしむる事あらむ。深く注意せざるべからず。

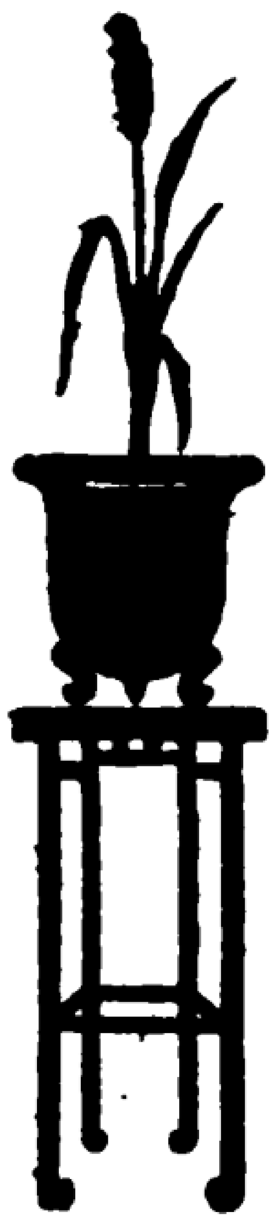
幼兒が僕婢より受くる感化は之に接する度の繁きが如く多かるべし。されど僕婢の選擇に注意すべきは勿論なれども、其選擇を經て雇ひ入れたる後も、能く注意し能く訓戒し、之をして惡習弊風を幼兒に傳へしめざる樣心がくべし。これ頗る難事なれども、又必要の事なるを以て、其事の難易を問ふて忽にする事あるべからず。茲に日常起る事にして注意すべきは、幼兒過失ありて親之を訓戒叱責するに當り、幼兒未だ悔悟せずして涕聲を發する如き事あらば、下女下男走り來りて、代り詫びて幼兒を伴ひ去ることあり。これ決して幼兒を匡正するの道にあらずして、其過失を匡正することなきに終らしむる者なるを以て、堅く禁ず可きなり。これやがて過ちて改めざる氣質を作るに至るべし。堅く注意せざるべからず。又幼兒をして僕婢に對し放恣ならしむべからず。兩親が躬行模範を示すべき事なるは他の事に同じ。若し幼兒にして奴婢に對して放恣の擧動あらば、直に之を匡正すべし。其對手が奴婢たるの故を以て看過するは甚だ不條理と云ふべし。宜しく之を匡正すべし。然らざれば後に暴戾傲慢の氣風とならむ。但し、僕婢をして幼兒に直接に簡易なる事理を說かしむるはよけれども、之をして主從の別を失ふに至らしむべからず。

◎交遊　兒童やゝ長ずれば遊び朋友を生ず。是また深く注意せざれば、家庭の折角の教育も忽ち破壞せられ、惡習弊風に染みて洗滌すべからざるに至らむ。故に幼兒を全く放任して顧みざる如きは、實に危險甚だしきものとす。又やゝ長じてよ

りの交友には注意しながら、最も感染せられやすき幼時の友には注意せざるもの多し。彼より寧ろ此に注意すべきに、斯の如きは甚だ謂れなきことと稱すべし。父母殊に母たるものは四隣の幼兒の氣質風習を細かに觀察し、不良の者とは遊ぶを禁じ、善良の者と遊ぶ事を或は時に菓子玩具を與へて奬勵すべきなり。

おのれは、女子教育に就いて述べむとするものなれども、幼兒たるや、男女の教育に於て些少の差異はあるべきも、大差なかるべきを以て、以上は双方に通じて述べたるものと思はるべし。

（未完）



家庭に於ける兒童の個性教育

田中嘉三郎

家庭で兒童の個性教育をすることは頗る緊要なことで父母兄姉の一日も忽にしてはならないことであります御參考のため其教育法の大略を御話しいたします、今解り易いために次の樣な題目を設けて説明しやうと思ふのです

（一）緒言、
（二）個性の説明、
（三）先天的個性及び其教育法、
（四）後天的個性及び其教育法、

一、緒言

讀者諸氏夙に御存知の如く人は其顔が違ふて居る通りに性質も違ふものであります、大人は長く世

間に教育せられて事の利害、適不適を考へて居りますから幾等か自分の性質を矯めて居りますけれども兒童と云ふものは中々そんな事を考へて動作するものでありませんから其性質も殊更ら目立つて餘計に違ひます、或る兒童は賢くて優しいけれども或る兒童は亂暴で勉强しません、同じ兒童の性質の中でも或る所は善くても或る所は惡いものであります、それ故に兒童を教育しまするには深く此事に注意して其兒童の特別な性質を研究してそれに最もよく適して居る所の訓練をせんければ割合に教育の効がないばかりではなく時としてはとんでもない結果を生ずることがあります

所が學校の教育は此點に就いては聊か効力がないのであります、學校では一つの教場に四十人も五十人も一所に入れて同じことを一樣に教へますから、一人一人の兒童、性質、知力、感情に適應した教育は出來ないのであります、學校教師は此點にも餘程注意して居るのでありますけれどもそれかと云ふて一人一人別々に教育される譯のものでもありませんので、仕方なしに今日の樣な教育をして居るのです、勿論今日の學校教育には澤山な長所があります澤山な長所がある代りに又缺點も多少あるのです其缺點の著しい一つは則ち前申した或兒童に限つて特別な教育をすることの出來ないことであります、故に充分なことを云ふと學校教育と特別教育と兩方施行するのが何よりの名策であります、然し幾等名策だからと云ふて到底學校では兩方施行する譯には參りませぬ、つまり其の特別教育はおもに家庭で遣るよりほかはありません。

二、個性の説明

前申した特別教育を家庭でいたしまするとしても

教育學や心理學に通じた教師を備ひ入れて其兒童の教育をすることは中々容易のことではありませんから先づ父母とか兄とか姉とか何でも年の多い御方が遣られるのが何より宜しいのであります、此の兒童の特別な性質をば名づけて個性と云ふので、親代々の遺傳や、周圍の事情や、一身の境遇に依つて其兒童に限つた所の性質偏向を申すのです、他人は言ふに及ばず同じい兄弟の內でも體格知識感情などの大變に異つて居るのは元來この個性が等しくないからなのです、故に家庭で兒童を教育して行かうとするには其兒童の個性を能く辨へてそれに適當な教育を施さんければならないのですから、今少しく個性のことをしくまをしませう。

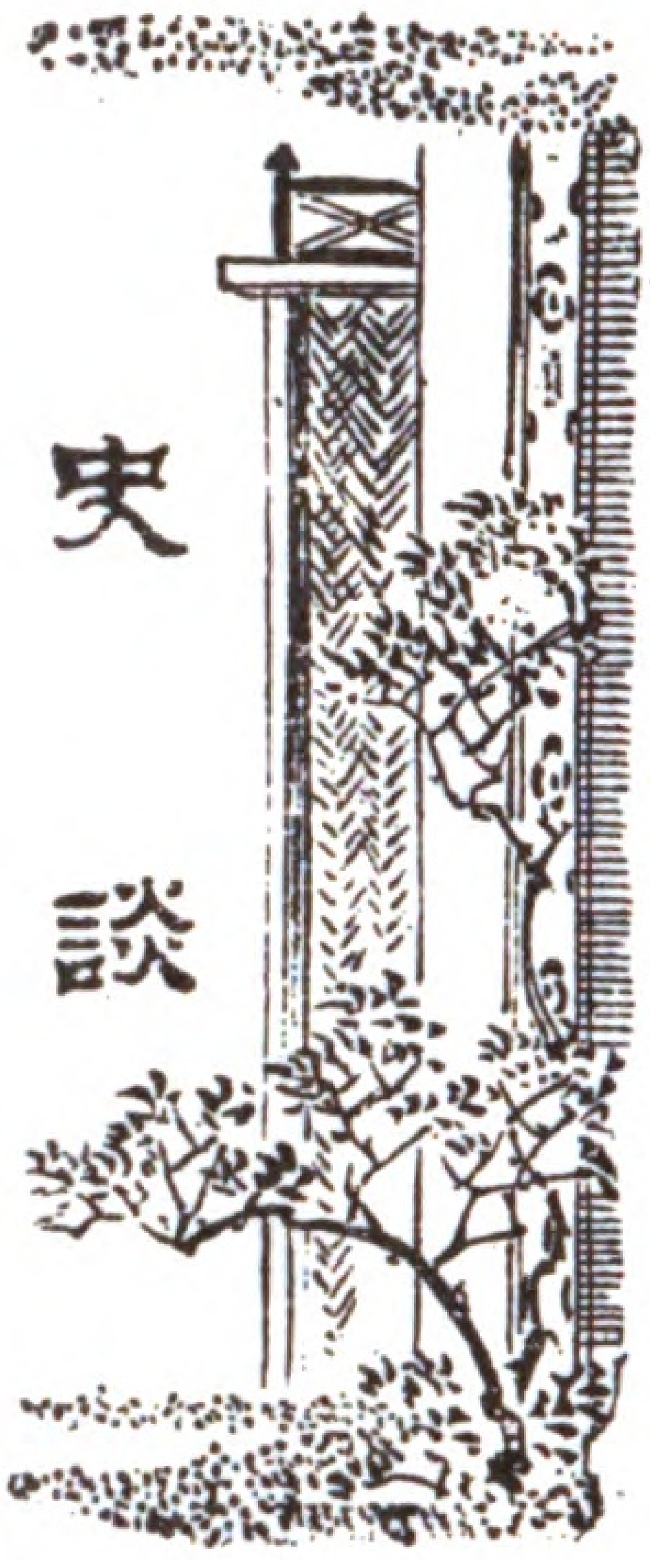
●●●●●●●●●●●

●個性に二種あること　兒童が各々其個性を異にして居る理由は大凡そ二つに別けることが出來ます、(一)は兒童が生れ落ちた時旣に違つた個性を身に備へて來るもので之を先天的稟賦と申します、(二)は生れてから後段々と個性を異にして來るもので之を後天的習性と云ふのであります、先天的稟賦と申しますのは男は男の個性、女は女の個性を有つて居り又親から遺傳して來たものを指すので、後天的習性と申すのは生れてから後住所の狀態や其身の境遇や家內の關係や教育の力などで段々變つて來るものを指すのです、

先天的稟賦は教育の力によつて多少は伸ばしも矯めも出來ますけれども元來餘り變遷するものでもないのですが後天的習性は日々に變つて行くのでありますから幼少な時代から深く注意して惡い習性を付けない樣にしたら幾等でも伸べたり矯めたりすることが出來ます、親達や教師の氣を付けんければならぬのは重もに後天的の方であります、

有名な孟母三遷の話は此後天的個性の教育に注意したのであります、併し教育の上から云ふと先天的も後天的も何れの個性も疎忽にする譯には參りませぬから兩方の個性研究は並行して進むべき筈のものであります。

●個性は男女によりて大に異ること　個性は人によつて違ふものだと云ふことは前申しましたが一番見易く解り善いのは男女個性の相違であります、生れて十歳頃までは男女ともに著しく個性に相違はありませんけれども、其後は順々に身體の構造組織が違つて參ります、男は一般に長けが高くて強いが女は大概低くて力も弱いのですそして精神の作用も餘程違ひます、則ち女子は物を記憶いたしまするにも有りの儘に具體的に記憶して其原因結果の關係などは餘り追求いたしませぬが、男子の方は道理から進んで抽象的に記憶し其因果の關係などは論理的に研究いたします、又物を考へるにも女子の方は是迄見聞したことより以外に出で思考する力は少い則ち復現的のものであります、之に反し男子は從來の經驗からして種々構想いたします則ち創造的であります。又感情意志の方から述べますると男子は凡べて發動的で意志の力が強いけれども女子は寧ろ受動的で感情が烈しいのであります故に男子は活潑で物を仕遂げる氣が滿ち〳〵て居女子は優しくて感じが強いのであります、昔から男子は外交的で女子は内政的であると申しますのも此譯であります、斯樣に男子と女子とは其性質が殆んど相對して居りますから其教育の方法も自ら別であるから家庭での躾方讀み物などは氣を付けて擇ばねばならないのであります。



宮島ぬい子

文學士　大町桂月

（前號口繪參看）

ぬいは、山形縣、南置賜郡、米澤、直峯町、宮島中右衞門が三女にて、人となり貞實、幼きより孝心深う、只父母の膝下にやさしうかしづきけるが、元治元年十二月、父なる人、中風にかゝり、慶應二年七月、母なる人、また同じ病の床につき、共に起居自由ならざるに、はやく老耄し、自ら家の貧困を忘れて、飲食度なく、かてゝ加へて、叔母なる人さへ腹水病にかゝり、三人枕を並べぬ。時にぬい年十二歳、まだ纖弱き身の母の手をかいなで、父が腰をさすり、叔母をいたはり、心を碎きて介抱し、あまつさへ、男子は外に活計の務めもあり、女とては只ぬい一人なれば、薪水の勞をも一人にて引き受け、日夜苦心云ふばかりなけれど、已が心勞はつゆいとはず、たゞ父母と叔母との病の平癒を祈り夜半半里ばかりある山路をひとり越えて、遠山村愛宕神社に祈願し、或は野州那須湯を始め、陸前國釜崎の湯、岩代國飯坂の湯に父をつれゆき、兄を助けて、懇ろに看護したれど、父や、天命つきたりけむ、明治二年八月、遂にみまかりぬ。孝女が悲しみは云ふばかりなく、後は偏に母と叔母との介抱に心力を盡くしぬる程に、明治六年二月、兄虎太郎、數多の病人に資力もつきはて、活計に切迫しければ、商業のためとて、兩人の病人をおきて、北海道に赴きしまゝ、歸國せず。之によりて、病人大に氣力をおとし、病勢いよ

〳〵募りけるに、ぬいが心痛は云はん方なく、明治八年、叔母を親族に頼み、自ら母を背負ひて、路程一里半餘の斧川温泉に二週間入浴せしめぬ。時にぬい十七歳、今は春の最中に草も木もなべて錦をかざれるに、これは衣服も髪もつくる暇もなく、たゞ母を思ひて寸時も他を顧みず、或時は西裏の野邊に背負ひて筵の上に坐らせ、羽山愛宕の遠景を眺めさせ、また近傍に神社の祭典ありて、往來の雜鬧せる日には、家の門のほとりは云ふも更にて、町内入口に背負ひ出で、其心氣を慰め、心のかぎり介抱したれど、あはれや、明治九年二月、母は病かさなりて、心氣をさへ失ひ、火燵に足を灼爛し、命もおぼつかなきに、ぬいは身もよもあられぬ思ひ、また〳〵遠山村愛宕神社へ立願し、三日三夜斷食無言の業をなして、己れまづ死なんばかりに祈願せしかど、神はうけずやありけん、明治十一年六月母終にみまかりたり。ぬいは己が玉の緒も共に絶ゆるばかりに悲しみ、天に呼び、地に叫べど、幽明路へだゝり、九魄また還らず、是非なく殘る叔母を母と思ひて、看護厚く、はては置賜郡山崎村稻荷の靈驗いやちこなるを聞き、病婦の看護を次兄義正に依頼して、自ら垢離を取り、七晝夜斷食して、叔母の平愈を祈れど、絶えてしるしなく、日に増し叔母は衰弱して、腹部ふくれて、苦痛見るに忍びざるに、また〳〵看護を兄に任せ、西置賜郡高玉村稻荷神社へも晝夜斷食無言の參籠をなし、滿願歸宅の日、遠山村愛宕神社祭禮の折からなりしに、たゞ粥を啜りて腹を滿たせ、大暑の節、冬の裝束にて、徒足まゐりをなせるなど、常人の能く及ぶ所にあらず。頃しも同所に住みける、舟田源太郎といふものゝ嫡孫もまた病重く、玉の緒もたゆるばかりなりとき

き、此の人にはかねて、眷顧の恩あり。之を報ずるは今日なりとて、大雨中身に蓑笠を纏ひ、愛岩神社に丑時參りをなし、祠官に祈禱をたのみ、神符をうけて舟田に與へけりとぞ。其の義に厚きこと、きくもの、みな感歎せざるはなかりき。
翌十七年三月、叔母病勢益つのりければ、重ねてまた七晝夜斷食にて、高玉村稲荷へ祈念せり。折りから、兄義正、數年來の病人に貧窮ますく迫りけるに、またもや商法に失敗し、困難云はん方なきを、ぬい女、己があるかぎりの手道具衣服皆賣拂ひて藥餌に供し、深夜いねずして、機を織り、得たる所の賃錢は、叔母に與へて、好むものを求めさせ、己れは三度の食を二度にし、或は粥をすすり實母の如く介抱したれど、天命は如何ともする能はず、終に十八年一月、叔母またみまかりたり。あはれ心身くだきて平癒をいのりし三人が三人ながらかへらぬ人となりはてし孝女が後の心は如何ありけん。さながら泣く涙雨とばかりふりけるに、見る人々みな袂をぬらしつゝ、かくては三途の川の水もまさりて、中々に佛につくす心ならずとさとされても、慰められても、止めんとしてもなほ血の涙を流し、哀を盡しけるとぞ。これより先き、ぬい女を媒介する人度々ありしかど、堅く辭みて嫁する事なく、たゞ病人の看護と、家計の再興とを己が任とし、兩親並に叔母に孝養をつくすこと前後十有九年、病者死したる後は、晝夜糸をくり、機を織り、孜々汲々、家業に從事して、偏に一家の再興をはかりければ、郷里の人々感せぬものはなく、遂に明治十九年四月、官より褒章に添へて、金拾圓を下賜し、其善行を彰はされたり。

戰場の名花

文學士　濱田廉

北亞米利加洲のオハイオ——河岸に聳ゆる顯理砦と云へる小境寨あり。西暦一千七百七十七年の頃とかよ、其附近に住みし印度人の一群は、俄に蜂起して、この寨を攻撃せり。その數約五百人ばかりなりしが、砦の守兵は纔に四十二人なりき。剩へその三十人は砦外の鍛にて擒にせられ、攻撃の始まりし頃は一揆の毒手に斃れたり。されば守兵は唯十二人のみ。その時守兵等おもへらく、戰ふも死し降るも死す、死するその身は惜しからねど、いとほしき妻愛々しき子等も、亦敵手に横死せざるべからず。あはれ玉の緒つゞかん限り、城を枕に花々しく討死せむ。かく雄々しき決心しながらも、守兵たゞ十二人なりき。危いかなや顯理の砦！、

しかもあはかなしきは、彈丸硝藥の缺乏せしとなり。守兵の雄心は矢竹にはやれども、彈丸なくば何とかせむ、硝藥なくては戰ふすべもなし。各人數發の後には、手を空しうして命を天に任せざるべからず。哀れむべしや顯理砦の守兵！

されば司令官はこの勇敢なる十二人の守兵を一堂に集めて語るらく、この砦外約六十呎にして一宇の家あり。中に一樽の硝藥を蓄ふ。敵未だそこに闖入せざれば、誰かこれをこの砦に致すべしと、しかれ共そは生命を賭せざるべからず、故に司令官もかゝる任務を部下に命ずる事の刻薄なるを知れり。されど硝藥は彼等の生命なれば、必ずこれを致さゞるべからず。その部下に就てこの危險なる大任を遂ぐるものを求むるは、その當然の職責たりしなり。人に長たるものこそ、かゝる時には

いとゞ苦しきものなれ。

暫にして三四人の兵士身を挺んで、この大任に當らんことを請へり。然れども要すべきは一人なり、殊に砦中小人數なれば、一人たりとも惜まざるべからず。故にこれらの兵士共は、互に相爭ひて我まづ此名譽ある任務を尽さんと、かしましく爭ひのゝしり合ひし折しも、又もや一人の候補者顯はれぬ、その人はそも誰ぞ?

エリザベス、ゼーンなる一少女は、司令官の側近く進み寄りて、自らこの硝藥運搬の任に當らんことを申告せり。千軍萬馬の間を馳せめぐりし兵士にも、かゝる任務は危きはみなるを、ことし甫めて十七歲のゼーンには、いかでかその成功を望むべけん、さればゼーンの請は直に拒まれたり。されどゼーンは懇願して已まず。父母の誡めも朋友の諫も皆却けて、たゞ熱心に請願せりき。今はいかなる辯論も説諭も、悉く功なかりき。纖弱なる女子は、疾くえ走らず、重くえ擔はず。敵に捕へらるゝ患も多ければ、强て思ひ止まれと諭せし時、ゼーンの答へけらく、妾も固よりその甚だ危險なることを知れり、されど妾が存亡は砦中の强弱に關ることなかるべし、但し男子は一人たりとも失ふべからず。妾が長上朋友の諫にそむくもこれがためのみ。願くは妾が微衷を諒とし給はれよと、あはれゼーンの言葉も眞理なりき、遂に其請は容れられて、十七歲の少女は蛟鰐の淵に望まんとす。嵐の前の花一輪、散るや散らずや。ゼーンは全く準備し了り、城門は開かれぬ、彼女はうち開けたる戰場を、兩軍環視の中に、かなたの家をこゝろざして速く走せ出せり。砦中の人々は、印度人の滿目がこのゼーンに注がれしを明かに認めたり。されど印度人は奇を好みてか、或は

た讓歩せしか。ゼーンに向つて一矢を放たんとも
せざりければ、ゼーンは安らけく戰塲を過りて、か
の家に入ることを得たり。砦中の人々は安心の大
息つく〱と、しばしは胸なでおろせしかど、歸
路こそ一しほ心もとなけれ。砦中の衆目は今やお
そしと胸さはがしつゝ打まもる程に、ゼーンは机
布に硝藥を包みて、腰に結び、兩手にこれをさゝ
へて家より現れ出でぬ。この時印度人は既にゼー
ンの擧動を疑ひたりければ、ゼーンが砦をさして
急ぎゆく後より、印度人の放ちし彈丸飛箭は、驟
雨の如く落ち來りぬ。されど神の守りけん、ゼー
ンの身體は一つの傷も負はずして、彼女は硝藥を
抱きつゝ、いよ〱こなたにいそぎて、遂にこれ
を城門の中に致したり。あはれうら若き一少女が
このいさましき行爲を見ては、何者か奮起せざら
ん。

砦中の兵士は一様にゼーンの勇氣にます〱鼓舞
せられ、又ゼーンが齎せし硝藥の力によりて、援
兵の來りしまで、この小砦を死守して撓まざりき
かくして一少女ゼーンの大膽なる事業は、遂に野
蠻なる五百人の兇敵を敗りて、能く砦中十一人の
生命を九死の裏に救ひ得たり。歲寒くして松柏の
凋むに後るゝを知ると云ふ。邊理の砦危くして、
ゼーンが勇敢は顯れたり。盤根錯節に遭はずんば、
刀の利鈍を分つべからず。危急に臨みて畏縮する
如きは、ゼーンに恥ぢずや。誠に平素の心がけこ
そ肝要なれ。殊に我邦は武を以て國是となせば、
婦人女子と雖も一朝變あらば、與つて難に赴くの
決心なかるべからず。徒に人情を説き風雅を弄ぶ
を以て、婦人の能事了るとなすことなかれ。され
ど注意せられよ。予は婦人に向つて擊劍を學び柔
道を修めんことを勸むるにあらず。かくの如きは

婦德を紊ること少小にあらず。たゞよく大和心を體して國家に對する婦人の義務を盡さんことを望むのみ。

西比利亞の孝女（其二）

宮館さだ子

皇帝の恩詔杳として到らず、夫妻相擁して薄命を喞つのみなりしが、一日『プラスコヴィー』、例の如く野仕事を了へて、家に歸りけるとき、父は常になく深き思ひに沈みて顏色青ざめ、母は其側に在りて涙に咽びつゝあるを見て、痛く打驚き、やをら身を起して父に抱き付き、兩眼に溢るばかりの涙を湛へて、其故を問ひしに、是迄は深く夫妻の間に秘め置き、一家の眞狀に付ては、如何なる場合に於ても、決して其最愛の娘に語るまじと決心したる父『ロポーロフ』も、我が子のいぢらしき至情に絆されて、其刑餘の人なること、最愛の妻子にまで、かゝる憂きめを見することのいともつれなきこと、さては、今回宮廷の吏員到着したりしかど、哀願の竟に聽屆けられざりしこと等殘る隈なく涙かたてに物語りぬ。

孝女『プラスコヴィー』は此時初めて、一家の眞狀を詳にし、心中深く感奮する所あり、徒歩、西比利亞を横斷して、聖彼得士堡に到り、身を天闕に伏して、親しく父の赦免を哀願するの考案を盡しぬ。此時彼はやうやく十五才の妙齡にてありしかば、此小說的の考案は日を經る每に、新らしき活氣を添へ來り、兩親の夢だにも推知すること能はざる間に於て、早くも既に一團の活火となり、如何なる勢力も手段も、到底之を消滅すること能はざるに至れり。されども彼は外面上かゝる無

謀にして不可能的なる計畫を表白するの勇氣なかりければ、深く之を心中に秘して、只管時機の到るを待てり。

一家の詫住居なる、いぶせき草廬の近きわたりに森あり。『プラスコヴィー』は遑ある毎に常に此處に隱退し、萬籟寂として聲なきとき、靜に林中に跪きて、此目的を實行するに足る十二分の膽力を與へられんことを祈願するを以て例とせり。斯くすること、幾日の久しきに渉りて、鍛錬工夫の功を積み、稍々恃む所あるに方りて、兩親を說得し、其聽許を得んことを決心し、先づ、例の如くに、森林中に分け入り、我が兩親に向つて說くところ、幸に効果あれかしと、堅く祈願を込めたる後ち、家に歸りたるに、折しも父は戶前に佇みありしかば、機失ふべからずとなし、敢然として我が計畫を述べ、聖彼得士堡に向つて出發の許可を乞ひぬ。『ロポーロフ』は終始默然として、其語る所を聽き、談話の了るを俟つて、嚴かに娘の手を執り、折しも食事を準備しつゝありし妻の許に伴ひ行きて言ひけるやう『妻よ、余は最も喜ぶべき吉報と、有力なる我等の保護者とを齎らし來りぬ。『プラスコヴィー』は直に聖彼得士堡に到り、皇帝に謁して、余の爲めに赦免の特典を哀願することに決せり』とて、例になき諧謔の語調もて、娘の陳述を繰り返し、母も亦た『かゝる、馬鹿げたる考に耽るよりも、寧ろ己れの作業に留意することよけれ』とて、更に取り合ふ氣色とては見えざりけり。

可憐なる『プラスコヴィー』は、力を極めて、兩親の激烈なる反對に抗論せしかど、いつも嘲笑の裡に沒し去られ、はては聲を放ちて啼泣するのみなりしが、母は其都度百方慰籍し、何等取りどめ

たることもなくして局を結ぶを常とぜり。蓋し『グラスコヴィー』に取りては、嚴格なる父の譴責よりも、寧ろ溫言綿の如き、母の慰藉こそ、却つて其銳志を挫くの力ありしなり。されど、『プラスコヴィー』の瞬時も其初念を飜すことなきを見て、兩親も玆に始めて、其希望の小供らしき妄想に出でたるものにあらざることを看取するに至れり。加之のみならず、時恰も北國の春に屬し、東風原上を吹て、滿地の積雪やうやく將に消えなんとし、旅人往來の途是より開かるべければ『プラスコヴィー』は更に一層の熱心を以て、屢々前往の許可を請ひたるに、父は終に其煩に耐へず、嚴かに呵責を加へて、自今此事に容喙することをば全く禁止し、母は例の溫言もて、此の如き計畫に意を勞することの、餘りに幼稚なるを諭して、切に思ひ止まらしめんとはなしたりき。

斯くして三ヶ年の星霜は夢の如くに過ぎ去りぬ。其間母は重き病に伏し天稟至孝なる『プラスコヴィー』は日夕湯藥に侍して、其他を顧るに暇なかりしに拘はらず、心裡常に神を念じて、父の心の解けよかしと、祈らぬ日とてはあらざりけり。後ち母の病平癒せしに迨び、『プラスコヴィー』は再び前年の請求を繰り返し、到底思ひ止まるべくもあらざりしかば、流石の父も、ほと〳〵困じはて、『我等夫婦は廣き露國中に財產もなく知己もなし、只だ寄る年波に杖とも柱とも賴むは其許のみなりしに、其許は尚我等を振り棄てゝ立去るの勇氣ありや』とて末は淚と共に恨み喞つのみなりしが、『プラスコヴィー』に於ても何の應答もなく〳〵に只だ先だつものは淚なりけり。されど、彼の決意は爲に寸毫も弛む樣の事は曾てあらざりしなり。『プラスコヴィー』に取り、兩親の反對よりも、更

に一層の難關とも稱すべきもの、別に之れありき。其は露國當時の制度として、何人も旅行劵なくして、西比利亞の内地を旅行すること能はず、蓋し此旅行劵あるものは、『ツボルスク』太守より下附せらるゝものあるも、太守は流刑者の家族に對して、之を附與することあらざるべければなり。されど、『プラスコヴィー』は、一先づ旅行劵下附の願出を爲すことに決し、かゝることには物慣れたる、或る一人の村人に依頼して、一通の願書を認め、父の印章を押捺して、いよ〳〵之を『ツボルスク』太守に提出せんとするに方り、父は例の如くに、其發送を差止め、容易に聽き容るべくもあらざりしが、『プラスコヴィー』の決意到底飜すべからざるを見るに及びて、曲げて之を承諾し、同願書に添ゆるに、前年執奏を請ひたる、哀願書の成行を尋ぬるの私信を以てし、併せて之を『ツボルスク』に發送せり。

少女『プラスコヴィー』が一たび天闕に伏して、父の赦免を哀願するの計畫を定めたるより、烏兎匆々早く既に三星霜を經過し、其間彼は機會の乘ずべきものある毎に、滿身の熱情を傾け、聖彼得士堡に向つて、出發するの許可を請ひたりしが、其請ふ所一として、許容せられざるが上に、母は重き病に冒されて、其看護に全力を注ぎ、從つて、年來の希望を説き出だすの機會もあらざりければ、『プラスコヴィー』の苦悶眞にやるせなく、懊惱病を爲すに至りしかど、今や父の認諾を得、『ツボルスク』太守に向つて、旅劵下附の願書を提出するに及びて、俄かに從來の健康と活氣とを回復するに至れり。此身心の急變は、蓋し適當の期間經過せば、必ず太守よりの旅劵到着すべきことを確信したるが故也。



琥珀の話

理學士　福地信世

琥珀は英語で云ふ「アンバー」にして、黄色又は飴色の半透明の裝飾用の石である。

昔より支那では玉にして裝飾用となし、又粉にして藥用に供した。(但し所謂漢方醫藥であるから有効であるや否やは生の知る所にあらず)。日本でも早くより支那から輸入せられ、玉として婦人の髪飾りとし、煙草入の緒〆となし又珠數に用ゐ、又粉末にして漢方醫の藥に供せられた。西洋でも昔しより此れを男女の裝飾に用ゐて居つた。今日では卷煙草のパイプに多く用ゐる樣になつて、琥珀の効用が一層廣くなつたのである。

琥珀の性質　琥珀は普通黄色であるが時には赤色を帶び、又は褐色を帶ぶ。又白色に傾けるものもある。又時には雲の如き斑のあるものもある。

上等の琥珀は透明であるが普通種は樹脂の樣に半透明である。光澤も亦た樹脂の如き光澤であるが、剛さは樹脂より少し硬い。然し爪で傷つける事が出來るのである。

琥珀は攝氏の百五十度に熱する時は柔かくなり、二百五十度より三百度に熱すると遂に樹脂を火で熱した時の樣に熔てしまう。

琥珀の化學上の成分は、炭素と水素と酸素との化合物である。

此の他に琥珀は甚だ面白い性質を備へて居る。其れは絹布で摩擦すると非常に能く電氣が起る性質

である。琥珀の玉又は、パイプを絹のハンカチーフにて擦り、其琥珀の玉を塵の側に持て行くと、塵は直に琥珀の玉へ飛び付くので、琥珀に電氣が起つた事が能く分かるであらう。此の琥珀が絹布で擦すられると塵を引き付ける性質を現はすと云ふ事はギリシヤ人は神武天皇時代から知て居つた。然しギリシヤ人は其當時は何故に琥珀が此の如き性質を顯はすかと云ふ理屈は分からなかつたのである。ギリシヤ人は琥珀の事をエレクトロンと呼で居つた。此の琥珀の現象が基礎と成つて遂に後世に至つて電氣の發見があつたのである。電氣の事を西洋でエレクトリシチー等と唱へるは皆琥珀のギリシヤ名エレクトロンに因んだのである。

琥珀は装飾用の石として、餘り尊くない石であるが、近代の理學上に大進歩を與へ、工學上に新面目を開かしめたる電氣學の基礎をなしたと思へば、琥珀は實に電氣學の元勳として尊いものである。エレクトリシチー(電氣)の名の上にエレクトロン(琥珀)の名を不朽に殘したのは、誠に琥珀の榮譽であらう。

琥珀の產出の狀況　幾十萬年以前に堆積したる土が、固まりて成りたる柔かき岩の中から、石炭又は木化石と共に、琥珀は出るのである。夫れ故に、柔き岩を穿ち又は坑を堀りて琥珀を堀り取るのである。琥珀の有名なる產地たる、獨逸にては琥珀が海岸に打ち上げられて居るのを拾ひ取る事もあるが、其れは決して琥珀が海中に產出する理ではない、海波の爲めに自然に柔き岩が碎け、其内にありし琥珀が出で、海浪の爲めに打ち上げられたのである。

琥珀は何故斯の如き柔き岩の内から石炭又は木化石と共に出るかと云ふに、其れは琥珀は古代の樹

脂が變はりて出來た石であるからである。其古代の樹脂については次に述べませう。

古代の樹脂　今日地球上に草もあれば木もあり、鳥も居れば魚も居り、獸もあり人も住ゐする。此の有樣は、決して地球が出來た初より依然として變らずにあつたのではない。

抑々此の地球が出來て以來幾千萬年。其間に地球上の有樣は日々年々に移り變つたのである。地球上に初めて動物植物が出來た時は、極小なる蟲や小なる藻や蕈の如き下等なる動植物ばかりであつたが、其れより漸々星霜の移り行くに從ひ、動物も植物も高等のものが段々と出來て來て、蛇も出來、蛙も現はれ、鳥も生じ獸も出た。又植物ではワラビ、ゼンマイの如き羊齒類も、又兎草の類も、出來又松杉の如きもの、其他の大木も地球上に現はれて來た。遂に二三千萬年前に至りて、やうやう人類が猿の類から進化して人間として現はれ出たと云ふ事である。

其れは措置き、數十萬年も昔、繁茂したる植物の内には、松杉の類もあつたのであるが、元來松杉の類は樹脂に富んで居るから、昔しの松杉の類も今日の松や杉の樣に、木からダラ〳〵ボタ〳〵樹脂が垂れたであらう。其の樹脂が諸方に溜つて居る上に土が被ぶり、或は木が倒れ重なり、其上に厚く土を被ぶり等して遂に樹脂は倒れ木を共に深き土の中に埋められるゝに至つたのです。

其後其の上には益々土を厚く被る樣になり、其の重さによりて甚だしく壓されて居りつゝ、幾十萬年を經過し遂に今日に至ると、倒れ木はもはや元の木の性質は變じて石炭又は木化石となり、樹脂は化して琥珀となつたのである。

琥珀が樹脂であつた時にポタ〳〵木から垂れた證

據には、現に滴の形をなせる琥珀が出る事がある。又琥珀が多分松杉の類の樹脂であつたらうと云ふ事を知るには琥珀と共に出る木化石を調べて見れば分かるのである。

琥珀中の虫　琥珀には虫入と稱して、琥珀の內に蜘蛛、蟻、蜂等種々の小蟲を包んで居る種類がある。其中に包まれて居るものは實際蟲類であつて、決して蟲の形をして居る他の者ではない。

此の蟲は如何にして琥珀中に入りしかと云ふに、夫れは幾十萬年の昔、琥珀が樹脂として木から垂れた當時、其近邊を匍ふたり飛んだりして居たる蟲が、偶然樹脂に足又は羽がベタリと附着し、遂に離るゝ事が出來ず、其まゝ樹脂中に包まれて、今日蟲入琥珀を作るに至つたのである。

樹脂中に埋れる蟲は腐る事もなく、又破損する事もないから、蟲の體は其儘完全に保存せられ、今日尚依然として數十萬年前に在りし姿を琥珀中に殘して居るは、實に興味のある事である。

人工琥珀　人智の深さは中々測量する事が出來ない。人に「琥珀が、古代の樹脂から出來たものである。」と云ふ事を研究して知ると、直に其の樹脂の性質を應用し、恰も松樹脂を集めて一つに塊める如く、琥珀の粉末を集めて固める方法を考へた。種々研究の末、遂に今日は琥珀の粉を固めて完全な琥珀を作る方法を案出したのである。

此の方法の考へつかなかつた以前は、傷物として捨てられて居つた琥珀も、又細工の破片として捨てられて居たものも、今日では皆其れ等を一度粉末とし後其を更に固さへすれば、再び上等の琥珀として用ゐられる樣になつた。

人智の進歩は遂には天然をして鼻をあかせる樣になるのであらう。

人工琥珀の方法によりて随意に蟲入琥珀も作り、又戯れに小なる蛙を入れて琥珀を固める等中々面白いものである。

（完）

國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義（三十七）

三日にならせ給ふ夜は、宮づかさ、大夫よりはじめて、御うぶやしなひつかうまつる。

右衛門のかみは、おまへのこと、ぢんのかけばん、しろがねの御さらなど、くはしくは見ず。

源中納言、藤宰相は、御ぞ、御むつき、衣ばこのをりたて、いれかたびら、つゝみおほひ、したづくゑなど、おなじことの、おなじしろきなれども、しざま、人のこゝろ、ごゝろ見えつゝ、しつくしたり。

あふみのかみたかまさは、大かたのことゞもやつかうまつらん。

ひんがしのたいの、にしのひさしは、上達部の座、北をかみにて、二行に、南のひさしに、殿上人の座は、にしを上なり。

しろきあやの御びやうぶどもを、もやのみすにそへて、とざまにたてわたしたり。

釋義

○三日　御三夜なり。さて、前に、七日までの御湯殿のことをあらまし記したれば、ふたゝび以前にたちかへりて、御養育の事を記せり。即ち、三日にならせ給ふ夜は云々といふなり。次の九日の夜は、春宮ノ權ノ大夫つかふまつり給ふ云々といふ所までは、御産養のさまをいへるなり○宮づかさ　中宮職の官吏なり○大夫

中宮の長官にて齊信をいふ○御うぶやしなひつかうまつる　　うぶやしなひは、產養にて、小兒の出生を祝ふ儀式なり。三夜、五夜、七夜、五十日、百日の祝などありて、いづれもそれぐ\の儀式あり。こゝは、中宮職の官吏より、種々の物品を奉りて、皇子の御三夜の御產養を祝し奉れるなり○藤宰相　　藤は藤原の略稱。宰相は、參議の稱にて、內大臣公季公の男、參議兼左兵衞ノ督藤原ノ實成卿あるべし。實成卿は、寬弘四年中宮ノ權ノ亮と大系圖に見ゆればなり。實成を傍註に行成とせるは、恐らくは、誤りなるべし。行成卿は、皇太后宮ノ權ノ太夫とあれども、かつて、中宮職なるよしも、また宰相あるよしも見えねばなり○御むつき　　襁褓のことなり。今俗に、オシメ、または、シメシなどいふ類のものにて、こゝは、綾または平絹にてつくれるなるべし。さて、襁褓は、貞丈雜記に、昔は小兒の衾の事なり。衾は、ねる時かぶる物なり。ねだうぐなりと見え、和漢三才圖會に、襁褓負二小兒一衣、織レ縷爲レ之、廣八寸、長二尺、以約二小兒於背一者、今用二小巾一、當二小兒腰尻一、以受二不淨一者、呼爲二襁褓一と見ゆ。さて、襁褓を綾、平絹を以てつくれり。○衣ばこのをりたて　銀泥を塗りたる衣筥の上に、鶴龜などの織物を押したるものなるべし。そのよし中宮御產部類に見ゆ。○いれかたびら　　今の袱紗の如く、御衣を筥に入るゝ時、その下に敷くものなり。中宮御產部類に、筥一合、納織物ノ御衣一襲(三重葵文、重小文有二入帷一と見ゆ○つゝみおほひ　　包み物の上を被ふもの。

譯　解

皇子の第三日にならせ給ふ夜は、中宮職の職員

一同は、中宮の大夫齊信を始めとして、下々のものまでも、第三夜御產養の御祝に種々の物を奉りて祝し奉る。

右衛門の督齊信は、中宮の御前に奉る獻上品の事をつかさどる。

沈の木にてつくれる懸盤、銀の御皿などを始め、その外リッパなる品々、多くわりたれど、式部は委しくは見ず。

また、源中納言俊賢、藤原宰相實成の兩人は、御產衣、御襁褓、衣筥の折立、入帷子、包、覆、下机など奉れり。この兩人より奉れるものは、何れも、おなじ事にて、色も、おなじ白き色の物なれども、その造りざまによりて、その注意したる人々の心々は見えつゝ、いづれも工夫をしつくしたり。

また、近江の守高政は、その日の、とりまかなひの尋常の事どもは仕へまつりしならん。

また、人々の座は、東の對の屋の西側の廂の間は、上達部の座、北の方を上座にして、二行に居ならび、南の方の廂の門に、殿上人の座は、西の方を上座となしたり。

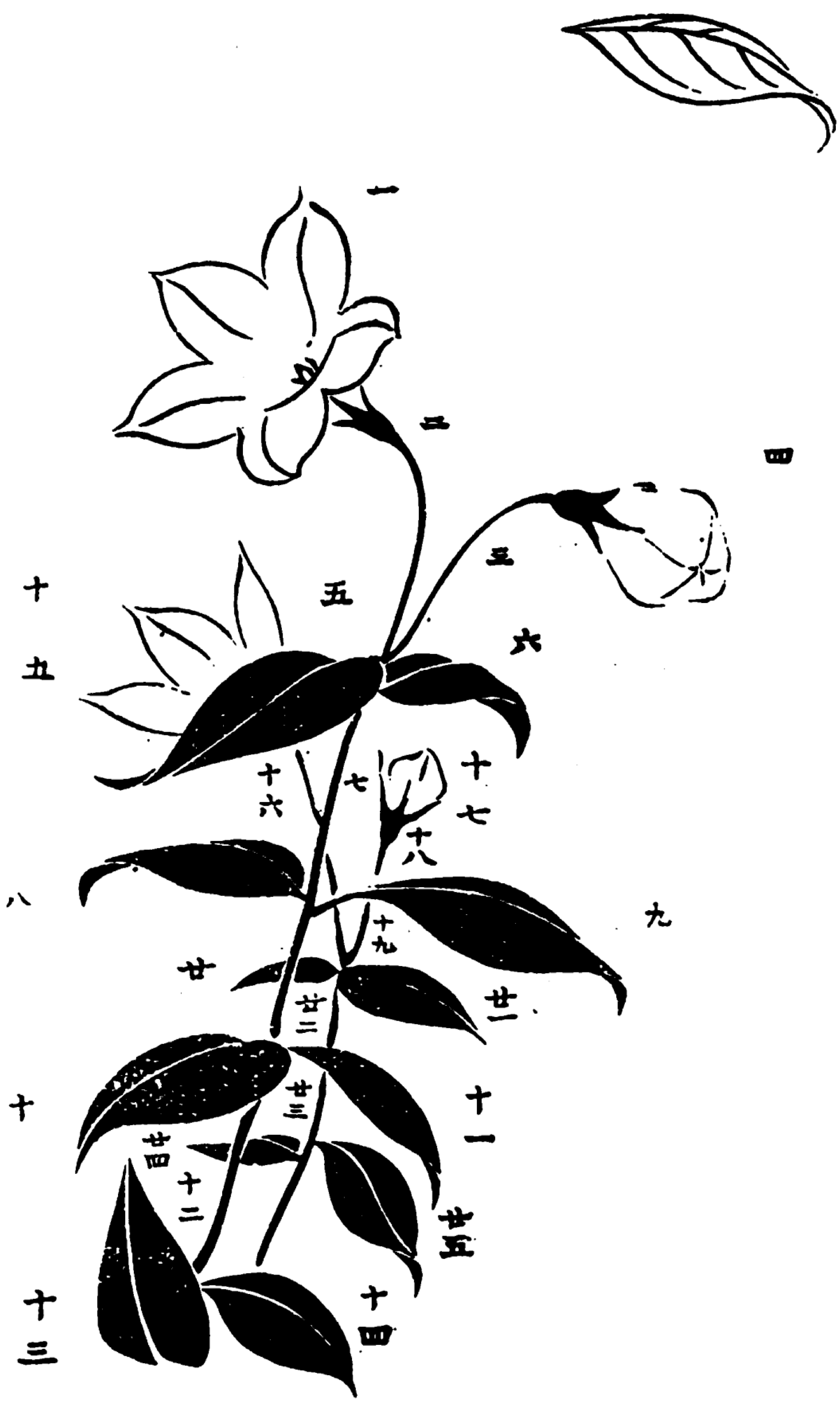
白き綾の御屏風どもを、母屋の御簾に取り添へて、外側に立廻したり。

和畫通信講義（第卅一回）

山崎彩峨

桔梗は、紫白二色の花なり。こを墨にて畫かむには、白色のものは、淡墨にて勾勒に畫き、紫色のものは、淡墨にて沒骨に畫く、花蒂萼等は淡墨、葉は、淡墨を含めたる筆先に、濃墨を附して畫き、稍乾きたる時、濃墨にて葉脈を入るゝなり。彩色畫にては、白色の花は胡粉にて畫き、淡靑色の隈

葉脈



を施す。紫色の花は、藍紅を和したるものを、胡粉を含めたる筆先に附して書き、乾きて後ち、胡粉にて花心を入る、花蒂莖等は、黄がちの青色、葉は藍黄等分なる深青色にて描き、葉脈は藍か藍墨かにて入るゝなり。



人生處世費

磯部武者五郎

人の世に處して生活致しますに、其收入より得る金錢を杜撰に遣ひますは、處世法に違ひますことです、其費す金錢は豫じめ豫算を立てゝ、遣はねばありませぬ、貯金を致すは無造作の事の様に思はれますが、處世費に豫算を立てゝみますると、實に貯金は六ケ敷いことであります、先づ其費用の豫算を申しますと、左の如き順序に據るものです、

第一　生活費
第二　再生費
第三　教育費
第四　義務費
第五　貯金費
第六　快樂費

左の六項を、極く簡短に説明致しますが、先づ收入より得たるものにて、日常衣食住生活の費用を辨じ、飢渇凍寒せざる様に致すが第一肝要なる故に、先づ第一番に費すのが、生活の費用であります、生活費を引き去りたる殘を、第二に再生の費用に辨じます、再生費とは、商人の所謂資本のこ

とにて、更に再び職業を營みて、收入を得んとする、資本に供する費用のことであり升、醫師なら藥品の買入費、地面家屋所有者ならば其修繕費、工業家ならば器械買入、材料買入の費用が皆再生費であり升、偖此の再生費を引き去り、第三に費すものは自己及び子供の敎育の費用です、此の敎育費を引き去りまして、第四に費すべきは義務費であります、此は租稅其他國民たる義務、市町村の公民たる義務で費すものを申します。成るたけ餘裕あれば、義務で費すことも多く致して、赤十字社とか衛生會とかいふものに加入して、義務の負擔を致さねばならぬことです、此の義務費を引き去りましたら、最早費すべき緊要の費用もなき故、其殘りを貯金に致して、財產を造るがよろしきことであります、扨此の生活、再生、敎育、義務の四費目は、是非共費さねばならぬことで、貯金を爲さんが爲めに、以上の四費目を辨じない時は、所謂吝嗇家と申すもので、それではよろしくないことであり升、故に此の四項の費目を上手に節儉し巧に支辨して、更に殘餘を生せしめて、貯金を致さねばならぬこと故、貯金は誠に骨の折れた、六ケ敷きことであり升、

扨又相當に貯金を爲すことも出來て、更に殘餘のあるならば、之を自己及び家族の快樂の費用に遣ふべきことであり升、然るに世間には貯金も出來ないのに、自己の嗜好する物品を買求め、又は酒宴遊興をして樂むものがありますが、是は實に道德にも背くのらならず、人世處世費の支辨法に背きたること丶申すべきものであり升、人世處世費は右の如く支出するものであります。

夏の衛生（承前）

醫學士　岳水書窩主人

運動に注意すること　運動は朝夕の冷しき時を撰びて行ふべし、日中は體温亢進する際なれば、この際過度に運動するときは體温一層亢進し、日射病の如き危重の疾病を惹き起すことあり、縱令斯の如き急劇の病症を起さゞるも、爲めに身體衰弱しその結果種々の疾病を發生するものあり。

睡眠に注意すること　夏は身體の疲勞する如く、腦髓も疲勞するを以て睡眠時間は寧ろ長きを可とす、然るに夏は夜短くて自然睡眠の時間不足するが故に、往々午睡を試み以てその不足を補ふものあり、算盤上より言へば之れ敢て不可なきが如しと雖も、午睡なるものは衛生上頗る不良のものにして、爲めに身體を害すること尠なからず、普通睡眠の時間は二十四時間中八時間と定められ、夜の十時に臥し朝の六時に起きるを通常とす、夏も之れに准じて睡眠の時を定め、決して午睡等をなすべからず。

衣服、夜具、蒲團等に注意すること　汗、脂、垢、塵埃等の附着せる衣類の衛生に害あることは人の皆な知る處なり、然るに夏は此等のもの衣類に附着し易く、その附着したるものは又頗る腐敗し易きを以て、衣類にも大に注意せざるべからず、多くの黴菌殊に虎列剌黴菌の如きは日光に曬すときは、既に述べたる如く、迅速に死亡するものなるを以て、時々衣類を日光に曬することは固より必要なるも、爲に附着せる汗、脂、塵埃等は消失するものにあらざれば時々洗濯を忘るべからず、殊に熱湯にて洗ふは頗る妙なり、上等の衣服の少なからんよりは、洗滌に適する下等の衣服の多きを

爲しとす、又蒲團類は別に洗濯に適する布片を以てそれを被ひ、時々取代へて洗濯するを可とす。

家屋、厠等に注意すること　虎列剌等の黴菌は好んで光線の不定にして、空氣の流通惡しく、塵埃、不潔物等の堆積して惡臭あり且つ温氣ある處に棲息するものなり、よし此等の黴菌棲息せずとも斯の如き場所は頗る衛生に害あり、故に室内には時々戸障子を開きて光線を入れ空氣を流通せしむるは勿論、一日數回清拭洒掃し以て塵埃不潔物等の堆積するを防ぐべし、間々樹木は衛生上必要のものなりとの說に基き、恰も林の如く家屋の周圍に多くの樹木を繞らすものあれども、それは大なる誤解にして、斯くの如くせば光線の射入、空氣の流通を妨げ、濕氣を增し、却つて健康を害するものなり、又溝渠、芥溜、床下厠等黴菌の好んで棲息する場所には、時々生石灰（少量の水を灌げば熱を發して崩壊するもの）生石灰末（生石灰に少量の水を加へ粉末となしたるもの）石灰乳（生石灰一分水九分）、格魯兒石灰水（格魯兒石灰五分水九十五分）等を撒布してその中の黴菌を殺すべし生石灰末は用ゐる時に臨みて之れを製し十分に撒布すべし、石灰乳も亦用ゐる時に臨みて之れを製すべし、その法は生石灰一分に徐々に水九分を加へ能く攪拌するにあり、格魯兒石灰水も亦用ゐる時に臨みて調製すべし、普通の石灰は生石灰末、石灰乳等の倍量を用ゐるにあらざれば効なし、而して厠等の臭氣を止むるにも種々の藥品あり過滿俺酸加里液（過滿俺酸加里一分、水五百分乃至千分、次亞格魯兒酸曹達液（格魯兒石灰二十分水千分の液と炭酸那篤倔謨二十五分水五百分の液とを混じたるもの）坊間に販賣する「アルボース」等之れなり。

○○○○○○○○○○蠅蚊等の昆蟲を防ぐこと　昆蟲類殊に蠅及び蚊の傳染病の媒介を爲すものなることは、既に述べたるが如し、故に之れを防ぐことは夏の衛生上頗る必要のことなり、此等の混蟲は厠圊、不潔の溝渠、芥溜等より發生するものなれば、第一にその發生を防がざるべからず、最近の我帝國陸軍の報告に據れば腦油は厠圊等に發生する蚊蠅等を殺すに最も適當するものにして臺灣の守備隊に於ては之れを用ゐて頗る良成績を得たり、用法は腦油五十瓦蘭謨（凡そ二勺五才）を一回の量とし一週間に二回糞壺内に注ぐを以て足れりとす、その價も頗る廉にして五勺の價僅かに參錢五厘に過ぎず、故に何れの點より見るも頗る重寶のものなり、又同報告に據るに除蟲菊液は蚊を防ぐに最も適當するものにして、之れを身體の露出部に塗布するときは蚊の爲めに刺さるゝことなし、この液には百倍のものより十倍のものに至るまで濃厚の度種々のものあり、用法は單に一時間毎に筆を以て之れを身體の露出部例へば顔、頸、手、足等に塗るにあり、この液百瓦蘭謨（凡そ五勺）の價は一錢七厘にして一回の塗布に用ゐる量は五瓦なれば一日二十回即ち二十時絶えず塗布するもその費用僅かに一錢七厘に過ぎず、故に是亦何れの點より見るも重寶のものなり、その他蚊蛹を殺して蚊の蕃殖を防ぐ爲に用ゐるものは石油「メチーレン」青、その他の「アニリン」色素（蚊の孵く處に注ぐあり）等にして、就中色素類は哺乳動物には無害にして植物には却つて利益あり、而かし蚊蛹には非常に有害のものなれば是亦試むべし、

夏季に於て衛生上特別に注意を要する點は概略此の如し、

要するに夏の衛生の主眼は

一、身體殊に腸胃を健全に保つこと
一、飲食物は必ず煮沸したるものを用ゐ決し生物を用ゐざること
一、平素慣れたる飲食物を代へざること

等にあり、殊に腸胃を健全に保つ事は最も必要なるを以て少しにても腸胃に不和を覺ゆるときは直ちに醫師の診察を受け適當の手當を施すべし、賣藥、加持祈禱等に依頼して手當の時期を誤るは啻に本人の不幸のみならず、社會一般の不幸なり。

（終）

慈母と愛兒（承前）

みむら

●姙娠中の注意

其最も守らざるべからざる重要の事のみを揭ぐれば、

一、人力車、馬などに決して乘るべからざること。
二、高き履物を用ゐず、常に草履の如きものを穿ち躓づき倒れざる樣なすべき事、
三、體力に叶はざる、重量の物を揭げ、又は肩にすべからざる事、
四、入浴などを施し身體各部の清潔をはかるべき事、
五、腹部を暖むべき事（柔かなるきれにて腹部全体を卷ぐべし、但し腹帶と稱し細き帶にて緊縮すべからず）
六、飲食をつゝしみ新鮮の空氣を呼吸すべき事、
七、平素の攝生にて疾病を生ぜざるやうつとめ成るべく服藥を節すべき事、
八、常に適當の運動を爲すべき事、
九、精神を爽快にする事のみつとむべき事、

十、出産時の諸準備につきては左の各條を守るべし
甲、乳房の準備、並に出産時の必要品につきては産婆又は産科醫につき豫め用意すべし、
乙、産室の消毒を充分にすべし
丙、出産の時期徴候等は次に記載する所其他産婆等につき充分に豫知し置くべし、
十一、此豫定時刻に近づきたる時、或は産氣つきたる時は決して普通の大小便所に至るべからざる事、
十二、出産時には耐忍と謹愼とを主とし、諸事靜肅にすべき事、

●愛兒の胎内期

斯くも注意せざるべからざる愛兒の胎内期は、そも幾月間なるか、通俗の傳ふる所によれば、道學の祖先老子は八十年、佛教の創立者釋迦は三ケ年堯帝並に漢武帝は各十四ケ月、我朝の豊太閤は十二ケ月、耶蘇孔子等の聖人皆何れも一年或は數年の久しき間、胎内にありしといへども、こは、皆何れも、其人の他に勝れたる事を現はさん爲に殊更に異常の事を誇大にしたるなるべく、普通の人類にありては、二百八十日を通例とし、諸動物中、猫は五十六日、犬は六十日、馬は三百四十六日、象は六百二十五日を通例とす。

●出産の時期

されば、ある徴候ありたる前月より數へて十月目は、則ち出産の期月にして、尚詳しく云はゞ、最終の徴候の始りたる日に九ケ月と七日とを加へて計算せば、そが出産の月日に該當すと知るべし、故に又出産の期日により姙娠の期日をも計算し得べし、例へば十月一日に出生せし兒女あらば、

それより九ヶ月と七日とを減じて、昨年の十二月二十五日に當る頃に姙娠せしものと知るべきなり。

倘其日の時刻を知らんとせば、人によりて稍々異なるべけれど、大凡右の計算法にて其出産の月日に當り、度々腹痛を生じ、遂に多少の出血あらば、六時間後には、出産すと知るべし。

人によりては分娩日より數日乃至十數日以前より腹痛ありて、こは眞に分娩するにはあらずやと疑がはしめ、爲に産婆を招く事數次なるあり、或は眞の分娩時まで、心付かずして、途上又は便所などにて、慮らざる心配を爲すものあり、何れも以上の月日と時刻との繰り方を心得ず、且其出産時刻の眞のしるしなどに注意せざるの致す所なれば、常によく心得置くべき事なり、（未完）

齒の攝生法に就て（つゞき）

小林齒科醫院長　小林清太郎

で、腐飾が牙質にまで侵入して、齒髓に近接するに隨ひ、甚だしき痛みを感ずる樣になつた時期に確實なる材料と、精巧なる手術を施して、適當に治療をすれば、先づ、一ト通りの豫防だけは出來得るなれども、決してもとの健體に復することは出來ないのである。

若しこの時期に、治療と充填とを怠りて、所謂一時のおまじない抔に托して、等閑にして置く時は齒髓が腐敗して、その腐敗毒により、一種の病氣即ち、齒槽膿腫といふ、齒の病の內で、最も恐るべきものとなる。さうなると、齒齦に一ッの穴を造り、その穴から、常に膿を排出し、その膿は、唾液に混りて胃腑に入り、消化器を害し、その臭

氣は、大氣と共に肺臟に入りて、呼吸器を害し、又他人と談話をなす塲合には、鼻持のならぬ臭い呼吸をせねばならぬ。これ實に、不潔なる濾過器にて、飯水を濾すのと、毫もかはりのない理屈にある。

それから、一寸こゝに歯齦のことに就て、注意して置くことがある。全體歯齦は、歯の病と違ひ、一旦その病に犯かされても、治療の仕方によりては、健體に復すことが出來るのである。

それで、歯齦の病にも、種々の種類があるけれども最も多いのは慢性歯齦炎症といふので、その原因は、概して人々の怠慢から起因するのである。而して歯石が歯齦に附着する塲合は、最初極めて小粒のものなれども、層一層に增して來て、漸次大いなる一ツの塊りとなり、それが歯齦を刺戟して、此處に始めて、慢性歯齦炎症といふ一種の病になつて、知覺は過敏となり、容易に出血をしてそれが嵩じると膿と變り、口内は一室にて他人と談話も出來ざる程の臭氣を放つ樣になるのであるが、これは前にもいふ通り、早く治療さへ加へれば、全癒することが出來るので、その豫防法は、適當の歯磨粉及び歯刷毛にて、朝夕二度づゝ掃除をするのが第一に必要である。人間は就眠中に咀嚼談話を爲さゞるゆゑ、唇舌の運動なく、歯牙を磨擦せざるにより、隨て、唾液沈着し易きものなれば、起床および就眠時に、一回づゝ掃除をすれば、唾液の沈着を防ぐのみならず、齲歯の原因をも豫防することが出來る。

その次は齲歯であるが、齲歯の原因は、化學的說明が最も適當の樣に思はれる、歯の實質は前說の如く、石灰質より成り立つがゆゑに、酸にあふて分解さらるゝことは明かである、口内の液は中和

性なるが、食物の糟と共に、大氣に觸れる時は、暫時にして發酵して、一種の酸を釀成し、その酸液歯牙の石灰質と親和抱合して、遂に琺瑯質を破碎し、こゝに始めて齲歯を生ずる次第である。要するに、歯牙、歯齦の疾病、種々の全身病をひき起す原因ともなるものなれば、歯の攝生法も、忽には出來ないことゝ思ふ。

產所式（つゞき）

東京女學館講師 有住常子

色直ありて、扨三七日すぎて、吉日次第に、其里の鎮守の神へ、小兒初めてまゐるべし、高位には、御宮參りの日、御座敷に置鳥置鯉二重折瓶子等の供物をなすべし、

御宮參の時、小兒をば、年もおとなしく身の程もいやしからぬ女房いだきて、御馬車にのるべし、男子にても女子にても小兒は、女のあつかひにあらざれば叶ひがたし、故に御乳の人は云ふに及ばず、其外女房少々御供に參るべし、いづれも馬車に乘るべし。

御宮參の時、守刀など御馬車の内に入れてゆくべし、以上は高位の御方々の仕方なり、次々は人力車にてもあるべし。

なほ右の場合に於ては、小兒を神前へ抱き參らせし時、神主御幣を持ちて出向ふを、御供の物うけていたゞかせて、神主へかへすべし、さて神酒を參らするを、御供のもの御酌して、女房介錯して、神盃をいたゞかせ申すべし。

姫君の時は、御供のもの、御幣を受取りて、女房衆に渡して、女房いたゞかせ申すべし。神酒の御酌も女房の役なり。

御宮の方にては、小兒の門を入る時より、神樂を初さすべし、
御宮よりかへりたまふ時は、御名代をのこして、かへりたまふべし。
御かへりの後、御祝はあるなり、御祝はかはりたることもなし。
右も高位の御方の時なり、平人もこれにならひて行ふべし。

女禮心得草（十二）

日本女學校禮節教授　大谷喜代子

履物の事

◎靴にても履物なにゝても參らせ様の心得

一寸はきものゝ事につきまして私が習ひました事では、履物のぬぎやうと、履物の出しやう、足袋のめさせやうであります。

◎靴のまゐらせやうは、左右を引そろへまして、一つに上の方を持ちまして、持ち出まして、下におきまして、左靴より取りて、引きひろげましてめさせます、次に右靴をめさせますのです、緒があります靴の時は、一々緒を結びましてから、次のをめさせるのです。

◎靴をぬがせ申す時は、御後の方へめぐりて、きびすを取りてぬがせ申すのであります。

◎靴の名稱は、上の方の長く出たる、長靴の時は長き方をタテアゲといひ、かゝとの所をキビスといひます、夫から爪先をハナと申しまして、踏ところをウラと申しますのです、長ぐつなど甲と足とのさかひ目の上の正面の所をミセと申します。

◎ミセとハナの事を示します爲に左にもちて出る

時の様子を圖にあらはしませう、



●イはミセでロはハナであります。

◎たびのめさせやうは、御右の方からめさせるのです、ぬがせ申すには、右にても左にても定まりとてはありませぬ。

◎履物のぬぎやうは、まづつねには、はきてぬぐ所にいたりまして、其まゝぬいであがるのですが、此時にすぐあがりませんで、一寸ぬぎかたがあるんです、其ぬぎ方は左からぬぎますのですか、右からぬぎますのですか、此所が、作法學科の試験問題でありますから、皆さん教師として作法を教へて居る方に、御きゝなさい、夫から、次にわたくしが申しませう、是は正しい仕方がありますから、一寸申さずにおきます

◎履物ぬぎたる時くつがへりました時、これもどういたしたらやうございませう、通常にはともかくも、はれの時にはこまる事がありますから、其時の心得を試験問題のついでに皆さん御考へくださいまし。

◎通常ぬぎたる時には、そろへて居ればよい、又自分のぬぎたるを、返る時に其まゝはく様にぬぐのがよい様にも思はれてをります。



挿花の花（つゞき）

小畑いく子

本花

姿は毎々申す通り、自然を失はぬやうに心懸るは勿論でありますが、全體の力の平均といふ所にも亦充分の注意がいるのであります。



◎枝の長短●●●● まづ花を挿んとする時は、其室の左右勝手に依て枝ぶりのしらべをし、其「一」の枝に準じて「二」「三」を始め、他の枝の長短を定めねばなりませぬ。此長短が即ち重量の平均に大關係があるのであります。そこでまづ「二」の枝は「一」の枝の十分の六乃至七「三」の枝は「一」の枝の十分の三乃至四の長さに切り、其他は此三枝の補足でお

りますから、其枝ぶりに依りて定まるので、これは豫定致し難いのであります。

◎矯方　或流義にて自然々々とやかましく申まして、癖のある枝も矯めませぬ。が、併しそれは餘り極端でありませう。苟も美術といふ以上に矯方を申しますと「一」の枝は凡そ總高さの十分の四(但し水口より)程の所にて腰をいれ「二」の枝は一より少し低く「三」の枝は「二」よりも亦低く、始に充分矯めて置き、またいづれの枝も配木にわたる少し上より切口までの間にて、矯め返しといひて、反對

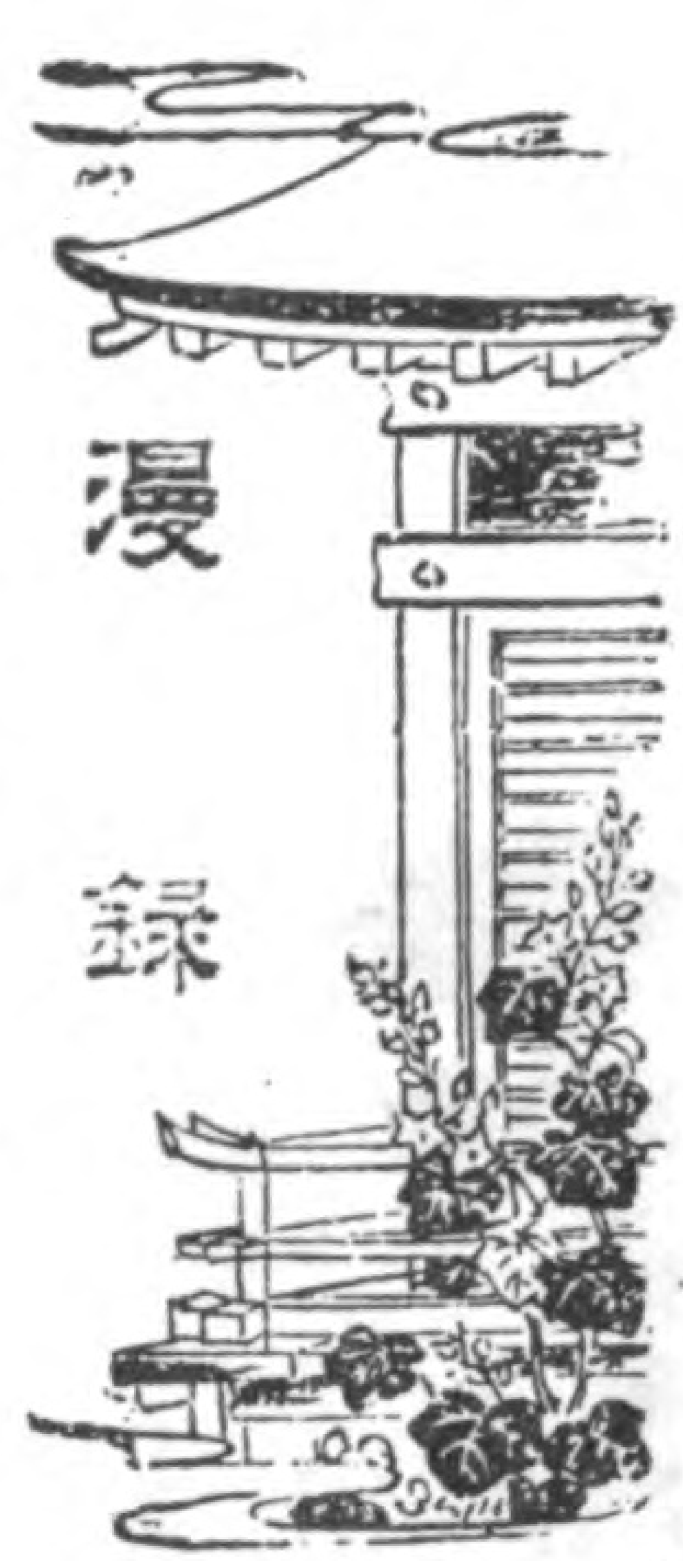


は、前々回にも述べました通り、自然のゆるすかぎりは人工の技を加へ適當に矯るが宜しい。今其〜の方向に少し矯め置く方根のしまりよろしく花器付もよろしく。またどの枝にても各自分れ目までは

最初に挿た枝に添ひて少しの間隙もないやうに致さねばなりませぬ。

前に出しました圖は、即ち本花の左勝手と右勝手とであります。木物は天然の枝ぶりに依て挿さねばなりませぬが、草物はいづれにも自由になります故に、特に木物と草物とを御參考に出しました。

（つゞく）



女子服飾の沿革（十一回）

椎園信成

三、平安朝

平安時代と申しますのは、既に御承知の如く、桓武天皇の延暦十一年山城の平安京に遷られてより、建久三年源頼朝の鎌倉に幕府を開くまで、凡そ四百年間を云ふのであります。此時代は、實に文藝の勃興した時代でありまして、文學は更なり、彫刻、建築、織物、染物、縫物、蒔繪の類世の需用に應じて、非常に發達しました、これは皆奈良朝の餘流を受けついだのに過ぎないではあるが、此時代となつては、全く隋や唐の遺風を遠ざけて、純然たる日本風の工藝になりました。併し此時代の事は既に皆さんが、歷史或は國語の方で、充分研究に成て居ませうから、こゝには省いて、重に當時の風俗を申しませう、此期は殆ど藤原氏の全盛時代でありまして、天下の政權は藤原氏支配し、皇室をも殆ど一家の如くに思つて、一族もそこを殆ど集會處の樣に心得まして、常に女官達と相戯れ、遂には婦人と同じ樣に、眉を書き、又は齒を染め、紅粉をつけなどして、終日、花を見て

は詩を吟じ、月を見ては歌を詠じ、或は月夜舟を浮べて詩歌管絃に耽ける様にありまして、社會は益々華奢の風に流れました。而して第一番此華奢の影響を受けましたのは衣服であります。

此時代は實に泰平でありましたから、藤原氏の榮華は益々社會を奢侈淫逸の風に化してまゐりました、其始めは仁明文徳帝の時代であります。此以來と云ふものは、年々に衣服の美麗を競ふ様になつて、醍醐天皇の頃は、殊に甚だしくなりました。そこで三善清行が意見を上つた、其中に、貞觀元慶の頃は親王公卿すら生の筑紫緒を夏の汗衫とし、曝の絁を表袴とし、東の絁を襪とし、染絁を履の裏として居た、然るに今は諸司の史生さへ、白練を汗衫とし、白絹を表袴とし、白綾を襪とし、菟褐を履の裏とする様に爲つたと云ふことがある。これにても其一班は知ることが出來ます。僅か二三十年の間に此の如き變遷が在つたのであります。そこで醍醐天皇、時平公と申合せて、屢々禁令を下されたが、遂に矯正することが出來なかつた。次で一條天皇の朝には、奢侈の風が一層盛になりまして、公卿妃嬪何れも美服を纏ひ、女官なども、粗服を着けて居るのを恥とする様になりました。世の中がかやうでありますから、花山天皇の笠の内に鏡を納れ、藤原朝光の水晶の矢筈、或は衣服の裾に螺鈿をつけたるなどは、敢て驚かなかつたのである。次で後白河天皇殊に風流を好まれ、公卿官女など皆綺羅をつくして居た。これは保元五年白河にて花の宴を催されし時の様が、今鏡にのせてある。この文によれば、如何に華奢な風をして居たかと云ふ事が知れる。其記事は、

四十八人の女房思ひ〳〵に装ども心をつくして、

今日ばかりは制も破れてぞ侍りける。紫、紅、萠黄、山吹、蘇芳、廿五襲ねたるに、打衣、表着、裳、唐衣、みな金をのべて、紋におかれ侍りけり、あるは柳櫻をまぜ重ねて表は織物裏はうち物にして、裳の腰には錦に玉を貫きて、玉にもぬける春の柳かと云ふ歌柳櫻をこきまぜてと云ふ歌の意なり。裳はえび染を地にて、海賦を結びて月の宿りたるさまに鏡の下にすかして、花の鏡となる水はとせられたり。唐衣には日をいさして、たゞ春の日にまかせたらなん、と云ふ歌の意なり、あるは唐衣に錦をして、櫻の花をつけて、うすき錦を淺黄に染めて上にひきて、野邊の霞はつゝめども と云ふ歌の意なり、袴も打袴にて花をつけたり云々。

次で鳥羽天皇また華奢を好み給ひ、左大臣源有仁と心を協せて、服飾の古制の柔かなのを廢して專ら強く張りて衣紋を正しくなし給ひ、烏帽子、冠も、紙を厚く張りて漆塗となされた。これより、衣服の體は全く一變し、茲に後世の模範を開かれ、衣紋のさたを、此時より兎や角と云ふ樣になりました。

斯く申せば、別にさしたることも無さゝうである。が、隨分此間に數多の變遷が在つたのである。併し歸する處は、一條天皇前後に種々の裝束が一定し、鳥羽天皇の時より、今日の如く、強く作る樣に爲つたと云ふまでゞある。故に此時代の服を標準として記すことゝいたします。扨て此時代の裝束には、男子の方に、禮服、束帶、衣冠、直衣、狩衣と云ふ樣な種類がある。禮服と云ふは、大寶令に定められた如く、大祀、大禮の時に着用する。こは全く唐制に倣つたものでありまして、令の時に定められたものと大差はない。次に束帶と

申すは、通常の禮服で在つて、天皇より臣下に至る迄、公事、朝拜の時などに着用し、衣冠は平服で在つて、常の參內に着し、直衣、狩衣などは、何れも略服であります。此他に小直衣、直垂、水汗、素襖などありますが、是等は、何れも畧服であります。

次に女子の服裝ですが、こは太寶令に立派な制度があるにもかゝはらず、嵯峨天皇の弘仁十年に、この制を廢せられ、次で朱雀天皇の承平頃の改革を經て、一條天皇の頃には、殆ど一定しました。元來女子の衣服は男子とは異つて、其數も少なく、又變遷も比較的少ない、併し其種類は男子に束帶衣冠の制のある如く、女子にも、晴、褻の二種がある。晴の裝束とは、男子の束帶と同じく、婦人の禮服である。次に褻の服と云ひますのは、衣冠と同じく、通常の服である。此他女子には、采女裝束と云ふがある。采女は十二單即ち晴の服を着用する事が出來ないから、殊に特別の服がつくつてあるのであります。衣服は以上の種類に依て其着用は違ひますが、唐衣、五ッ衣、小袿、裳、打袴、袷衣、打衣等であります、此制は只當時ばかりでなく、鎌倉、足利兩時代を通じて德川時代の末に至る迄、京都の公家にては着用したのであります。只後世有職故實などの家が澤山出來まして、種々の理屈をつけて規程を設けたものであるから、着用上少しの違ひは出來たが、製作上の差違は少しもなかつたのであります。故に此時代に於て詳しく説明いたします。序に申して置きますが、此時代は、斯く一定したが、夫れに就て少し復雜になつてきましたゆゑ、少し了解しかねる處がないとも限りませぬから、此時代は、便宜上、上の例にならはずして、別法に依て説明いたしま

す。みなさん其おつもりで御覽を願ひます。

筆のしづく

文學士　田淵芙蓉

かしこかれども、兩陛下には、敷島の道に大御心を寄せ給ひ、朝な夕なの玉詠いと多しと承りぬるが、宮内省にまた御歌所を置かせられ、あまたの學者を集はせられて、更にこの道を奬勵し給ひ、かつ、新玉の年の始めには、おごそかなる御歌始めの御儀式を催されて、つかさ位たかき人の歌はさらなり、民草の歌をさへみそなはせ給ふとかや。されば、上の行ふ所下之に倣ふ。ちか頃一しは盛大となり、新こるあやしの賤の女も、海草刈いやしき海士の子もやう〳〵口ずさむに至り、いづれの新聞雜誌も競ふて之をのせ、すこし品高からむ女にして、さる風雅たる業なきをば、こよなき恥とは思ふめり。是まことに昭代の美事、朝日に匂ふ櫻花かつて邦人の誇りつる大和心を振ひ興すの原因なりと知らずや。世におこのしれものありて、歌をはかなきすさび、あだなるもてあそび等の樣にいひ卑むる人あるぞうたてき。紀貫之が古今集に其功德を稱へられたるを見なば、面をあげて之を論ふの勇氣はなかるべし。「力をも入れずしてあめつちを動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこ女のなかをもやはらげ、たけき武夫の心をも慰さむるは歌なり。」と、實にや人の眞心より流露して之に感動を與へ、またゆかしき跡を尋ねて、國振の尊き所以を知るべく、兼て國人のかんばしき性格習俗をもうかがうに足れり。あはれ雨に惱み、月に泣きて煩悶の情やるせあき時、三十一文字に托して其欝屈を慰籍するも宜な

りけり。力鼎を扛げ、虎豹懼るゝ蓋世の益荒夫も、この美的快感にうだれて、磨ぎすましたる秋水を鞘に納め、鎧の袖を絞りたるもの幾人ぞや。尊王大義を唱へし英雄傑士の導火線たりし灘波の阿闍梨契仲、加茂の縣居翁以後の國學者の究めし所、いかでか古文のみに止まらむ、單に歌を女々しとしりぞくるを止めよ、直接間接に影響する歌徳も實に大なりといふべし。されど、この心を忘れて徒らに腰折などうち出でたらむは口惜しく其姿言葉とゝのはゞげにもと首肯るゝふしなきにあらねど、その魂なきは人形の情なきに似てあかず口をしかりけり。「歌よみは下手こそよけれ天地のうごきだしてはたまるものかは」と、石川雅望が例の洒脱の筆づかひ、あどけなき中に人の同情を引きて、其滑稽なるに思はず頤を解かしむるは、よく人情の幾微を捕へたれば也。およそ内容外形ともに完全にして、その發展方法適當ならば、人の感觸すること深く、肉躍り魂おのゝぐの感あらしむるや論なし。かくてぞ歌の功徳も多く、其目的も達せらるべき。こゝに日頃かいあつめたる歌徳の一端を抄き出して、むかしはかなき跡を示さむかな。

池の藤波さきおゝりたる平安時代、公卿殿上人、榮華を極め奢侈を爭ひ、邦國固有の武魂を失ひて、遂に女々しくなりぬ。花の晨月の夕、詩を賦し歌を詠ずるを樂めども、そのかみ萬葉集に見えたる歌のごとく、壯豪雄大のものなかりき。かつ佛教の隆盛は、大和心を萎縮せしめ、幽鬼を信じ極樂淨土を夢みせしめたり。かくて其末葉に及びては、皆榮華の夢にあきぬ。歡樂極まりて哀情多し。暮鐘を聞きて世をはかなみ、落花を見て無常をさとり、人心全く厭世的となれり。其後武家勃興して、

武士道形成せらるゝに及びても、さすがにその身の不幸大事等の曉には、必ず神佛に安心立命の地を求めたり。この時歌を神佛に奉つりて冥福をいのるものつぎ〳〵に現れぬ。もとより妄誕なること多けれども、醫師の所謂精神治療の類にて病の癒えたるもあらむ、心幽鬼を生じ、あるは良心に呵責せられし事もあらむ、又さるべき原因ありて、その時に好結果を奏せし等種々の原因事情あるべし。これを神佛の救ひと信ずるはおさなき思想の致せる處とはいへ、人の弱點なれば決してくるはしき業とは思はれねど、明けき大御代に、品高き人にて、これより一層甚だしきもの多しと聞きては、そゞろに身もうち顫はれぬ。

平安時代の歌人として、和泉式部と共に驍名一世をゆりうごかしたる赤染衛門の子に擧周といへるものありけり。父祖の魂を受けたるにや、その性質書を好み、常に淨几を友とせり。やう〳〵長ずるに及びて、諸家の説に獵渉し、殊に文章に秀でたり。永延の初め、攝政藤原兼家の邸に詩の會を開かれつる時、その序を作りたりしが、帝これを賞し給ひて、藏人に任せられぬ。其のち母君赤染氏頻に外官を望み、歌を關白道長の妻倫子に送りけるに、これを哀みて和泉守に榮進せしむ。斯て母君を伴ひて任地に赴きたるに、不幸にも擧周疾を獲て益々危篤に迫り、重き枕も擧らず、此世のものは見えざりき。母君の悲歎やる瀬なく、なく〳〵住吉明神に祈り、己の命を以て代らんことをこひ、三本の御幣を奉り、その串に

かはらむと思ふ命はをしからで
　　さても別れむことぞ哀しき

と、一首の歌を書きそへて、一心不亂に快愈を祈りけるに、其夜白髪の老翁來りて、此幣を社内

に納むると夢み、忽ち疾も愈えたりとぞ。至誠は人を動かし、熱心は巖を通すとは、是等の事をやいふならむ。

白河天皇の御代に、博學政理に通じたる中納言通俊の子に世尊寺阿闍梨とて、顯密知法の尊き僧ありけるが、鳥羽殿に仕へたる女房、阿闍梨は女心ある空聖なりと罵りたるを聞きて殘念に思ひ、いかでこの耻をそゝがばやと北野に籠りて、一首の歌を詠進せり。

哀とも神々ならば思ふらむ
人こそ人の道は立つとも

此しるしにや、やがてかの女房精神錯乱して雪の肌をあらはし、赤袴のみを腰に着けて、手に錫杖を振ひ、阿闍梨に空ごとをいひたる報いよとて、院の御所にて舞ひにけり。その樣いと淺ましかりしかば、速に阿闍梨を召して見せしめ給へば、神威のあらたなるに涙をながしけるといふ。女房の斯る振舞こそ良心の責めより起りしならめ。人を輕卒に侮らば、などてその惡報の來らざるべき。愼むべき事にこそ。

またおなじ頃とかよ能因法師伊豫守實綱と共に伊豫に下りたるに、炎天草木を枯らし井泉涸渇して旱魃甚だしかりければ、民の歎き大方ならざりき。されば三島の神に歌を奉れと國司にすゝめければ、

天の川苗代水にせき下せ
あまくだります神ならば神

とみてぐらに書きて、社司に奉らしめけるに、碧空俄にかき曇り、電光閃き雷鳴轟きわたりて、大雨沛然盆を覆すが如し。須臾にして黑雲收りて夕陽華かに射せり。にじのかけ橋空を彩り、枯れたる稻葉風にそよげり。唐の貞觀帝の故事にもお

とらざりしと人々稱しおへりき。これ神德なりや否やは疑はしけれど、其熱誠あるには驚くべからずや。

蓋し、此等の神秘はもとより窺ふべからずと雖も、當時神佛混合せられて、衆人の信向甚しく、又和歌は神意に適ふものとして、非常に重ぜられたり。その重んぜられたる和歌を詠進せらるゝに於ては、いかなる惡奸といへども之を僞ること能はざらむ。畢竟其赤心熱誠は、神佛和歌を介して、其事の成効を來したるなり。

（未完）



音樂雜話（一）

大日本音樂會　中川愛氷

◎春は鳥、秋は虫、鳴くか、啣つか、歌ふのであるが、不人情ながら音樂と聞いて差支ない、松吹く風、軒うつ雨、筧より落つる水のしらべ、これも音樂と聞いて差支ない、否實に此に上越す音樂はない、から云ふ音樂を常に耳に入れることが出來れば、人間も愉快に働かれるに違ひないが、働く人の耳には兎角遠かつて、世の中に不用な人の慰みになつたり、歎きの種になりなどして、さア此際にこの優美なる音樂を聞かうと云ふ工合には、下世話に云ふ問屋で卸さない、そこでいつでも耳に入れることが出來る音樂が欲しくなる、即ち人造で間に合はさねばならぬ、今の云ふ音樂は人造品で、本家本元の天然の音樂より、面白いものが出來上つたのである、

◎近頃人殺しが多く、わるい事をするものが多いが、これは音樂を嗜まぬ人に限る、苟も音樂を嗜むほどの優しい人が、人殺しや惡い事をするもの

ではない、して見ると音樂家は皆善人かと云ふに、生憎音樂を嗜むものより、音樂を賣物にするのが多いのは、實に不愉快な話である、

◎音樂といふと聞えがよくて、遊藝と云へば何だか野卑に聞える、遊藝は音樂ばかりを云ふのではないが、遊藝の隊長は音樂である、そこで少々遊藝といふ事に就て話さう、

◎遊藝の隊長である音樂の、其第一に位するものは三味線で、三味線を使うて歌ふもので、これを敎ふる所が稽古屋といふものである、三味線を使うて歌ふ曲は多くは野卑で、これを敎ふる稽古屋なるものには疑問が多い、

◎かやうな事は音樂に關係なきことのやうなれど、三味線音樂が排斥せられて、大に振はぬ所以であるから、否上等の音樂として世に用ゐられぬ所以であるから、三味線音樂を說く前に、これ等の事も云ふて置かねばならぬ、三味線音樂の爲に寃を解かねばならぬ、

◎琴といふものは上品に出來上つたもので、其のしらべも優美で、これを演ずる時は何となく奥床しく聞ゆる、日本音樂はこれに限る、されば音樂學校は素より他の女學校でも琴は敎へる、琴を敎ふる人に位記をも賜はつたのもある、隨つて之を敎ふる稽古屋なるものも、少しは面目を異にして居る、稽古屋の師匠の專賣のお世辭までが變つて居る、然らば日本音樂は琴を以て第一とするか、餘人は知らず、昔の人は知らず、我は之に贊成することが出來ぬ、

◎嬋姸花の如き人琴に對して、胡蝶斗爲吟に走る如き時、或は梁の塵も舞はんと許すべし、しかも其のしらべは峰の松風の如く、筧の水の落つる如く、大に心耳を澄すものあれど、人造音樂の發達

したる今日、松風筧の音の範圍を脱する事の出來ぬ働きの少ない音樂を、日本音樂の第一位とする譯には行かぬ、例を引くも妙なれど、若殿樣の上品にして押出しの立派なるに引きかへ、意氣地なきものにも似たらんか。されば日本音樂の第一は何であるか、また繰かへす三味線音樂、

◎三味線は琴よりは輕便な樂器で、しかも三味線は琴に太鼓を合した樂器であるから、其響きが種々に變化して、望みとならば峰の松風、筧の水の聲色位は、三味線に取つては或一部の仕事で、この三味線が働く時には、人を跳らす事も、泣かす事も、笑はすことも、極端に走つて怒らすことも出來る、實に大した仕事が出來る、

◎この働きのある三味線は如何にして排斥せらるゝか、否上流社會には抱へられぬか、多くは稽古屋といふ　に育ち師匠といふ下等人に養はれ、祿でもないものを歌はされるからであらう、これは三味線が惡いのではない、稽古屋といふ魔窟の里へやつた、上流の人が惡いので、其の結果、三味線は放蕩ものになつて、惡所通ひをなし、手も附けられぬやうになつた、あつたら此働きのある樂器も臺なしに成らうとして居る、これを他に見る不人情さ、面白くもない謠曲でも唱うて居る方が祟りがないとて、

◎併し三味線の身持のくづれたのは、人間の身持の崩れたのと違うて、上流の人が少し骨さへ折れば、面倒さへ見れば、すぐに上品なものになつて仕舞ふ、但し上品といふのは生畫の如きものを云ふのではない、

◎竹本伊達太夫といふものがある、松永和楓といふものがある、其藝は下品なか寄席へ掛つても、客に上等の人が少ない、さうかと思ふと歌舞伎座

の如き場所へ現はれると、上等の人が中々來て居る、して見ると其藝が上品なのか知れぬ、劇場と寄席と品位にどれ程の相違がある、上品下品と云ふは木戸錢の事か、音樂の研究をし、音樂の發達を計らうと思へば、この邊の事にまで心配せねばならぬ、

◎遂に音樂は人間の玩弄、玩ぶ人の身分によつて滿足さへすれば、別にむつかしい理屈はないもの、上品の下品のとは音樂に遊ぶ人の心次第、三味線の曲にも高雅なるものあり、琴の曲にも野卑なるものあり、心にもない愛憎はやめて貰ひたい、三味線を惡く云ふ人の樂みは、其内證は三味線であるといふこと、不思議でもないことである、



諸道の歴史（承前）

文學士　宮崎鳥府

二、挿花

挿花はもと草木花卉を愛づるの余りに、これを瓶中に挿し、更に座右に置きて、朝夕の眺めにするより起り、本朝にては、古くよりこの事行はれたり。

いま一二例を示せば、

（古今集）染殿の后の御前に花瓶に櫻の花をさゝせ給へるを見て云々、

（後撰集）久しかれあだになるなと櫻花かめにさせれどうつろひにけり

（枕草子）面白く咲きたる櫻を長く折て大きなる花瓶にさしたるこそおかしけれ

（同書）かうらんのもとに青き瓶の大なるすゑて、櫻のいみじくおもしろき枝の五尺ばかりな

るをいと多くさしたれば云々、

(榮花物語)御まへのなでしこを人の折りもて參りたるを、宮の御まへの御硯かめにさゝせ給へるを云々、

なほ、花を挿して慰みたることなど數多見えたれど、平安時代は、後世の如く技の巧拙を競ひしにはあらで、草花の天眞爛熳なるを賞したるなり。されば、物によりて多く挿し、或は少なく挿しなどして、一定の法式なかりき。又生花のみならず、造り花迄も弄べり。古今集に、二條后の未だ春宮の御息所なりし時に、めどに削り花させりけるをよませ給ひたる歌あり。蓋し、今日の如く、何流々々と流派を生じ、一の技術となりしは足利八代將軍義政の時なり。此時代は、茶事香道の風雅共に流行せしかば、從つて挿花も盛に行はれぬ。されば、この道に工風をこらすもの續々輩出せしが、殊に京都の相阿彌といへるもの、尤も妙を得たり。これと同時に南都稱名寺の僧珠光、茶道を以て義政公に仕へ、京都六條に住ひしが、さらに花道の風雅を得んとて、相阿彌に師事して、其技を傳授せられぬ。當時の挿花は、徒らに多きを好まず、僅かに一枝半莖と雖も、花莖の配置のよきをば風雅なりと稱し、近世の所謂茶花なるものを創始せり。次で京都六角堂の執行僧池ノ坊專慶、相阿彌に就て其蘊奥を極め、大に發明して其技名を天下に轟かしたり。是に於て稍々法式も定まり、既に將軍家の式には、出陣の花、祈禱の花、祝言の花三具足の花等の式あり。中にも三具足の花と稱するは、三具足の燭臺に對して、右長左短、古今遠近に立てわけ、開枝をば慈悲の枝となし、懷枝をば知惠の枝と呼べり。此他二心、投入等種々の作法ありき。

降つて慶長の頃、池の坊専好、専慈など、祖志をつぎて、専門に此技を研究して、十九ヶ條の秘傳を創始し、巧に山水幽谷を小瓶に疊み、四季折々の草花を自在に室内に飾り、以て衆目を樂しましむるを目的とせり。されど、挿花の趣意は全く遺失せられて、單に技藝と變じ、花實を賞するよりも、却つて其技葉の陰陽、配合の善惡を賞し、茶道香道などゝならびて、秘傳口授など盛に行はれ、一の門戸を立つるに至れり。池の坊十九ヶ條の秘傳は、今も挿花者の唯一の法式として、宗家より免許狀を以て之を傳授す。その目錄左の如し。

七一色（櫻、水仙、杜若、蓮、松、紅葉、菊）
三箇の前置（松、萬年青、歯朶）
三箇の胴（松、竹、牡丹）
三箇の流枝（中段流枝、諸流枝、左流）
段躑躅（種々の躑躅を採集し以て京都加茂山、段のつゝじの勝景を花瓶中に移す法なり。
二つ眞
合せ眞

池の坊は、此の時斯道の宗家と仰がれたれど、其一流中よりまた流派を生じ、大に技の巧拙を競ひしかば、益々發達を促したり。元來挿花は茶事と共に行はれ、茶事を以て一方の宗匠たる者は、皆挿花をなさゞるなし。其法も茶人によりて一定せられしが、殊に名を得たるは、池の坊についでは、遠州流、石州流の二流とすべし。（茶道の條參照）次で末生流、宏道流等あり。此他二三の流ありて、多くは名を古人に托して流派を爭へども畢竟は池の坊一派に外ならざるなり。

其後徳川時代に至るも、池の坊は世々斯道の宗家として、大勢力を有したるなり。江戸枝折云、池

の坊の投入の花を見侍りて、

江戸へ出て都の花をいけの坊
見る人舌をふるふ獅子口（紀逸）

投入もはえた如くにいけの坊
しらぬ目からも花のうゑ人（臺雅）

凡そ挿花なさむものゝ期する所は、天地陰陽を本とし、立枝を天とし陽とし、水際に留の枝を地とし陰とせり。この兩儀備はりて、其中央に人の枝あり。これを天地人の三才といひ、以て體を調ふるなり。五枝、七枝、九段、十一段十五段に至るも、皆これを増修せるに過ぎず。且挿花の種類は數多ありて、一々記すに遑あらずと雖も、歸する處は、天地人の三才を本として、春の花は賑はしく活け、夏の花は盛に活け、秋の花は沈めて活け、冬の花は淋しく活けるを旨とするなり。即ち天地陰陽自然の理に則りて、四季に順應し、花神も春は花、夏は葉に、秋は實に、冬は枝に存するものなるを覺知して、其天然に一致するを貴ぶなり。其器物も甚だ多し。主なるは、玄翁、鉢孤、置籃、一重切、二重切、車僧、庸軒、船、油さし、宗仙籠、海はだ、かや壺、碪、四方口、馬盥、水盤、蓋形、釣瓶、等なり。花止にも、轡止、碇止、蟹止、亀止、卷水止、蛇籠止等の種類あり。

かくて享保明和の頃は、其法式も全く確定し、其形體に就ては、瓶口の線を以て山野の地面、若しくは池沼の水面と見做し、之に立つる所の草木は、さながら根を保ち、自ら生存しつゝあるものゝ如くなしぬ。此技大に人心に適ひて盛に行はれ、江戸勤番の藩士、或は交易の爲に往來する農商等の紹介によりて、殆ど全國に瀰漫したりき。寛政頃に至りて益々流行し、斯道の宗匠として各自門戸をはるの徒多くあらはれ、而も彼等は、各自に、

三角流、鶴翼體、樋鈞形など稱し、瓶中に立つる花の形體を以て流義とし、全く底止する處なかりしが、夫よりつぎ〴〵に種々の流派分岐せられて、今日は、殆ど遊戯的のものとなり了りぬ。

●婦人と訪問

Y.T.　土肥半次郎

●其一　訪問の時間は、成るべく短少なることを良とす。

●其二　正式の訪問は禮の重き者なれども、十分或は二十分を以て事足るべし。成るべくは半時間を過ぐべからず。

●其三　訪問を受けたるときは、答禮として此方よりも訪問するを定式とす。故に萬已むを得ざる塲合を除くの外、端書或は名刺のみを送ることあるべからず。西洋にては訪問を受けし答禮として、唯だ單に名刺のみ送るを以て、向來交際を斷たんとするの意思を表する者なりとせり。

●其四　特に時刻の約束あるにあらざれば、午後は、一時前若しくは六時後に人を訪問すべからず。

註に曰く

人を訪問するに於て、成るべく食事の刻限を除かざれば、時として一飯を乞ふ爲めに來れるにあらざるかを疑はしめ、左なくも主人をして饗應の準備に付き、多少の心配を拂はしむるの恐あり。又た午前とても餘りに早きに失すれば、化粧其の他總て午前中に於ける主人の用向を妨碍するの恐あり。

之を要するに訪問の時間は、午前に在つては九時後十一時前を以て午後に在つては二時後五時

前を以て普通適當の時刻となすべし。

●其五　第二回の訪問の時は、忌避の意を表せざる爲め、暇を乞ふの前後は數分時間立ち止まるべし。

●其六　訪問中別に又た訪問人ある時は、其の新に入り來る人の席定り、主客落付たるを見て、靜に立ち、主婦に別を告げ、又た來客にも叮嚀に挨拶して、餘り圭角だたぬ樣一歩先んじて立ち退くべし。

註に曰く、是れ啻に主人をして、二組の訪問者を同時に待遇するの煩勞を省かしむる爲めのみにあらず、或は時として新來客の主人に對する談話の他聞を憚ることなしとも限らざればなり。

●其七　未だ曾て赴きたることなき家に招かれし時は、當日前後に於て、必ず一回の訪問を爲し、或は端書か名刺を送るべし。

●其八　禮式に係る訪問は、其の間成るべく何事にも差支なき美しき言葉を用ゐ、主人より再來を希望し、退散を惜む程の期を度合として暇を乞ふべし。

●其九　既に青春期に達せる婦人は、萬已むを得ざる場合の外、單身にして男子を訪問すべからず。

註に曰く、李下に冠を結ばず、瓜田に履を容れざるは古人既に戒を垂れし所、今ま若し萬已むを得ざる用辨の爲めに、男子を訪ふの要あるときは、成るべく親密の者一人を伴ひ行くを良とす。假令先方の僧侶たり裁判官たり、醫師たり警察官たり教師たるに論なく單獨の訪問は愼まざるべからず。

（未完）



小説 輿提峠

山崎紫紅

（上）

『なう、その兒の通りやつたは、何時の事でありやる』

と問ひし女は四十路の阪を二つ三つも越えたる尋常氣の旅裝束なり、此頃の倣ひ、女子の獨り旅はえせぬを、是れはまた如何なる大事の用ありてにや、眉の間には千萬の苦痛を集めたり、手にせる竹の杖を力に、返答いかにと肩唾を飮んで、村人なるべし、むくつけい男の語るを聞けば、

『されば午の刻ほどなるべい、輿にか丶れて兒が、通りやつた、年の程は十二三、辨財天女の現せられた兒でがなあらうぞ通りやつた、警固の衆が七八人、どや〳〵とわつぱさつぱの中じや、輿の中ありや顏だけ見たじや、和御前の知り人でがなあるべい、顏立ちも似た樣じや』、

『やれ、此方は勿体なの事を云やるぞ、賤しい妾風情に、なでう面の似やるものぞ、あれは……、あれこそ山内殿の若君じや、龍若丸君にて在はすぞ、して行先を何處と聞かしやつた』

『されば何處への御供か、我等は知らぬじやまで、伊豆一國は北條殿の領分じやでされど下田へは一筋道じや』

さるかと計り、力なげなる姥は思案せる樣なりしがやがて

『さらば何とも聞きまいらぬか』

と念を推して、下田道さしてまた杖を力に辿り行きたり。

頃は二月の末つかた、伊豆は、暖國とて、野も山も霞立こめ、花ある木までも赤色さして、賑はへる中にも、山櫻のはや咲き亂れて雜木の中に交はれるは中々に美はし、されど此姥は四方景色を觀ることも得せず、只時の行く日足を眺め、道行人に龍若丸の行衛を問ふのみにて、急げども急げども、いまだ遠しとばかりにて、木立野にて道を問ひてより、大平松か瀬を過ぎ青羽根の里へ來て、爰に漸く迷を來たしぬ、今しも天城を越えて湯が島より來れる旅人の話には、さる兒の姿を見ずといふ、訝かしと問返したれど更らに行衛を知らずといふ、こはいかに龍若君の雲に入りたまひしか今までは遠しとのみ聞きける一行の、後影さへなきといふ事は、抑もいかに成行きたまひしやらむ。

この姥といふは龍若丸の乳母なり。

（中）

天文二十二年正月、鎌倉兩管領の一人、山内の上杉憲政が立籠つたる上州白井の城は、寄手北條左京太夫氏康が、猛勢防ぎがたく、主人憲政は長尾謙信入道の助力を頼まんとて、當年漸く十三歳にならせたまふ龍若丸殿を殘して、越後路に發足の不在中、乳母の夫と聞えし目方新助等は云甲斐なくも、主人なる龍若丸殿に繩かけて降參をぞしたりける。幼なしとて稚しとて、いまは大事の敵なれば、直ちに降人目方新助、弟長三郎、九里采女正など九人と共に、氏康が居城たる相州小田原へ將て參りしかば、大將の仰せとして、幼少の御身なれば、樣をも變へて助命せさせんとは思へども、四海の治亂計りがたく、父子兄弟内に

閧ぐ時節たれば、まいてや怨敵の大將なれば痛はしながら失ひ奉つるべし、さはいへ近き城下にて斬らんも氏康あまりに心なきに似たり、國を變へ天城わたりに御供して、御生害を進めよかしとの仰せによりて、怪し氣ある輿に乘せて、玉くしげ箱根の山をこえ、三島よりは斯く湯が島の里へと送る。

（下）

姥は辿り行けども、何處にても誰れにても、若君の姿を見奉らぬは無しといふ、さあらば何れにか在しますぞ、御命のあるうちに、唯一目見參らせ、かへすぐも憎くき夫の不忠を詫び、この乳母は同心にあらぬ條をも訴へまゐらせたきにと、心はやれど疲れし足元の、首のみ前に出で丶嵯峨澤の許まで來りしは未下りの頃なり、傍らなる石に腰を下ろして喘ぎ々々休らふ、行衞を見遣れば天城山は飛ぶ鳥も翔けるに難く、人は何れを上り行くらむ、蒼天を茲に涯れるかと見ゆるは、げに天城山の稱空しからず、その懷より流れ出でたる狩野川の、清らかなる流れの音は淙々として、春の水長閑なれども我心は冬霜の冷たさに消えなんとす、折知り顏の櫻花の、山颪に散れるを見るにつけても、若君の蕾の花の上かと心懸りなるに、又氣を張りて杖を力に立上がる折から、傍の道よりいつと出でたる旅裝の漢子、此邊の者と覺しき男と

『やれ痛はしい事であつた、』

『なかくあはれな事でござりました、道の猛者も涙をこぼされた、』

など語らひつ丶一人は横道へと入りぬ、『悼はしい』『あはれな事』といふ言葉は姥の胸へ突入るが如く、思はずも

『なう』

と聲を掛くれば、旅装の漢子は止まりて

『此方の事か』

『さればよ、いまの話は何でおりやるか』

『話の事かや』

と漢子は佇立しぬ、見れば此邊には見馴れぬ古女房の、いかさまこれは、あの美はしい稚兒に所縁の者なるぞ、

『をう、美くしい稚兒が腹かつさばいたじやて』

『え、え…………』

と姥は地にどうど仆れぬ、

『何とした』

と旅人は愕ろき慌て驅寄るを、拂ひ退け

『して、して、それは誠か』

『なに僞りを申すべい、はて死にやつたまでよ』

『え丶遲かりし、はや御生害あつたじやまで、して御身には、御身は其場の有樣を知つてか、それはいづくぞ、遠くにてか、近きにてか、』

『お迫きやるな、先づ下に居て我等が申すを御聞きやれ、』

旅の漢子は姥を以前の石に腰をかけさせ、其身に向ひあへる巨巖を折からの床机となし、

『始めから存じ居るじや、さらば語るべい、したが和御前、和御前はあの稚兒には、抑も何に當るぞ、』

乳母ははたと詰りぬ、こ丶は恐ろしき敵地なるに名乘りて枉禍を受けなん事もと打案じたる樣を見て、は、は、は、と笑ひける漢子

『某も以前は武士の果じや、よし敵人とて高が女性をどうすべい、案じやるな、されど見た所龍若丸殿の母にもあらず、よい〳〵物語らうぞ

されば今日の日も半は過ぎた頃じや、一臺の輿がこの川を渡つたじや、厳つげの武士共が七八人扈從して居る、清水殿(下田の城主)の御内寳が下田への道中か、それにしては腰元共が居らぬ、外に輿に乗るは、をゝ小田原殿の若君かと、近寄り見れば、忌はしい白木の輿じや、さても悼はしい、花の樣な稚兒をかいてじや、誰人に渡らせらるゝと問ふたれば、さてもあはれや上杉殿の若君龍若丸殿で在す、やれそれは如何にしてと問ふたりや、上州白井で生捕られたさうな、」

姥の眼は釣上りて當時を追懷するが如く、太き息をつき、

『これ、小田原へ將て來られた迄は知つてじやに、早う御最期の樣をよ、』

『迫くな、迫かれな、迫いたとて若君の蘇生るでもあるまいに、は、は、は』

と假笑ひす、

『偖も淺ましい事じや、誰あらう、山内の管領殿の若君、世が世なら暴き風にもあてぬ花の兒盛りを、やれ、それを何んとするぞと問うたりや、御生害を勸むるとある、はて御生害勸むる迄あら 小田原ではせいで、あどて是れへは御供したぞと問へば、青蠅や仔細がある、」

姥は口を挿んだり、

『なにが仔細?』

『いたいけ姿を見るもあはれじや、且うは假初にも管領の嫡男じや、人知れぬ所へ御供申して御最期を勸めよとある北條殿の仰せじやとよ、某も承はつて、そゞろ涙に暮れ申した、付くともなしに御供して行くと下田道を左りにきれた、御最期は此邊かと思へど若君は更らに知らぬ樣

じや、あの一枝を取りくれと山櫻を手折らして、輿へ入れて詠めて在すじや、人か櫻か、花か兒か、差別があるべい、やがて散る花は其儘姿じやに、無殘々々と花瓣をおのれと狼籍じや』

『お情ない』

姥は聲を揚げて泣き出しぬ、漢子も暫くは途切しが、

『緑の萠した木立を後方に駒立場がある、自然と結縷の生へた場に下ろし、若君を出いて敷皮を進め、頭人らしいが申すには、いかに若君、能う御聞きやれ、幼ない御身ながら、山内殿の嫡流じや、御武運の拙なくてかく捕はれ參らせたが、主にて候ふ氏康も、助け參らせんとは存ずれども、怨敵の大將じやに、やむなく御生害を勸め申すと申したれば、成人すれば采振る御身じや、惡びれた氣色もなく、さもあらめと仰せられた、並居る者共は言葉もなくて、啜泣きをするのみであつた』、

姥は應答する元氣もなく、只涙のみ誠を見はせり、狩野川の流れは漸く其音を益せり、

『若君は小刀を手にしたまひ、なう、さるにても主に繩うつた新助はいかにしつると宣ふた、頭人が申すには、若君、その目方新助、同苗長二郎、九里采女正なんど九人の者は今朝酒匂の河原で首打つたじや、味方に大功ある者ながら之を養ふたりや、いつまた小田原沒落せぬとも限らぬ、さるときには、また敵方へ忠盡くす奴等じや、切れとの仰せによつて、若君を西へ御供申した所に、東の方へと斬られに萎れて歩んだじやと申す、これ、さう顏はれずに能う物語を聞かれよ、若君はにつこと笑んで、さらばと逆手に刀を取直し、おゝ申された、さるにても

乳母はいかにしつる………

『なに、乳母はッと』

けたゝましく面を上げたる、漢子はその様を熟視て

『其御聲に此方の素性が分り申した、これ若君は和御前の事を申された、あゝ後は涙じや、櫻と共に御死骸をあの峠へ御供したまでじや、よしなき長物語に、昏うあつて來た、和御前、御死骸を追ふなりや、あの峠を今頃は輿提げて越えたであらう』、

と指差せども見んともせで、只涙に暮るるのみ、さらばと旅人は立上がれば、乳母は只泣くのみにて別れも告げず、旅人は困じたる氣色にて、

『あゝ一刻あまりも遲れた、急がずは今夜の泊りは心掛りじや』、

斯く獨語ちつゝも北を差して飛ぶが如くに走り行きぬ、乳母は泣くのみ、乳母の涙は泉なりけむ、盡きる瀨も見えざり。

日は西へ傾きて、山の端に紫の笹縁淡けれども、乳母の嘆きは休まず、まことや若君が最期にまでも名を呼ばれたる御慈しみに對しても、涙は盡きぬなるべし、烏は梢に暮を告ぐれど乳母の嘆きは止まらず、まことやその御慈しみ深き乳母が身は、よしや同心ならずとも、その夫が若君を搦めし事は、吁、生前に御詫言なと申せ、いまは此世にあきがらに、あゝ言の葉の今は用なき。

○　○　○　○　○　○　○　○　○

乳母は死して御詫を申さんとてか、この嵯峨澤のほとりに身を投げ、空しくなりし跡、今は乳母神社といへり、龍若丸君の生害ありし所は、湯が島の中なる石枕といふにあり、その東に横はれる天城つゞきの山をさして、輿提峠といふはこの君の

輿を提げたるよりの名なり。（をはり）

福島將軍夫人（二）

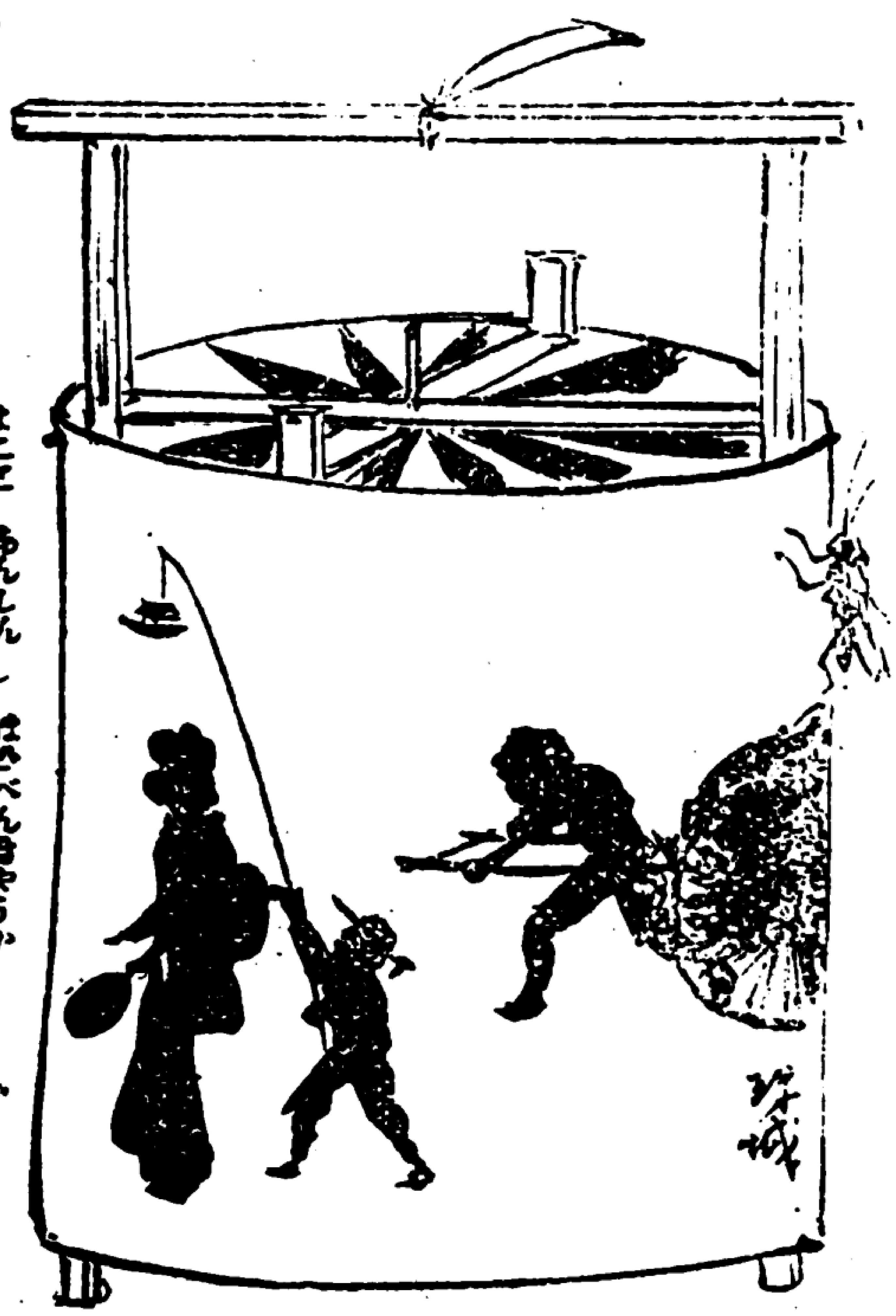
森林黑猿

福島貞子夫人は、舊一橋藩士高野貞條君の長女、明治七年五月福島家に嫁したのでありまするが、貞子夫人の將軍に嫁してより殆んど三十年、將軍は南船北馬、家に在る事極めて稀れで御座いまして、貞子夫人は常に能く其家を守り、一身を以て内外の勤めに當りまして、平生厚く其の舅姑に事へ、深く其の弟妹を親愛し、そうして能く其の數子を鞠育致しますので、一家藹然之に依つて安きを得、毫しも將軍をして内顧の御心配をさせないので、眞に多く得難き女丈夫で御座います、想ふに將軍が赫々の偉業を成すに至りましたのは、貞子夫人内助の功も亦與つて力ある事と存じます、そこで私しは、同夫人のことをお話し致しまするに就て、先づ將軍が夫人を娶つたばかりの時の、生活上の狀態を演べて、讀者のお慰みに供しませう、將軍が未だ陸軍省十一等出仕に補せられたる頃で御座まして、御夫婦牛込宮比町に住し、僅かに六疊と二疊二た間の家に居て、微かな生計をして居らる頃でありました、或日將軍は夫人に向ひ

福島「貞や、怎麽も時計がないので寔に不自由で困るがねい、役所へ出頭して見ると、遲かつたり、又速過ぎたり、それも晴天の日にはそんなに間違ひもないが、雨天の時や曇天の日には、早いか遲いか分らぬので實に困るテ」

夫人「私しも爾思ひますから、安時計でもと思ひまして、心掛けては居りますが……アノお國許の方へも送つて上げなくてはなりませんし、それと

でもお父さまやお母さまに、御不自由のない様にと思ひますけれども、勿々爾思ふ様には參りません位ゐですから、萬望郎君今些しの間御辛抱を願ひます、其中には私しが何とか工夫致しますから」
將軍「イヤ和女に爾云はれると俺が却つて面目ない、俺には何しろ國許に厄介が多いので、却々今の薄給では國の生計まで行つてゆくと云ふのは容易くない、それでもまた和女が嫁て呉れてから、家政の事は俺が些しも心配なくなつて、寔に安心じや」
夫人「郎君に爾被仰られては、却つてお耻かしう御座いますが、愫と何とか時計を」と夫人は少焉考



へて居られましたが、稍あつて
夫人「郎君、好い事が厶いますよ、毎朝早く鼠色の洋服を着けた人が、お辨當を提げては同じ時刻に通りますから、彼の人を時計として、彼の人が見えたら、郎君も家をお出になるとしたら、宜しいではありませんか」
將軍「フムーそれは甘いね、時刻を大概間違へずに通るかね」
將軍「それは最う毎日同じ位な時刻で座います、餘程勉强家だと見えまして、一日もお休みにならぬやうで御座いますよ」
夫人「では、其男を時計としやう」
と御夫婦は笑ひながら斯く定めました、其の翌朝

から奥さんは早く起きて、戸を開けたり掃除をしながら、表を注意して居りまする、頓て例の如く鼠服先生は、汚ない夏服に下等な帽子を被り、辨當片手にゴツ〳〵と行つて參りましたから

夫人「郎君、參りましたよ〳〵、時計が參りました」

將軍「そうか、好し〳〵、心得た」

と急いで袴を穿いて出懸けます、毎日爾ですから、隣近所では不審に思ひまして、或日隣家の妻君が、夫人に向つて「福島さんの奥さん、お宅でね毎朝時計が來たとか、未だ來ないとかと被仰つておいでなさいますが、彼れは何で御座いますか」

夫人「オホヽヽヽ、飛だ所を聞かれましたねい」

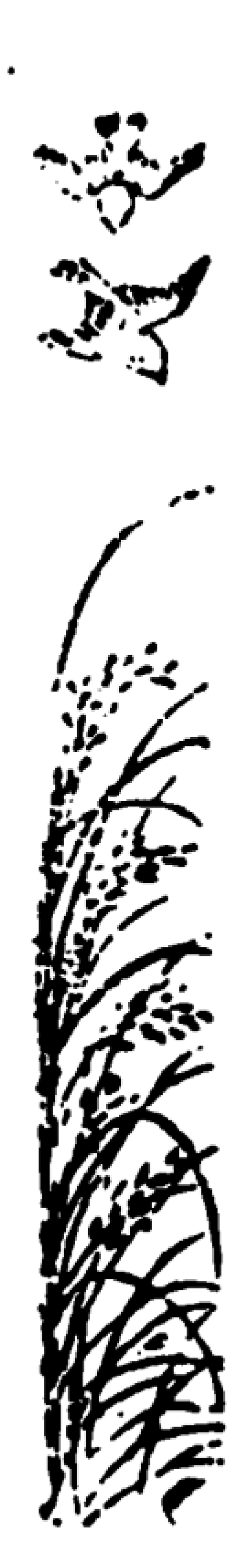
と云つて有の儘に語つて大笑ひをしたそうでありますが、其後福島君は陸軍中尉に任じ、敎導團勤務を命せられたので、始めて同團へ出頭すると、小使が茶を汲んで參りました、將軍、何心なく茶椀を取つて飲みながら、弗と見ると、其の茶を汲んで來たのが、時計にして居た男だから、福島君思はず

「ヤーお前は時計ぢやないか」

と云つたので、彼は吃驚して

「イヱ私しは時計などゝ云ふ者ではありません、澤と云ふ者です」

將軍「アハヽヽヽお前は知るまいが、お前は時計だよ、ウッアハヽヽヽ委細を語つて、共に大笑ひをしたそうですが、此の時計男は今尙は王子の製紙會社に勤めて、今以て時々福島將軍の邸へ參るそうですが、坊チャンなどは此人が來ると、時計の老爺やが來たと云つてお喜びになります、時計男の姓名は澤賴寧と云ふそうです。



文林

曉郭公　　徳大寺實則

よもすから待しかひあり明かたの
　空さやかにもなくほとゝきす

蚊遣火　　佐々木高行

そこはかと蚊遣のけふり立みれは
　彼やまかけも家やあるらむ

薄暮螢　　竹屋光昭

夕まくれ木末はいまたあかけれと
　かけにほたるは顯はれにけり

水郷螢　　西三條實義

うなゐ子の聲はすれとも川つらの
　里わしつかにほたるとふなり

艦隊操練　　宮地嚴夫

船いくさならす御國のうみへには
　よるあた波もあらしとそ思ふ

小野道風　　北郷久政

青やきにのほる蛙のこゝろもて
　まなひのひかりそへし君かな

早苗　　芝葛鎮

千町田に水せきいれてゆたかにも
　しける早苗のいろそすゝしき

竹徑通幽處　　鎌田正夫

奥深くひけるかけひのみゆるかな
　このたかむらに誰かすむらむ

牧馬　　大口鯛二

千里ゆく駒はすくなき世なりけり
　おなし御牧のうちにそたてと

時鳥稀　　岩崎勝從

今はゝや夏ふけぬらしほとゝきす
聲せぬよはのおほくもある哉

夏月　下田春興

夕立はあとなくはれて大そらに
あらひしことき月そいてける

禁苑新樹　近衞貞子

御園生の若葉をおのかものにして
かけにたはるゝ蝶もありけり

水族館　柳原愛子

海川にすむてふ魚をまのあたり
あつめても見るむろの内かな

湖上雲　南鄉柳子

みつうみにうつりし冨士の影消て
箱根のやまをおほふむらくも

衞生會　小池道子

身を守るみちを敎ふることの葉は
くすりにまさる藥ありけり

山寺子規　松平峯子

經をよむこゑの絶間にきこゆなり
うしろの山のやまほとゝきす

河上郭公　佐藤艶子

降しきるさみたれくらきたに川を
ゆきかへりなくほとゝきす哉

夏池　中村禮子

たちよりて涼まぬそても寒きまて
さゝなみすゝしにはのいけ水

女學校　小川直子

かけ廣き庭のをしへのほとみえて
匂ひことなるをみなへしかな

松有歡聲　中島歌子

めつらしきけふの圓居の嬉しさを
聲にたてゝもまつかせそふく

自轉車　土井榮子

何事をする身もかゝれこのくるま
　ひとのちからは賴まさりけり

詠伊東温泉　下田春興

つきさかき伊豆の國なる、あつさゆみ伊東のさとは、國からかたかくたふとき、里かはのさやけくきよき、みなとおす海もまひろく、見渡しのやまさへたかし、そらをしもうらくはしみか、こゝをしもまくはしみかも、この里にいてゆあみむと、いや遠く國邊をはなれ、いや高にやまをこえきて、よりつとふをとこ女の、年にけにかすこそまされ、この里にあみするときは、冬さむくゆきのふる夜も、うつみ火を賴みたにせす、夏暑く風のなき日も、木の下を尋ねたにせす、いかはかりおもき病も、あらふことといゆとこそきけ、あつさゆみ伊東の里は、そこ故にたかくたふとし、こゝ故にさやけくきよし、この海のたゆることなく、この山のいやつき／＼に、よろつよの語らひくさと、いまた見ぬ人にもつけむ、おとのみも名のみも聞て、ともしふるかね。

世のちりをいとふの里の名におひて
　わくやいてゆもさやけかりけり。

ロングフエロー詩中の一齣　柴田聽雪

小川と潮波

（その一）

ありし古代の作詩家が
　げにうたひけむそれのごと
山より出づる小川や
　黄金色なす眞砂地に
白銀しきて流れ行く

（その二）

はるか彼方にたゞよへる

潮もからき海原よ
激浪高く逆巻きて
灣洞を打ちて咆哮し
長汀に寄せては歌吟ふ

（その三）

別れて遠く流るとも
終に小川も海濤となる
苦き潮の我が胸も
清劑雅樂時に湧き
心の海波に清水充つ





八月五日兼題

筆

天　越中國伏木　長谷川初枝子

をとめ子かかよわきま手に取もちて
虎をもうつすふてそくすしき

評、力あるよみ口、似るものなし。

地　松山市西堀端町八番地　上原のぶ子

こゝろして筆はとらましほまれをも
そしりをも得るものとこそきけ

評、調やすらかに用意深し。

人

東京市日本橋區通四丁目　牛山素子

友かきのへたてぬなかにさきいてゝ
にほひゆかしきふてくさのはな

評、優美にしてひとふしあり。

甲之部

肥後　坂本美智子

しけりあふ筆のはやしにかくはしき
こと葉のはなもさきにほひつゝ

東京　山本梓子

ひともとの筆のすさひにことのはの
はなも千くさとさきにほひけり

東京　篠田圓子

かゝみにもうつらぬ人のこゝろさへ
うつすはふてのちからなるらむ

埼玉　横田秋子

いたつらにおいたるひとも筆とりて
いそしみまなふ御代にもあるかな

東京　林環子

いたつらに筆をはとらしむらきもの
こゝろしらるゝわさとおもへは

肥後　野口靜子

いにしへのひしりの道もふてなくは
なにをしをりにあとをとめまし

肥後　佐々有鄰子

むらきものこゝろの花はとりとりに
ふてのはやしににほひぬるかな

肥後　佐々小琴子

筆のはなこゝろのまゝにさきいてて
よにめてられむことをしそ思ふ

肥後　千知波橋子

春のはなあきのもみちとりとりに
にほふはふてのはやしなりけり

東京　北島操子

とる人のこゝろこゝろにたのしさも
　かなしきふしもこもるふてかな

香川　鎌田光惠子

かきなかすみしかき筆のいのち毛に
　千代のいろ香は見えもこそすれ

肥後　德永萬壽子

みやひなる人のことはのはなもみち
　ふてのはやしににほひぬるかな

乙之部

物おもふこゝろの憂さもかきはらふ
　手なれのふてそたまはゝきなる　大阪　桝田登子

なしへ子も筆のはやしのかけなくは
　まなひのみちをたとりわふらん　和歌山　瀬戸榮子

朝なゆふな手にとる筆はかろけれと
　はこふにかたきふしそこもれる　肥後　田代艷子

いそのかみふるきむかしの花もみち
　とりくにほふゝてのはやしに　但馬　田尻保代子

千代やち代ひちりのをしへ傳へしも
　ふてゝふものゝあれはなりけり　大阪　中舘やう子

兄の君よつるきとるへきみ手にしも
　なほゝそふてはゝなたさらなむ　山口　岩田章子

なきはゝか筆もちかへてとりのあと
　ならひしむかしいまはこひしも　相州　中山富美子

大うみのちひろのそこはふかけれと
　いかておよはんふてのめくみに　大阪　片山きぬ子

なへて世のひとのこゝろも研くへき
　ふてのちからそたふとかりける　東京　北島功子

いくち代のむかしの事もまのあたり
　みするはふてのいさをなりけり　和泉　福原菫子

あさか山わけそめしよりいそけとも
　ふてのはやしのおくはしられす　肥後　鶴田貞子

世の人にいひもはられぬことをしも
　ふてのちからそもらすことなき　肥後　服部倫子

手にならす筆そたふときかせの音の
　とほきともにもたよりつたへて　東京　笹川ふさ子

たらちねのはゝの手なれの筆をしも
　見るたひことになみたこほるゝ　東京　平尾あさ子

世に遠く思ふことをもうつしおきて
　ふてはこゝろのかゝみなりけり　東京　新海わか子

目に見えぬ人のこゝろをかきかはす
　ふてのたよりそいのちなりける　東京　吾妻ちか子

言の葉はいかなる花にさくならむ
　つくゑのしまにおふるふてくさ　東京　片山あや子

ちりひちのつもるおもひも筆なくは
　いはてつたふるみちなからまし　山口　川村多豆子

世の人のこゝろによりてやいはとも
　　東京　戸賀崎治子

つゑともなるは筆にそありける

あしひきの山したみつのみなかみは
ふてのはやしのしつくなりけり　筑後　鏡山増代子

目に見ゑぬ言葉のはなもうつし出て
さとすはふてのちからなりけり　大阪　伊勢村春子

思ふことおもふまに〳〵かきなして
よきふてはかりうれしきはなし　名古屋　瀬木せき子

ことの葉の花もちとせにゝほへるは
ふてのはやしのあれはなりけり　長崎　八尾いへ子

なき人にあふこゝちせりいまもなほ
かたみにのこるひともとのふて　東京　椎野鋭子

みぬ人のきゝきこゝろもしられけり
たゝなほさりのふてのすさひに　東京　椎野薫子

すゝみゆくよの幸なれやことのはの
ふかくもしけるふてのはやしは　肥後　徳永識子

手にならす筆のはこひのよしあしに
こゝろのおくもみゆるなりけり　茨城　荒野たに子

なにはつなはなち香せしむかしより
なれてもふてはまゝならぬかな　三河　河合ぬひ子

かきなかすその水くきにこきうすき
ひとのこゝろもみゑにけるかな　三河　服部萬子

とり〳〵に筆なかへてもおろかなる
みにはやさしきあとはかりにて　三河　服部正子

筆とるはやさしかりけりみつくきの
あとにこゝろのみゑむと思へは　三河　三宅中枝子

人こゝろこきもうすきもおのつから
ふてのはやしにあらはれにけり　三河　本多きさ子

朝な夕な手にとるふてのいかなれは
おもふこゝろにまかせさるらむ　東京　大木光子

丙之部

もしほやくあまのなと女も深山なる
しか毛のふてなとる世なりけり　東京　名木山勝子

なれぬてにおほつかなくも取もちて
ゑかくもふてのちからなりけり　東京　高橋和香子

見もしらぬ昔しのことなゐまの世に
みするもふてのすさひなりけり　肥後　坂本たけ子

とひも口ぬ遠き千さとのほかまても
かよふはふてのちからなりけり　肥後　徳永雪枝子

わか口にいゝゑぬことなおもふまゝ
のふるもふてのちからなりけり　肥後　坂本美代子

うみやまな隔てしともへおとつれも
ふてのめくみにかゝれこそすれ　東京　南井あい子

思ひなはいふものうきわか身には
たゝふてのみそたよりなりける　東京　松村あさ子

行てみぬふしのすかたなゐなからに
なかめくらすもふてのめくみそ　大阪　古山たね子

とるまゝにまはらぬ筆なうらむかな
おろかなるみとかれてしれとも　東京　三好珍子

よの中にふててふもの〻あれはこそ
ちさとのなちも居なからにしれ　廣島　春野静子

ひともとの筆もてかけることの葉の
もろこしまてもゆきかよふかな　廣島　春野治子

いまの世はたかき賤しきおしなへて
ふてのはやしにあそふなりけり　静岡　夏目松江子

ふでのはやしをわけてこそゆけ

とる筆のはやしをわけてふみみれは　埼玉　前野壽賀子
むかしのひとにあふこゝちして

君か代のめくみのつゆにすみすりて　埼玉　横田音羽子
はなさくふでのにほひこそすれ

ふでとりてこゝろのまゝのひと節を　横須賀　上田雪子
へだてしきみへおくるたのしさ

たまほこのみちのをしへを永くきに　横須賀　岩橋花子
のこすはふでのいさをなりけり

さま〳〵に言葉のは花もにほひ出て　伊豫　竹村竹里子
ふでのはやしそたのしかりける

いひがたき言葉のふしもすなほなる　三河　永井さい子
ふでにまかする世こそやすけれ

その人のこゝろとともにのちの世の　伊勢　池田梅子
ほまれにのこすふでのあとかな

よしあしも千とせの末にかきとめて　東京　川村まつ子
のこすはふでのちからなりけり

まゆすみのあたりを思ひめくらして　東京　矢野やす子
ひたふるにのみかけぬふでかな

おほつかな言の葉くさのすゑまでも　東京　片山ふみ子
のこれととりしふでならなくに

千代までもよろつ代までも言の葉を　東京　戸塚てつ子
のこすはふでのちからなりけり

手にとるはわれもひとつの筆なから　山口　村上操子
ひとにおとるそくやしかりける

なにはゐのよしあしわくる言の葉も　東京　戸賀崎久子
ふでのちからによりてこそ見れ

たくみにもかきなかしたる山かはを　筑後　武田龜子
みするはふでのちからなりけり

面しろきふしをかされてかきしるす　大阪　橋本庄子
こころのうちはふでやしるらん

ひらけゆく御代のめくみに深山邊の　大阪　伊勢村花子
わらへもふではとりなれにけり

もろ人のかろくとれともなか〳〵に　大阪　大坂谷信子
まはらぬものは筆にそありける

朝な夕なふでのはやしにわけいりて　和歌山　池田松枝子
よにかくはしきはなをみるかな

うるはしき人のこゝろはとるふでの　札幌　山田靜子
はなともなりて世にゝほふかな

ひとみなのこと葉の花のいろも香も　札幌　山田嬌美子
世にあらはるゝふでそたふとき

筆といふたふときもののあれはこそ　伊豫　小田操子
ふるきかみ代のこともしらるれ

紙にしもおもふこゝろのそのまゝを　東京　小川たき子
うつすやふでのちからなるらむ

思ふことうかふまに〳〵ふでとりて　栃木　青木たま子
かくもうれしきことの葉のはな

ひさかたの天津かみよのむかしより　長野　臼井ひさ子
いまにかはらぬふでそたふとき

さま〳〵の人のこゝろをまつふさに　長崎　内藤美與子
見するそふでのすさひなりける

いのちけのなかくもあれと文をかく　京都　坪内りき子
ふでのいさをそよにのこるらん

かゝみにもうつらぬ人のこゝろをも　東京　椎野ぬき子

みがくはふでのちからなりけり
なかき世ののちまて殘ることの葉は　東京　椎野清子

みしかきふでのあらはしにけり
みつくきにふかき色香そこもりける　東京　椎野秀子

てにとるふてにはなやさくらん
我か思ふこゝろのまゝにかきやりて　大隅　羽律春子

かくすことなきふてそうれしき
開け行く御代のさかねもつく〴〵と　大隅　宇都涙子

おもへはふてのいさをなりけり
我か思ふこゝろのまゝを書きつるは　大隅　宇都艮子

ふてゝふもの〻あれはなりけり
うみやまを遠くへたつるふるさとの　大隅　宇都常子

おやとかたるもふてのめくみか
はかりなきまなひの海のみなもとは　肥後　江上千壽子

ふてのしつくのなかれなるらん
いにしへのみさをの花のいろも香も　肥後　德永廣子

ふてのはやしにゝほひぬるかな
いにしへの人のことのは千代八千代　肥後　德永多瑠子

のこるはふてのちからなりけり
ひと傳にいはぬこゝろを言ひやるも　東京　近澤和子

ひとへにふてのちからなりけり
いにしへの賢ときふみのいまの世に　上總　高石登代子

のこるもふてのいさをなりけり
みやひなかのちのしなりと染おきし　和歌山　長尾小ゑい子

こと葉のはなをふてにさかして
かたりつきいひつくよりも言のはゝ　岐阜　吉村せい子

ふてのちからによるへかりけり

ひたすらにふみの林にわけいりて　東京　泥堂菊代子

ふてのすさひにはなやさかせん
人なみに文字もかきねぬおのか身を　松山　梯たけ子

いとかひなしとふてやおもはん
おもふその人のこゝろをそのまゝに　伊豫　岡田いの子

かきあらはすは筆にそありける
筆のけのやれはつるまて學ひなは　伊豫　黑川重子

千代もくちせぬなはのこるらむ
人ひとの見ぬよのこともしるへきは　松山　水木とも子

みなみつくきのしわさなりけり

八月五日兼題

虫干の記

天　山口縣長門國阿武郡山田村　岩田章子

虫干よ。ありし昔の忍ばれて、吾が心さへいひしらずいみじう哀れ深し。白がねの目貫したる玉劍、ま弓かち弓、緋緘の鎧など、そのかみ祖母君の昔語りも、今更に思ひ出られて、實に君が代なるかなと覺えしが。棟に充つる計りの文の中に、只一つ、わが文箱の傍らに淋しう座りたる金絲の紐かけし朱塗の手箱。人はあやしとのみ見るべし。などて年々に古りゆく紀念に獨り吾が思ひの新

たならん。中は開かじ、心はいはじ。繰出す懷ひの糸は、亡き母君や知り給らむ。あはれ、はふり落つる熱き涙はせきあへざりけり。

の一章子と、父君の召しますに、笑み作り應へして罷れば、これ運べとて、眞珠黄金の玉の數々をとうで出されぬ。目も眩ゆくて、一筋に眺め入りしを、人の心こそ璧なれ。その心に虫つかで美しき光世を照さんぞ、父が願ひ、夜光る玉も黄金も物かは、と仰せられけるにこの御詞高くて、至らぬがちの吾が心にもしみ〴〵と感ぜられぬか。

評、太平の象あり、追懷の涙あり、又た心の戒ありて、文章の典雅に出來たるは最と賞ぶべし。

地

肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

八月三日は日曜日にて、舊暦の六月三十日なり。學校も避暑中なれば、汽車より官幣中社八代宮の大祭に詣で、奉賽をへて夜行のに乘りてかへる。車中にて指をりかぞふれば、今は十年ばかりのむかし、祖母君の御供に侍りて、今日の大祭を拜み來りしことありき。今年は再度のもの詣なり。祖母君の御供せし時の歸りは八月四日なり。今度もおなじ日にかへりつきぬ。むかしの五日には祖母君の文庫にをさめおきたまひし何くれの書籍をとり出たまひ、虫干にとて妾を御手助けとしたまひ、朝より夕かけて年波うちよせたまひし老の御身をもかへりみたまはず、立はたらきたまひしが、其年の十二月の末つかた、七十九歳の高齢をたもちたまひて、身まかりたまひぬ。祖母君の紀念とて翌年よりは妾が一身にひきうけて、暴書のわざは八月五日をなん定日となしおきける。本年も今日は其わざすべき日なり。朝日書窓に照わたるころより文くるまの書をはじめ、書齋に藏せし和漢洋書諸何くれと横山の如くおきならはしたり。羽箒とりて紙魚をがつがつはらひやるかたはしより竹取物語の古めかしく榮花の名におへる物語、日本書紀、古事記傳など一章一句よみ見るに片輪車の蒔繪を摸したる手匣ひとつぞ出たる。是は祖母君の遺物なり。謹みて開き見るに、諸方よりの消息文ぞ多かりける。中に祖母君の御筆にて孫女が七歳の時尋常小學校に入校すと、嫗が前にひざまつきてよめる歌、

祖母さまの御ひざはなれて今日よりは
　　學校にいることのかなしさ

とあり。妾が幼時のものなり。あなはづかし。是

より讀書はとり捨て、もはら紙魚を拂ふとにのみ力めたりき。あなあつや。涼風もがな。

評、ありしむかしを偲ぶの情、あはれにもまためでたし。

人

東京神田小川町一六　福富幸子

過る日、松平某の君の御館へ御けしきうかゞひまつらむとてまうのぼりけるに、近くさもらふ人にして、御藏なる御調度、唐大和の書どもあるは、畵卷物等所せく取出て虫ほしなむせさせ給ふ。よき折から參りあひけるよと思ひて見もてゆくに、いづれおろそかなるはなく、誠に心とまれるは、遠つ御祖の君のこゝかしこの軍に出たゝせ給ひしをり着給ひし鎧なりとて、其功ありしことゞも書記したるものさへ添たり。そこなはれし所に、はた糸のほつれにもみだれ世のさま思ひ出られて、そゞろに淚さしぐまれぬ。かくて時のうつるもおぼえず、長き日影もかたぶくころ、いとまこひまつりて、まかんでける道すがらかくなむ。

虫はみてふるき鎧の糸みても
みたれにし世をおもひやるかな

評、趣向たくみならねど、文章老熟のあとあり。

（以下原稿到着順）

長崎　內藤擧與子

今日なん虫干ものせんとてさま〴〵の調度などとりひろげぬ。幼き子等の社袢見て、誰がいつの世に着裝ひ給ひつらんと、あどけなくとひつるもをかし。古へより傳へ來し衣の澤なれば、おほぢおほばなどゝ、其うつりかはり、過來し方を物語るらんやうなるも哀なり。僅に三十年餘りのいにし日、三ツ葉葵の世に時めきし頃のさまを世へだゝりぬらんと迪らるゝまで、樣かはりぬるかな。是より後も今を見たらんには又かゝふらんなど言ひて笑ふ。男の子等は、流石に刀脇差など持てさわぎ、ゆるぎありく眞似などすそは右にさすものにはあらぬをと母刀自のいふに、皆々どよめきぬるもおかし。姿は好むことゝて文箱の方受持ちつ。一つ〳〵に見持て行かで、とく〳〵と父君の促し玉ふ。とりひろげぬるを見給ひて、あなうたて汝が好めるふみのみ、日當り能き處には置つるよ、古き蟲喰みたらんやうなるをこそ干すべきにとこらし玉ふ。實に心つきなきことしてけりと、紙の色澁ひきたらんやうになりしをとうでゝ打開くに、如何なる人のすさびにや、松のけふりも匂やかに、花も咲らんふんでの運び床しう、紫の卷をかいつけたるなりけり。日頃いとほしく思ひつゞけたる書の、ゆくりなくも出でつるを、猶さがす程に卷すべてになりぬ。嬉しと言ふもなか〳〵なりや。己が家にありつるを知らで、心もてだへあなぐり求め步きしは。今さら口惜しうこそ、いざ今よりは古きをも捨じといへば、人皆に笑はれぬ。今年の虫干の爲め、思はず得たる書のいはれを、反古の端にかいつくるになん。

東京　山本梓子

去年は、松ふくかぜすゞしきわたりの海づらに、浜枕引ゆひて、都のちりにもまじらはざりしを、今年また、同じ所も心ゆかず。さりとて道かへむしなりも求めかたきまゝに、進むぐらいぶせき

うちにすごす事とはなりぬ。實にあらかれもとけぬべう、照日さかりのたへがたう、硯の海もかれがれにせんすべなく、文箱、かきまさぐり、出しみれば、しみのすみかに所得て、我はがほに、ひろごりたるむしのつゞりにくみてもなほたらはぬ心地す。さはれ、去年の夏とうてざりしわが怠もあればあながち罪おほすべきにもあらずかし。和歌の浦にかき集めたるもしほ草、昔ゆかしう覺ゆる文ども、めづらしきまゝに、かつ見かつひろげほすに、いづれも、この紙はむ虫の心にまかせたるいとくちをし。我からとねをなくむしならましかば、なつかしうもありなむを、これもいとゆゝしき虫のわざなりかし。

大阪　桝田益子

兼て契り置つる某が秘めたる書籍の虫干すと聞きて物しけるに、爰にもかしこにもしきつらねて、其數五つの車にも餘りつべく、牛も汗しゆべく、よくもかくまでに集りにたる物哉。書肆のぬりごめも、いかでかはと驚かれぬ。伴ひ來し翁のいへらく、おのれとし頃文讀む事を好めば、實に今日なん仙境に遊ぶの心地しつるとて、尙齒會の昔を指して、凡そ呉竹の世に幸といふ幸の數は多けれど、そが中にしも、五福を全うして上壽を保ちなんこそいみじう大なる幸といふべけれ。近き頃、世にも尙齒會といへる催あなるが、此設けは、石の上ふるき古人には、早くよりありきける成けり。清和帝の御代、貞觀の御時、南亞相山莊に於て尙齒會のまとゐをなし給ひ、其後藤原在衡ぬし催しぬ。前なるは是善の公、後なるは文時の公序を作り給ふ。こは樂天の九老會に倣はれしなりとぞ。やゝ程經ては、高倉院の承安の二年、清輔の朝臣和歌尙齒會を寶莊嚴院に於て行ひ、自ら假名の序を作り給ひ、又安德帝の養和の二年、賀茂の神主重保ぬしなし給ふと、何れも七叟にて、世に名うての人々になん。唐にては、香山の九老會を始め、宋李文正の至道九老會。宋杜衍の五老會。こは、睢陽五老といひ、錢明逸、是が詩序を作りぬとぞ。はた、宋文路の十二士の洛中耆英會。ついで司馬溫公の眞率會。いづれも老を喜びて、詩に歌に心をやり、堯夫の五樂、はた五事樂をたのしみて、野叟の三樂を悦ぶ成けり。抑五關を戒め、脩養の五宜をを守りて、生を攝するの七養、十二少、四要、四訣を物せんには、五つの勞六つのしゝらがしつるいたづきをも知らざるのみならず、親を養ふの五道、東坡疏食の三益にもかなひぬべし。など淺茅原つばらかに、青柳のいともねもごろに語りいでられぬ。此腹の内にも、文庫やあるらんと。唐の菓のごと紐ときさけて、照日にさらし給ひなんやと。人々とよめきたり。淀の眞砂の讀みつくすべくもあられば、あるじによろこひ述べて、歸りし後、かの翁の實をかきつめて、虫干の記となすになん。

伊豫　綠友子

いでや今日こそは、虫干せめと、母刀自ののたまふまゝに、朝まだきより、奥ふかう秘め置きにしさま〴〵の品をとり出して、端より竝べもてゆけば、時のまに我家は處せきまでに、書物あるは武器などをおき連れたり。古きもあたらしきもかく集へて、一目にみればなか〳〵に興あるものになんありける。日頃蟬などを捕へんとて外出がちなる清夫も、ひねもすとぢこもりて、いとめづらしげに祖父上のその昔用ゐ給ひしくさ〴〵の武器を指して、彼よ是よと問ひつ祖父上のねもごろにものかたり給ふをきゝてはといなつかしげに打見やり居しが、ふと立ちあがりて、祖父樣儂もきて見んとかたへのよろひに小さき手をかけしが、重ければ、まゝに成ざりしをかしさよ。妾も思はずほゝゑまれしが、此頃はたねかたき暑さに苦しみつゝ落せど、今日は殊の外風も通ひたればなか〳〵にいぶせしとも思はで、げに心ゆくわざなり。あすも

かゝらましかば、衣服などを干してんと妾のいへば、毋刀自もうなづき給ひて、いで暮れぬまにとくとくとせきたてられて、もろともに手早く納め移りしは、日も西の山のはに入らんとせし頃なりき。

長崎　八尾いへ子

年毎のためしに、古きものゝ本、衣類、調度虫干せんと、朝まだきより所せう置ならべ、綱にかけ渡し抔するに、羽もたる白き虫のにげまどひたるいとにくし。年々一度は見る物から、何れも目新しう、祖父の君の用ゐ玉へる衣類のこと様なるを、童のめづらかに指さし笑ふもをかし。いと虫ばみたるを懇に打ふるひ置たるに、風さへ吹きて虫もちりもはらひたる。いはんかたなうゆかしきに、きたなげなる猫の入りて、心地よげにいねたるぞはら立しき。父君たちのよませ玉へるから大和の本、或は水茎のあとなど見ては、いとゞ其昔の忍ばれて玉なす汁と共にすゞろ涙もこぼれけるよ。己れの學の庭に通ふ折かいつけたる草子を見出で、此頃文かく便りにもと、ことさらとうでゝ、机の上におきつれば、また世にあらはれしを、心あらばよろこびやせん。わがひもとさにきたりときく衣を見ては、あふげは高きはそばゝの木の下かげにおひたちて、こなたの年月惠みの露をかされつゝ、やう〳〵人となりしも、蚊が一のむくいさへなし得ぬぞおぞましき、げにうしろめたき限りになん。かゝれば今とう出たるものども、ひとつ〳〵におもひいれど、ともすれば虫ばみやすき心こそ。天つ日のくもりなきかげに、先ほさまほしけれ。夕日山のはにかたむきぬれば、それ〳〵もとの器に納むるにも、なき人のかたみと見れば、何となう名殘惜しうおもはれぬ。やがて湯あみしすのこ近ういざり出で、夕げたうぶる折から俄に夕立のきほひたるに、ひれもすたうましかりしあつさも種々のおもひも、一時にながしやりたらんこゝちぞしける。

肥後　德永廣子

日々のあつさたへがたく、此ころになりては、木の下かげをのみなつかしくて、朝な夕なに心やすく業をつとめけり。をりふし種々の虫干のことのいといそがれて、先書類を古よりのふるびたるもの新しきもありて、ここかしこの間ごとの日かげを撰みぬ。孔子孟子の書など、古びたるものゝあるが中に、孝經のありけるを早くも心づきて、とく讀なしけるに、上天子より下庶人にいたるまで、數多の人のおほくはまづしき家に父母に孝をつくし夫にみさを立てしことのふかくかんに堪へで、おもはず案をたたきてこゑをたてぬ我國にもかゝる孝子貞女のあまたあらはれる御代に、生れながらはづかしきことはわが行ひにこそ。今日の虫ぼしに如此貴書を見出しは、神の妾をいましめたまふならんと心にうかびて、恐なる身の行末をあらたむべきにこそ。

東京　名木山靜子

母君のみ言葉に從ひて、はしためどもと共に、鏡子、葛籠など打開き、おのがじゞ衣とうでゝ二階のあがりくちに、重れ置きつゝ「けふは是だけにて、あとは明日とこそ、てけも大方宜しかるべければ」とのたまふに、さらばとて出せし衣ども母君と共に棹にかけ渡しなどするほどに、南の窓より桐の葉ゆらめかせたるが、さと渡りきて思はず「あな涼しやな。」「姉樣」ッといつの間に歸りきにけん幼き妹の、お隣の春子チヤンとまゝごとすとて、出行きしが、我の二階にと見るや急ぎかけ登りつゝ、見まわし居たりしが、やがてはせよりて、己が衣とり出し、「母樣、いまこれきせて給はれ、私先に、お正月この亂菊の衣きて、羽根つきたりしよ。その時姉樣は、あの紫のなりき。どうぞ母樣きせて」とて、いとも好みたる黑地縮緬に、亂菊そめ出し

たる三枚重ね抱きてはなさず。「こは冬の寒き時にきるものよ。今は夏なればかゝるものきては人樣に笑はるゝぞかし」といとねもごろにのたまへば、やう〳〵にきゝ分て、殘り惜しげに手よりはなしたるが、しづかにたちて幼稚園にて教へられし桃太郎の唱歌、愛らしき聲に口ずさみつゝ、風涼しき手すりに凭りて、結ばぬ髮打拂はせつ。やがて「お孃樣、若子樣がお迎ひに」といへるはしための聲に誘はれて、急ぎ下り行きぬ。

涼しくさし渡りたる月影に、晝の程干せし衣、たゝまむと庭の松の梢に投げかけられし窓のそうじ打開きて、棹などそこゝこゝはづしつゝ折しも、妹の又も來りて手傳はんなどいひつゝ、同じ樣にたすきなどかけ、已が衣打たるみたる、縫目などもあはぬに、さらに頓着もなく忙がはしげにしたる。いとをかしともをかし。

雜報

●御救恤●●● 去月七日北海道石狩國夕張郡登川村火災に付、罹災者御救恤として、 天皇皇后兩陛下より、金五百圓下賜せられたりと承りぬ。

●凍傷者へ義手足を下賜せらる●●●●●●●●●●●● 青森步兵第五聯隊なる雪中行軍殘存者中には、凍傷の爲め手足を失ふもの少からず、さればにや御慈み深き 皇后陛下には夙に義肢製造人を同營に遣はされて、患部を調べ、之に恰當する義手足を作らしめ給ひしが、此程出來上りたる由にて、伍長後藤房之助(兩手兩足)村松文哉(同上)一等卒阿部壽松(同上)伍長小原忠三郎(兩足及手の四指)一等卒阿部卯吉(兩足及手の五指)後藤惣助(兩足)山本德次郎(左足)、夫々義手足を下賜せられたりと。聖恩海の如し。拜受者は何れも皆感泣措く所を知らざりしとぞ。

●西鄕侯の薨去 聖代輔弼の元勳なりし元帥海軍大將從一位功二級西鄕從道侯は、今春來二豎の犯すところとなり、靜に療養せられしが、去月十七日午后十時三十分、遂に薨去せられたり。享年

六十、葬儀は廿二日を以て施行し、青山墓地に葬りぬ。國家のため惜みても尚餘ありといふべし。

●●●●●●

●高等女學校の現況　文部省の調査に依れば、全國の高等女學校は八十にして、生徒二萬三千百八十八に達し、卅五年の卒業者總數は二千八百六十八なりといへり。

●●●●●

●三輪田女學校　女子教育家の泰斗たる三輪田眞佐子刀自が設立せられたる同校は、目下校舎遂〻築中なるが、本月下旬には悉皆落成するを以て、九月中旬開校式を行ひ、その際一年生より四年生まで各級通じて數百名を募集し、各官公立女學校及び正確なる私立女學校の生徒は、無試驗にて編入するよし。同校は麹町區四番町十四番地にありて、尤も閑雅靜粛の位置なれば、其修學に適するは論なく、かつ寄宿舎をば刀自々身監督せらるゝ、皆なれは、父兄等の憂なきのみならず、生徒は慈母の膝下に在る如き心地せらるべし。



●●●●●

●東京女學校　下谷東黒門町二二なる同校は、本年六月中旬の開設にして、教科は本科、專攻科、受驗科、裁縫教員養成科等より成り、本科は高等女學校と同一程度にして、專攻科は各學科を隨

意に撰修せしむるもの、又受驗科は女子高等師範、女子大學入學者の爲に學力を補習せしむるものなりと。總裁は鳥尾子爵にして、校長は元山形縣高等女學校長たりし折田重任氏、協賛員は高嶺女子高等師範學校長、上田大學教授以下數十名にして、教員は學士五名、女子高等師範卒業生三名、其他は何れも專門の有資格者數名にし、懇篤熱心に教授の勞を取り來りし由。九月よりは子爵自身毎月一回宛臨校して、生徒一同に修身上の講話ある由。又同女學校は、九月より寄宿舍を開設して、地方遊學者の便宜に供する筈なりとぞ。

●東京女子美術學校新築　湯本武比古氏の校長たる神田仲猿樂町東京女子美術學校にては、過般來新築中の處、近々竣功し、本月廿五日を以て更に現在の生徒に百五十名を增し、總數五百名の入學を許可すべしといふ。尤も落成披露は九月に入て後に之を擧行するよし。

●教員撿定豫備試驗　師範學校、中學校、高等女學校の教員撿定豫備試驗は、本月廿日より文部省及び各地方廳に於て行はるゝ事なるが、其日割、科目、受驗者數左の如しと。

八月廿日	地理	四四〇
	化學	四五
廿二日	西洋史	一九三
	物理	三八
廿五日	國語漢文	……
	植物	二四三
廿七日	教育	一五六
	鑛物	四二
	裁縫	三二九
廿九日	英語	二八〇
	兵式體操	……
九月一日	數學(幾何)	……
	毛筆畫	一一〇
十月六日	習字	三六〇

廿一日	日本史	三五一
	東洋史	
	農業	一一二
廿三日	國語漢文	五四三
	物理	……
廿六日	動物生理	一八二
	家事	一一四
廿八日	修身	三〇二
	普通體操	八八
三十日	數學(代數)	八五一
	用器畫	一三二
十月二日	數學(算術)	……
	鉛筆畫	五三
受驗者總數		四七六四

●檢定出願者の注意　中等教員豫備試驗出願者中、東京府を經て出願せる分は、着京次第文部省に出頭して、同省控席に備付ある帳簿に宿所姓名を記載すべしとの事、尙は受驗者は學科の種類に依て左の用品を携帶すべしといふ。

(幾何) 定木、コンパス

(習字) 三寸角及一寸角の文字を書くべき筆、小楷筆、墨汁、文鎮

(用器畫) ゴム圖引器械、三角定木ピン曲尺、

(鉛筆畫) ゴム畫用鉛筆、繪具及筆洗、小皿、

(毛筆畫) 面相筆、線書筆、墨、繪具、刷毛羽箒、筆洗小皿、

(外國語) ペン、ペン軸、インキ、吸取紙、

(裁縫) 針、鋏、篦、鯨尺の類

(簿記) 黒色インキ、赤色インキ、ペン、ペン軸、丸定木吸取紙、

(地理) 赤色鉛筆、青色鉛筆、

●生徒處分　文部省の調査に係る明治三十四年四月より、三十五年三月に至る全國高等女學校生徒の一學年間に處分を受けたる者の數左の如し。

懲戒したる者　六
　内　譴責　二　放校　一　戒飾其他　三
退學を命じたる者　六九
　内　性行不良　五　學力劣等　三
　　正當の事由なく一ヶ月以上缺席　六一
除名したる者　一一六
　内　授業料不納　二二　其他　九四

▲皮肉を削つて母を救ふ　名古屋市東柳町雲出つる子(十八)と云ふは、高等師範學校に入らんとて、目下同校補習科に於て修業中なるが、此程來母なる人の背部に腫物を生じ愛知病院に入院して局部を切開せしが、患部に植皮術を施さゞれば快癒に長日月を要し、其内には餘病の發せん虞ありとて、院長は兎や角やと評議の內、豫て孝心篤きつる子は、我が皮肉を削ぎ取りて母の患部に植皮せられん事を申出でたれば、院長も其志に感激し、直に其請ひを容れて、此の程鶴子の生皮を取り患部に植皮せりといふ。まことに感ずべきの至りならずや。

●村費を以て貞婦を養ふ　埼玉縣南足立郡西新井村大字元木五千二百四十六番地に、心細くも暮し居る福田なを(七十)といふ孤獨の老婆あり。同人

は越後北蒲原郡本明村の極貧の家に生れ、萬延年中福田萬吉と夫婦になり、維新の後元木村に世帶を持ち暮す内、明治十二年中より夫萬吉は腰も起たぬ重患となりしに、なをは夫思ひの氣質やさしく、かゝる難病の夫を介抱して一日も倦むけしきもなく、殆んど八年の間女の身一つに糊口の道を立て夫を養ひしが、中頃村の者に習ひて鰻釣の道を覺えしが、熱心は恐ろしく他人の及ばぬ名人となり、晝は居村を流るゝ荒川に釣に出で、夜は夫の看護に夜も眠らず盡せし眞心は誰も感ずる程なりしが、十九年の頃時の東京府知事渡邊洪基氏より褒狀と共に拾圓下賜せられし程なるが、二十二年中夫はつひに死去せしにぞ、殘る其身は一人の子とてもなければ、心淋しき月日を送りてこゝに七十七歲の高齡に達し、老病さへ併せ起りしに、今は鰻釣もならず、糊口の道も思ふに任せぬに村人はいたく憐れみて、かゝる婦德を全ふしたる老婆は村の譽ともなれば、養育院に送るに忍びず、いかで村費を以て晩年を安樂に送らしむべしと、此程村會を以て一決し、まづ五圓四十錢を醵金して惠與し、此後も一生村費にて養育すべしといふ。村人の擧も甚だ賞すべし。

●●●●●●

●篠田女史の奇特　篠田勢子女史は、今年一月より本鄕區森川町慈善學校生徒にして病痾に罹さるゝ者ある時は、渠等貧困の父兄を持てる身の然こそ難澁なるべしとて、施診與藥するのみか、此頃に至つては生徒の父兄、及び關係者にも此慈善をなし居れりと。尙ほ毎金曜日には、醫學博士三輪新太郞氏及び前田園子、大八木幸子等四五名の女醫を自家に招きて、彼の施療患者の爲め、臨床講義を催し居れりとは、誠に奇特の事といふべし。

●ヒユース孃の演說　福島に於ける同孃の演說は甚だ參考に資すべきもの多ければ、その大略を揭ぐべし。そも〳〵日本の教育は、著しく發達したれど、なほ完全といふべからず。故にこれ以上の設備を要し、改良を施すべきもの少なからざれど、その要點を擧ぐれば、

(一)智識はたゞに圖書のみによりて得べきにあらず。常にわれ〳〵を圍繞する事物によりても實驗的に之を得るやうにすべし。即ち自然と接近する事を勉めざるべからず。

(二)體育は人に尤も必要なるは論なけれども、日本人の如く、長時間勉强するは大に避けざるべからず。むしろ、暫時間勉强し、之を愈すだけの運動をなすに若かず。

(三)訓練を十分にすべき事。

(四)語學教授上、發音を初めに教へて、文字を後にすべし。

(五)日本固有の圖書を奬勵すべき事。

この外、學校には、之に附屬する圖書館及び博物館を設くるの必要なること、また從來學校にて屢々新舊思想の衝突あれば、是等をも改善すべしと述べられたりといふ。

●義足用の駒下駄(大隈伯爵夫人の新案)　大隈伯先年爆烈彈の爲めに右足を失ひ、爾來義足を用ゐ益々健康なるが、其義足に穿ち來りしは座敷を歩むにも庭前に出づるにも半靴に限りしものなるに、今回同夫人の新案にて下駄を用ゐるに至れりと。如何に醫術上進歩の世とは云へ、如何に義足製作の巧妙になりたる今日と云へ、肉足と義足との身體に於ける感應の快、不快は言ふを俟たざるべし。況して義足に靴を用ゐるの穿き脫ぎに不便なるは勿論、靴には踵の附するあるありて、歩行

中動もすれば左右にグラ〳〵して中心を失ふことあり、夫人朝夕伯の起居を扶け、眼前斯る不自由を察し、何物か適當なる靴の代用もがなと苦慮し居らるゝこと多年なりし結果、近來世間で用ゐ始じめたる彼の靴足袋につゝかける前鼻緒の交叉せる草履に思ひ付き、試みに之を伯に試ましめしに『トンだ工合のよいものだ』との成績を得しかば、更に一歩を進め、外出に適すべき疊付の駒下駄は右の如き鼻緒を交叉し、尚義足の他へそれんとするを拒がん爲め、紐もて踵を二重に卷きて、こはせにて止める迄工風したるを伯に勸めしに、穿き心地至極善しとて、過日來の雨の朝にも之を用ゐ居ると云ふ。而して其新案の下駄は至つて平凡なるも、世の義足を用ゐる人に取りては參考となるべきや言ふ迄もなし。夫人も伯が多年不便不自由の氣の毒なるを痛く腦底に刻み、苦心の末に斯く迄伯に滿足を與へしをこよなく打喜ばれしと同時に世の同じ患者の身を思ひ、セメて此の如き穿ち易き駒下駄あるを知らしめて、聊かにても其人の心を慰めなば、家人の喜びも亦我が喜びに同じかるべしと語り居らるゝと云ふ。尙右駒下駄は材料の何たるを問はず、唯々鼻緒の注意を要するのみなりとぞ。

●●髮飾　横櫛（サイドコーム）は近頃流行品の一にして、代價は五六十錢より三四圓までなるが、最も盛んに賣れるは、上等よりも下等よりも中の部に屬する一圓八九十錢の處なる束髮及び洗髮として評判よろしきは石入ヘーヤピンにて、是は四十錢以上四圓以下といふ。價格十三四歲の少女向きなるリボンは、巾二インチ位ゐ色合淺黃或は白が最も多く用ゐらるゝものゝ如し。花簪は、薔薇罌粟子等を模造せる藤色紫色若くは白色の類が流行し、價は十四五歲向き一圓八九十錢十七八歲向が一圓內外なりと。

落葉籠

▲妾は保守的婦人と笑はれても、婦人はどこまでも婦人らしく、お大人しくて、穩かで優しくて、しなやかにあるのが好きで厶います、米國婦人の樣に飛んだり跳ねたりするのは、活潑かは知りませんが、妾はしんそこからイヤで〳〵堪りません。(神戸むめ子)

▲女鑑第貳百五拾六號の口繪に出て居る、宮島ぬい子さんはじめ五人のお方の傳記は、いつ御出しになりますか、私は一日千秋の思ひで待つて居ります、どうぞ一時も早く出していたゞきたいものです。(薩摩ちじゅ子)

◎薩摩のちじゅ子さんに御答へ申します本號より每號順次に揭げます筈ゆゑ御目とめられてよく〳〵く御覽遊ばせや。(記者)

◎逗子も箱根も熱海も私はイヤで厶います、矢張り親の手許でチャンとして居るのが善いと思ひます、去年の夏期休日は私はお友達と一所に熱海に參りましたが、立派のお身成を遊ばした御奇麗なお孃さまが、若い男のお方と手を引き合ふて、白晝をも憚からず、これ見よかしに散步してお出で遊ばすのを見て呆れましたが箱根でも逗子でもこんなお方が多いと聞きましたから私はイヤになりました、これが文明流と申すものなら私は文明もイヤになつてしまいます。(赤坂大内貞子)

▲私は貧しい女學生で厶いますゆゑ、國許より參る金は月謝と書物の代に使つて了いまして、外の御孃さん方の樣に頭髮飾や衣類の仕度を奇麗にすることが出來ませんのは元より得心で厶ゐますがその爲めお孃さん方に笑はれ田舍者〳〵といはれるのが口惜う厶ります。(秋田生れ服部とり子)

▲默つて堪えて御出でなさい、頓がて花の開く時

節が來ることは請合です「深山木のその梢とも見へざりき、櫻は花にあらはれにけり」との古歌の意味をよく〳〵御味ひなさるがよろしい。(記者)

▲本誌へ和歌文章を投書いたす者は、悉く数の庭へ御かゝげ被下候哉。中にも没書致す者も御座



候哉。本欄にて御返事被下度候。(和香子)

▲それは、投書規則にたがはぬ以上は、没書にはいたしません。(記者)

▲私は女鑑落葉籠にて、よろづ御伺ひ致し居り候間、此頃はせはしき事御伺ひ申せしに、此四回ばかり御かゝげ下さらぬ故、師に別れし心地して、誠に悲しく候間、何卒此度は必ず御かゝげ給はり度、右御願へ申上候。(信濃愛讀者)

▲以前休載しましたのは紙面の都合上已む得なかつたのでありますが、この後は、毎號掲載するやうにしますから、盛に御投書を願ひます。(かゝり記者)

▲一寸御伺ひ申します。女子高等師範學校は、官費ですか自費ですか。そして所在地は何方でありますか。又卒業年限は何ヶ年で、尋常師範卒業です

ぐ入學ができませうか御存じの御方に御尋ねいたします。（靜岡松江子）

▲私は、堀内先生の御著述の少女讀本をよんで見ましたが、まことにおもしろく、卷の終るを知りませんでした。この次に出る月の卷と雪の卷とが待ち遠しくてなりません。（伊豫とし子）

●新刊略評

◎斷腸花（堀内新泉著）　斷腸花はひめもゝ、わかば、秋の山里、あわゆき、うぐひす抔いへる十種の短篇小説を集めたるものにて、いづれも、それぞれの特色なきにあらねど、概して情を以て迎へ愛を以て讀み、涙を以て送るべき悲哀斷腸の文字たるは則ち一なり、著者の筆が常に家庭なる一小區域の内に限られて、變化、波瀾、出沒等の奇趣なきにも拘はらず、なほ讀者をして一讀卷を掩ふ能はさらしむる所以のものは、一種美妙の情愛の文字の裏に籠りて紙上に溢るればなるべし、例へはわかばの句中に

かあさんかあさん今いちど
おかほを見せててうだいな！
それが出來ない、やうならば、
せめては、この兒に、ひとくちの
お乳を、のませて、てうだいな！」
おはかの、まへで、きやうだいが、
泣いても呼んでも、母さんの、
お顔も見ゐれば、こゐもせず
しだい、しだいに、日がくれて
はか場はやみになりました。

の如き、意も平凡、句も平凡なれど、讀み去りて哀れを感じ吟じ來つて、涙を催さゝるを得ざるは、唯だ眞情の人を動かすものあるが爲めのみ、家庭夏期の讀物として、兒女座右の伴侶にして、適當の書籍なりといふを得べし、（定價金貳拾五錢郵稅四錢、芝區金杉川口町五番地文潮社發行）

◎女性征伐（女鶴子著）　其の女子大學と題する一節に曰く「女子大學校設立者もなくてはならぬが今の處では、いくら女學士が出來ても、男學士の缺を補うて文學なり政治なり法律なり工業なり醫術なりの各部面にはたらいて貰ふわけにもまゐりますまいから臺所方面に向つて働いてもらはう、どうぞ女子大學校に料理學士裁縫學士を續々養成して出してもらひたい」とあるは稍々聞くに足るべし、但し全篇を通覧するときは、何んとなく、物足らぬ心地せらるゝは惜むべきなり（定價金貳拾錢本郷區森川町育成會發行）

◎割烹科教授用惣菜三百種（井上善兵衛述）　此書は著者が共立女子職業學校割烹科に於て傳授したる實習筆記の中より三百餘種を選みたりしのにて主として野菜、豆腐玉子などの料理を記せしは朝夕日用の實習に充てん爲めなるべし、徒らに高尚なる献立のみを記して、實用に遠きものに比すれば、興味も實益も極て多きを疑はず（定價金四拾五錢、京橋區銀座壹丁目大日本圖書株式會社發行）

◎そのえにし（鈴木秋子著）　東洋社にて發行する家庭小説の第三編なり戀愛を以て全篇の骨子とせるは家庭の讀物としてやゝ惜むべしと雖も趣巧も一寸面白く文章も簡潔にして平易なれば午睡の友として餘ありといふべし、附錄には山茶花、夜道など數種の短篇小説あり、製本も小奇麗に出來て居るが、表紙に鷄を描きしは、マサカ牝鷄晨をつぐるとの寓意にもあらじと思はる（定價金貳拾錢神田區鎌倉町三番地東洋社發行）

◎公人の思想（リギョル講演前田長太通譯）

◎四ッ目屋事件と現今の學況（同上）

◎中學教科西洋史の謬論（同上）

孰れも一小冊子なれども、議論正確にして一讀の

價わり、別て公人の理想は吾國朝野政治家の爲に好模範を與へたるものといふべし（定價孰れも六錢本郷區湯島一丁目十三番地昌平館發行）

口繪について

●●●●●●

●戸田伯爵夫人　夫人名を極子と稱す。贈大政大臣岩倉具視公の第二女也。幼にして三輪田眞佐子刀自の薫陶を受け、女子必要の學問はもとより和歌管弦の道にさへ暗からず、殊に徳高うおはして慈仁の心に富み給へり。舊大垣の藩主戸田氏共氏に嫁するや、琴瑟よくかなひ、常に夫を助けて内顧の憂なからしむ、よく一家を修めて家庭の和輯せること春の海のごとしといへり。外に向つてまた力を盡され、數多の慈善會等に金品を寄附せられしこと甚だ多く、愛國婦人會其他の婦人團體に役員として、我國女子教育進歩上與つて力あり。かつて伯の外國公使たりし時、從つて海外萬里の遊をなし、歐洲文明を目撃して、得るところ尠からず加ふるに夫人の天資の温良にして慧敏なる、華族中實に重をおかるゝといふ。

●田中花子刀自　刀自は東京女學館及び立教女學校講師として英語を擔任し、生徒の敬慕するもの甚だ多しといふ。

●小寺あや子刀自　刀自の祖父は、小寺翠雨と呼び、舊大垣藩に仕へて蘭學者たり。さればにや刀自幼より學を好み、滿三歳にして女子高等師範學校附屬幼稚園に入り、更に小學校に進み、半にして東京府第一高等女學校に入れり。卒業の後、間もなく女子高等師範學校に入り、明治卅三年四月業を終へ直に東京府第二高等女學校に職を奉じて今日に及べり。更に音樂繪畫等を教へ、時に嚴

なる事なきにあらざれども、常に生徒に接するや我子の如く、慈愛を以て主義せしかば、生徒刀自にあつき慕ふとぞ。

●卒業生　（二百五十二號參照）華族女學校にては去月十二日卒業式を擧行せり。卷頭にかゝげたは即ち其卒業生の寫眞にして氏名は左の如し。

全科卒業生（姓名イロハ順）

稲葉壽子、稲生季子、石井登幾、石田美節、波多野峯、西尾いく、高崎てろ、高山志子、堤定子、土屋春、中村徳歸子、南部敏子、村山愛子、魚住芳子、柳谷末子、山越まき、山尾龜子、前田せつ、古賀たま秋山とし、坂寄みつ、木村はま子、三善千代子、平佐婦美、木尾章子、關淑子、關季子

別科卒業生

吉岡茂登

●伊香保温泉場　山の中腹を拓きしものにて南に山を負ひ西は溪に臨み東北の二方は開豁にして遠く田園を見晴し景色頗る佳し。廣袤東西三町南北四町餘、戸數五百ばかりなるが家屋は皆崖へ石垣を疊み其上に建連ねたれば一段は一段より高く其状楷梯を斜に立掛けたるが如く、冬季霜雪の多き故にや瓦屋根は至つて少なく柿葺のもの多し南北の中央にある一條の坂路を仲通りと稱へ、此外左右に裏町ありて上の方を上町といひ、下の方を下町といふ。温泉宿の内聚遠館、挹翠館、香山樓、仁泉亭、岫雲樓、鑛榮館、香雲館、浴蘭樓諸暢樓、森田館の十軒を大家と稱す、旅籠料は案外安價にて一等四拾五錢二等三十五錢三等廿八錢座敷料一週間一等七圓より五等一圓五十錢まであり此外旅店二十六戸あり温泉は市街の南方凡そ八町の谷間より湧出し泉源に在りては華氏の百三四十度あれども樋を伏せて各温泉宿の浴室に導く間多少の溪水混入して適宜の温度となる、泉質は純粹なる炭酸泉にして胃弱、僂痲質斯、白帶下、月經不順、貧血症、皮膚病、神經痛等に効驗多しと聞く。此地近傍には物聞山、船尾山、御影の松

箕輪の城趾、ガラメキ温泉、三ッ嶽の蒸風呂等の名所舊蹟あり。

●榛名神社　本社祭神は彦由支命にして創建の年月社傳ともに詳かならず、古へは山に三千百坊を有し幕府時代東叡山に屬せし由なるが今は神官の奉仕する所となれり、石段の中途に神輿殿あり又登れば双龍門あり八棟造にして椽に龍を彫れり、其傍に柱の如き大岩屹然として立つ、之を鉾が嶽と云へり、元來此社地は都て岩石を切開きたるものゆゑ到る處に巨巖大石の突兀として立ち並びたる頗る奇なり、双龍門より右折すれば即ち本社及び拜殿に抵る、本社の背後に一巨巖あり其形人體に似たり之を御姿岩と云ひ頂上に幣を立て神として祭れり。伊香保より榛名神社まで里程二里二十五町山道車を通せず老幼婦女は駕輿を雇ふべく、健脚の者は徒歩にて行くを便とす。

新刊寄書

料理講義錄	一	東京	大日本割烹學會
兒童研究	五ノ四、五、	同	敎育研究所
少年世界	八ノ八、九、	同	博文館
婦人と子供	六、七、	同	フレーベル會
偕行社記事	一九二、三、	同	偕行社
令德	六、七、	同	令德會本部
婦人世界	十三、四、	大阪	浪華婦人會
六合雜誌	二百五十八、	東京	日本ゆにてりあん會
慶應義塾學報	五十三、四、	同	慶應義塾
六合雜誌	二五九	同	日本ゆにてりあん會
體育	百〇三、四	同	日本体育會
新聲	八ノ一	同	新聲社
女子の友	百十七、八九、	同	東洋社
兵事雜誌	七ノ一三	同	兵事雜誌社
國學院雜誌	六、七、	同	國學院
小天地	二八、九、	大阪	金尾文淵堂
東京經濟雜誌	一一四〇	東京	東京經濟雜誌社
大福帳	十、十一、	名古屋	丹心館
家庭雜誌	二ノ七	同	家庭發行所
刀劍會誌	廿一、	東京	刀劍會本部
白虹	六、七、	同	白虹社
日本婦人	三二	同	帝國婦人協會
商家之友	三、四	東京	時事新報社
中央公論	七、	同	反省社
青年議會	五ノ一	同	帝國青年議會
婦女新聞	百一、	同	婦女新聞社
女學世界	二ノ九	同	博文館
敎育新聞	一ノ四	同	敎育新聞社
むさしの	三一	同	東洋文學會
流行	一〇八	同	流行社
法の母		同	夫人正法會

女鑑歌文月次兼題

八月廿日　歌　野草花　八月八日〆切

文　雪月花の優劣を問はれしに答ふる文

九月五日　歌　名所月　八月廿三日〆切

文　郊外散歩

九月廿日　歌　夕鹿　九月八日〆切

文　弟を誡むる文

懸賞

天には三册(一月半分)　地には二册(一月分)　人には一册を贈呈す。

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。字餘り歌は此限に非ず。

文書式

題　住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き様、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なに人にても、随意に投稿する事を得

○兼題を天地人の三才に分つ

わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓つて根治**すること確證す殊に本劑にて一且全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑也▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらん事を乞ふ

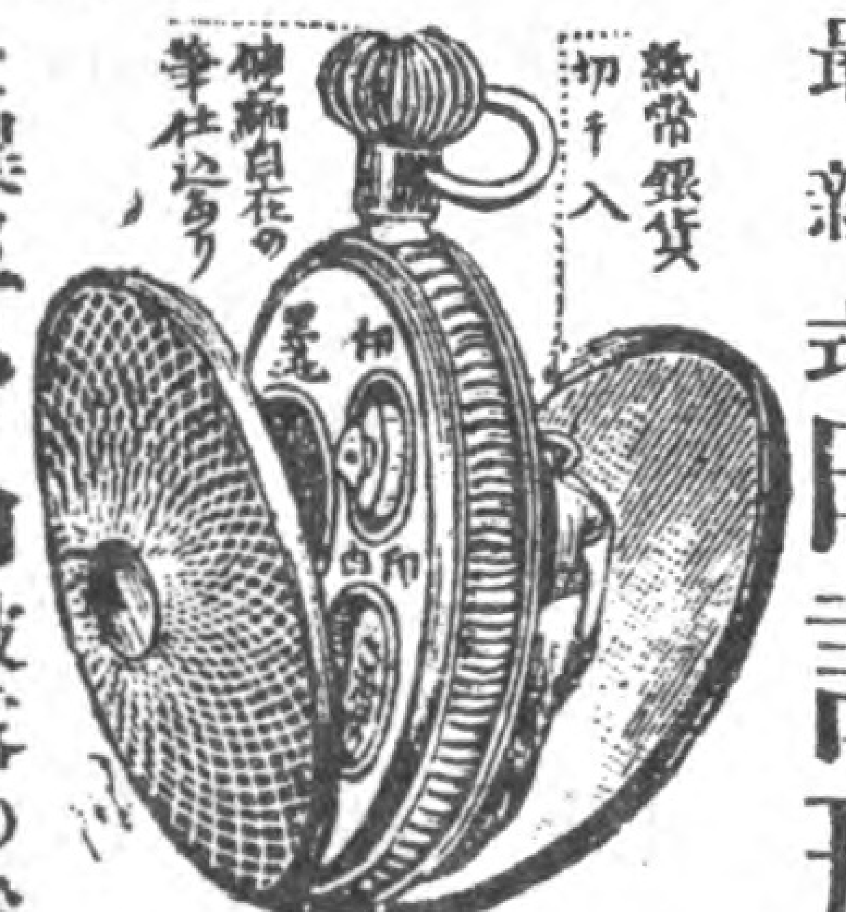
專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二五四六番）

肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

大改良 最新式 時計形文具 兼用 錢入發賣



本品は圖の如く龍頭無雙ニッケル側十九形兩蓋開きにて一面は**文具**墨池肉壺檢印等を備へ一面は**錢入**銀貨銅貨紙幣印紙等を入る龍頭は伸縮自在の**筆**を仕込み體裁頗る優美にて當時流行の**薄形**時計と異ならず**景品**披露の爲め千個限り時計鎖を進呈す▲特別上等製美術浮彫り兩蓋開き九拾五錢上製八拾錢小包送料百里內八錢百里外十六錢の割にて添の送事▲切手代用必ず二割増し▲着金即刻送品す▲代金引換小包郵便は面倒手數に付一切御斷り申候事▲着金の上に非ざれば決して送品致さず候

專賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新館商店**

家庭小説
第参編

鈴木秋子新作

そのえにし

●表紙 一條成美

●口繪 田口年信

紅薔薇のかをり世に高き秋子女史が、更に才想を練り才筆を揮はしたるもの、やがてそのえにしの一篇となりぬ。あはれそのえにし、何のえにしぞ。人世の不可思議、猶この若く美しき妻美須惠に、何ものをか與へんとする。

發行所 東京神田區鎌倉町（電話本局二七二一） 東洋社

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

十一版

女子の本分

彩色摺表紙大
和綴菊版美本
全壹册定價金廿
五錢郵税金六錢

曩に三輪田刀自我邦女子道德の敗頽に赴き日に甚しきを慨し本邦固有の道德に基きて此書を著し以て我邦の婦女子に其本分のある處を示さん事を期せらる本社の一たび之を世に公にするや忽にして再版三版を賣盡し八版九版猶需用を充たすに足らず以て女子教育の爲聊貢獻する處ありしを喜ぶ今や時廿世紀に入り國運日に進み益女德を涵養し貞淑質良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめん事を望むや切なり

今や本社はまた**第十一版**を發行し附するに女史の肖像詠歌傳記其訂正を請ひて其完全なるは敢てこゝに言はずたゞ一讀して其眞價値を知り給はむことを

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋二六九三番　**國光社出版部**

近刊豫告

少年武士道史傳

全部八册菊判美本◎一册定價金拾九錢郵税金四錢

第參編

本多平八

文學士 笹川臨風著
飯沼珠城畫

口繪 平八郎馬に飲ふの圖 彩色密畫 他挿畫數葉

豊太閤は第關東一の武邊者と稱し東照公は我等の分身と愛で玉ひ慓悍勇武の甲州武士をして『家康に過ぎたるものが二つあり唐のかしらに本多平八』と歌はしめたる絶代の英雄三河武士の摸型なる平八郎忠勝は笹川文學士の妙文と飯沼畫伯の彩筆によつて紙上に活現せり、試に一本を座右に置て朝昏誦讀せば遊惰の氣を一掃して敵愾尚武の志を發揮することを得べし

◎第壹編 既刊 **山中鹿之助** 文學士 大町桂月著 飯沼珠城畫

◎第貳編 既刊 **上杉謙信** 文學士 三好物外著 飯沼珠城畫

◎第四編 小早川隆景 田岡嶺雲著

◎第五編 立花宗茂 文學士 白川鯉洋著

◎第六編 木村重成 法學士 太田蒼溟著

◎第七編 山鹿素行 國府犀東著

◎第八編 大石良雄 文學士 中内蝶二著

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 株式會社 國光社出版部

本書に對する新聞雜誌批評一斑

◎每日新聞評　堀内泉子の雅馴の筆に成れる家庭讀本にして、最と面白く且つ有益の冊子なり、目次花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等なり

◎萬朝報評　まじめな所があつて先づ／＼善い讀本と云はねばならぬ。

◎婦女新聞評　家庭小說を以て一旗幟を立つる堀内新泉子の著にして十三四の少女に讀ましむるため純潔なる短篇小說數種を集めたるものなり面白くをかしくまた哀れに悲しき間教的意味を含ませて娘たり妻たり母たるものゝ心得を說きたれば家庭の讀本として最上のものならん續いて出づべき月の卷雪の卷こそ待遠しけれ。

◎教育時論評　家庭向の著書、花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等の諸篇あり、家庭教育の一助とすべし

◎中央公論評　家庭讀本老人讀本を著はしたる氏は又少女讀本を著はせり、アドケ無き物語中自然に教訓を含む家庭の讀物として最も珍ずべし



サア／＼皆さんお買ひなさい！
先づこの本の特色は、第一孃さん達のためになるお話ばかりを集めたのと、第二には面白いのやら、悲しいのやら、又勇しいのやらいろ／＼あるお伽話の中に、みな一／＼修身の教のこもつて居るのです。その外まだ面白い唱歌もあれば、球歌などもありますが、何れも世にありふれたものとは、丸でかはつて居りまして、この度著者が深切に皆新しく作つたものばかりでございます。
サア／＼皆さんお買ひなさい！

壹冊　定價金拾八錢　◎郵税金四錢

東京市京橋區築地貳丁目
發行所　國光社出版部

製本出來

小松宮彰仁親王殿下題辭　内務大臣内海男爵題辭
前内務大臣樺山伯爵題辭　賞勲局總裁大給子爵題辭　内務大臣官房編纂

明治國民龜鑑

定價金貳圓

本書は明治十四年發布の褒章條例により紅綬綠綬藍綬の褒章を賜はり其善行を表彰せられたる者の傳記にて之が編纂の任に當れるは我文學界に名聲高き文學士大町桂月君ゆゑ字句流麗文章平易毫も難澁難解のことなく叙寫傳神の妙を極めたれば、孝子順孫節婦義僕を始め、一身の利害を顧みず専ら力を公同の事業に致し、若くは實業の發達を圖れる有志家、及び萬死を冒して他人の生命を救助せる義俠者等の面目鬚眉躍如として紙上に現れ、其志氣節操義烈の行爲を眼前に見るの思あらしむ、實に國民必讀の要書なり、本社今回原本の御下附を請ひ得つ精巧の活版に附し總傍假名附として婦女童幼にも讀易からしめんことを勉め、極めて廉價を以て販賣することとせり今回製本出來す大方の諸君速に御購讀あらん事を乞ふ

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　株式會社　國光社出版部

明治三十五年八月五日發行　毎月二回五日廿日發行　第貳百五拾八號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

二八水は

肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひゞ●すべて肌のあれおしい下に用ゐて尤もよし

又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり（中瓶一本十五錢）



登録商標



本品縮圖

花王石鹼

●品質ノ善良ト衛生ニ經濟ヲ旨トシテ製煉シ洽ク好評ヲ博シタル佳品ナリ

發賣本舖

東京日本橋區馬喰町二丁目

長瀬富郎

（電話特浪花九二二）

東京[illegible]地貳丁目株式會社國光社印刷部印刷